第18回高大連携教育フォーラム　報告集

「教育の接続」としての入試改革Ⅱ

～高校教育の指導と評価が変わる
―高校・大学は入試と教育に
どう向き合うか～

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第18回高大連携教育フォーラム　報告集

「教育の接続」としての入試改革 Ⅱ

～高校教育の指導と評価が変わる
―高校・大学は入試と教育に
どう向き合うか～

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

目　次

開会挨拶　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

林　信康（京都高大連携研究協議会運営委員長／京都女子中学校・高等学校校長）

趣旨説明　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都高大連携推進室長／京都府立大学公共政策学部准教授）

発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

事例報告①　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り
～今、輝きの瞬間（とき）～

澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）

発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

事例報告②　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

資質・能力の育成に向けた１０年の授業研究の歩み
～ＰＩＳＡ型学力と探究力の育成をめざして～

田中　昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）
池田　　径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）

発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

事例報告③　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

千葉大学の高大連携・接続教育改革の歴史
～グローバル理系人材育成力強化を目指して～

野村　　純（千葉大学教育学部副学部長（研究推進、国際交流）・教授）

発表資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

パネルディスカッション　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

高校・大学は入試と教育にどう向き合うか

パネリスト　澤井　洋一・田中　昌一・池田　径・野村　純

コーディネーター　細尾　萌子（大学コンソーシアム京都高大連携推進室コーディネーター／
立命館大学文学部准教授）

第１分科会【国　語】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

論理的思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造
ー教科の枠を超える論理力ー

谷本　寛文（京都光華女子大学准教授／京都大学特任准教授）
山本　亮至（京都光華中学校/高等学校教諭）
藤岡　文彦（京都光華中学校 /高等学校教頭）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

第２分科会【地歴・公民】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

地歴・公民科の学びを通じて育成したい資質・能力

海老瀬将太（京都府立鴨沂高等学校教諭）
徳永　俊太（京都教育大学大学院連合教職実践研究科准教授）
藤田　五樹（京都府教育委員会高校教育課指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

第３分科会【数　学】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

数学的な見方・考え方を働かせるということ

河崎　哲嗣（岐阜大学教育学部准教授）
吉田　和馬（京都市立塔南高等学校教諭）
岡本　弘嗣（京都市教育委員会指導部学校指導課指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97

第４分科会【探　究】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107

学習者自らの問いづくりによる探究学習のデザインと実践

西山　周平（西山企画代表）
平野貴美枝（FF ENGLISH 代表／NPO 法人ハテナソン共創ラボ理事）
佐藤　賢一（京都産業大学生命科学部教授／NPO 法人ハテナソン共創ラボ代表理事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109

特別分科会①【アドミッション専門人材開発】 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 119

第４回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会（京都会場）

立脇　洋介（九州大学アドミッションセンター准教授）
植野　美彦（徳島大学高等教育研究センターアドミッション部門教授）
山本以和子（京都工芸繊維大学工芸科学部教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～実行委員会方式となり何が変わったか～

杉岡　秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）
鮫島　輝美（京都光華女子大学健康科学部准教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129

参加者アンケート結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143

2020 年度京都高大連携研究協議会役員・委員一覧 ・・・・・・・・・・・・・・ 150

※各登壇者の職名は 2020 年 12 月 5 日時点のものです。

開会挨拶

▸ 林　信康（京都高大連携研究協議会運営委員長／京都女子中学校・高等学校校長）

ただいまご紹介にあずかりました、京都高大連携研究協議会運営委員会委員長、京都女子中学校・高等学校校長の林でございます。「第 18 回高大連携教育フォーラム」の開催にあたりまして、主催者を代表しまして、一言ごあいさつを申し上げます。

本フォーラムは、毎年、高等学校・大学間の接続教育における国内動向の情報共有と、京都における取り組みの情報発信および事例研究を目的に開催しております。今年度は、昨年度に引き続き「『教育の接続』としての入試改革」をメインテーマとし、高等学校の新学習指導要領で示された３観点評価や、大学での総合的・多面的評価を擁する大学入学者選抜を踏まえ、「高校教育の指導と評価が変わる―高校・大学は入試と教育にどう向き合うか」をサブテーマに設定いたしました。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況を受け、本フォーラムの登壇者および参加者の皆さまの健康と安全の確保、また感染症拡大防止の観点からオンラインでの開催とさせていただきました。初めてのオンライン開催のため、不手際があるかもしれませんが、何とぞご容赦いただきますようお願いいたします。

また、オンライン方式にも関わらず、全国から高等学校、大学の教職員、教育関連の方々や学生の皆さまにご参加いただきましたことを、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

本日のフォーラムが皆さまにとりまして新たな発見の場となり、これからの教育活動に生かしていただくことができるよう、実りある機会となれば幸甚に存じます。

結びにあたりまして、ご多用中にもかかわらず、このフォーラムのご登壇をご快諾いただきました諸先生方、またご参加いただきました皆さまに心から感謝を申し上げますと共に、皆さまのますますのご健勝と今後のご活躍を念じまして、開会のあいさつとさせていただきます。本日は、ありがとうございます。

趣旨説明

「教育の接続」としての入試改革Ⅱ
～高校教育の指導と評価が変わる―高校・大学は入試と教育にどう向き合うか～

▸ 長谷川　豊（大学コンソーシアム京都高大連携推進室長／京都府立大学公共政策学部准教授）

皆さん、こんにちは。大学コンソーシアム京都高大連携推進室の室長を務めています、京都府立大学の長谷川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

（スライド１）今日、この第 18 回フォーラムの開催にあたり、趣旨説明を仰せつかっていますので、この間の高等学校の教育、そして大学の教育改革、入試の改革等につきまして、お話をさせていただきます。

（スライド２）本フォーラムの趣旨です。予測困難な新たな時代のことも含めて、決して後戻りすることがないであろうニューノーマルという新たな状況、ウィズコロナ、ポストコロナといった時代は、１年前には予想だにしていませんでした。このようなことも含めて、社会の大きな変化の中でどのように生き抜いていくのかという高校教育や大学教育のあり方が問われています。

高校では、令和４年度から年次進行で、新学習指導要領に基づく授業が実施、そこで示された「育成すべき資質・能力の３つの柱」に沿って「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点で評価することになっています。他方、大学では、今年度から行われます、大学入学共通テスト、そして、明確な入学者受け入れの方針に基づいて、「学力の３要素」を多面的・総合的に評価するように大学入学者選抜を改善していく状況になっています。とりわけ強調される「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を、大学入学者選抜の中でどのように評価していくのかが大きく問われています。

（スライド３）簡単に経緯を確認しておきます。2014 年の中教審答申を受けて、2015 年、2016 年と高大接続のあり方を問う報告・議論が行われてきました。「高大接続改革」と言われ、これらは高等学校教育、大学入学者選抜、そして大学教育の「三位一体」の改革として語られます。

（スライド４）一方、この間、小・中・高等学校の学習指導要領の改訂が行われ、そこでは「育成すべき資質・能力の３つの柱」である「生きて働く知識の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」、これらを子どもたち、次の世代に育成すべきと掲げ、そのためにどのようなカリキュラム、そして教育方法等を提示していくのかが問われました。この点について

は、第 15 回、第 16 回のフォーラム「いま育成すべき力は何かをともに考える―高等学校・大学の役割―」において追求してきたところです。

（スライド５）大学入学者選抜改革については、昨年度の第 17 回フォーラム開催のころ、英語の４技能評価への民間検定・試験の活用の中止であったり、国語や数学の記述式問題の導入が取りやめになったりと、共通テストに関わって大きな変更がありました。また、今年の夏、個別選抜にも関わる、主体性等評価のツールである「JAPAN e-Portfolio」の運営許可が取り消されるなど、大きな改革が予定通りには進まず、少し早急ではなかったのかなどと問われたところです。

ただ一方で、これらの改革が全くなくなったわけではなく、その後「大学入試のあり方に関する検討会議」「大学入学者選抜における多面的な評価のあり方に関する協力者会議」などの会議が次々と立ち上げられ、かなり頻繁に会合が開かれ、検討されてきています。これまで進めてきたところを、もう一度、問い直し、さまざまな議論が出ていると思います。

とはいえ、新しい学習指導要領に基づく授業が、高校の場合は 2022 年度から始まり、2024 年度（令和６年度）実施の入試にも反映される関係で、できるだけ早い議論、そして大学入学試験に関わる方針を示すとされています。

（スライド６）大学入学者選抜の区分については「ＡＯ入試」が「総合型選抜」、「推薦入試」が「学校推薦型選抜」、「一般入試」が「一般選抜」という名称に変わりました。選抜にあたってさまざまな変更があり、入試を通じて、高校教育の成果をどのように大学教育につなげていくのかがより問われてきています。

（スライド７）先ほど、申し上げましたように、今、文部科学省の検討会議や協力者会議、あるいは大学入試センターでも今後のあり方を巡って検討が進められています。いつまでも検討し続けることはなく、課題であった中身についてしっかりと提示されてくるはずです。

（スライド８）先日、私の大学で推薦入試が行われましたが「調査書」の様式が随分と変わりました。画面が少し小さく見えにくいですが、昨年度までの様式に比べ、かなりの項目が書き加えられており、担当者は一つ一つ確認していました。このように調査書の様式が大きく変わったことで、学校現場の先生方は、実際、記述等にかなり悩まれているかと思われます。実施してみて、学校によって、先生によっての違いも随分と見られたところです。

（スライド９）具体的に言いますと、昨年度の調査書から、赤い文字の部分ですが、より詳細に注意事項が書き加えられており、一人一人の生徒の活動内容を提示する、大学に伝えることを学校の先生方がされています。このようにして高校から大学へつなぐ形の調査書が出てきています。その形を高校側から受け取る大学側ではどのように評価するのでしょうか、またそれをしっかりと受け止める入試改革になっているのでしょうか。まだまだ検討途上、模索中だと言えると思います。

（スライド 10）これらを踏まえ、今後、高校教育において、指導と学習評価をどのように改善していくのかが問われています。大学では、高校で育まれてきた資質・能力を大学入学者選抜でどのように評価して、大学教育につなげていくのか、が大きな課題になっています。

昨年度に引き続き「『教育の接続』としての入試改革」のⅡとして、今日はこの後、第１部にて京都と大阪の高校、そして千葉大学の先生をお招きして、各実践のご報告をいただきます。第２部では、６つの分科会を今日、明日に分かれて開催していきます。

例年にないオンライン方式による開催、２日間にわたるフォーラムとなりますが、どうか、全集中してご参加いただければ幸いです。

以上です。どうもありがとうございました。

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都高大連携推進室長／京都府立大学公共政策学部准教授）

スライド1

第18回高大連携教育フォーラム

「教育の接続」としての入試改革Ⅱ

～高校教育の指導と評価が変わる
―高校・大学は入試と教育にどう向き合うか～

趣旨説明

大学コンソーシアム京都 高大連携推進室
長谷川　豊（京都府立大学）

スライド2

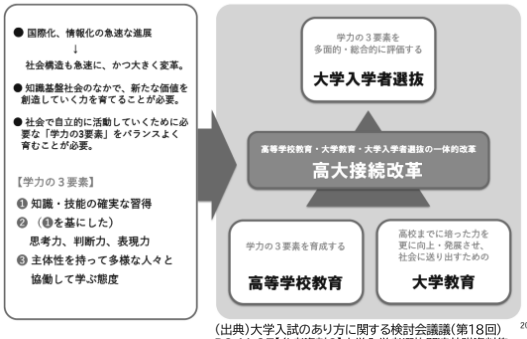
本フォーラム趣旨（前半）

- 予測困難な新たな時代に向けて、社会の変化を見据えた生きる力を育むために、高校教育や大学教育の変化が求められている。
- 高校では、令和4年度から年次進行で実施される新学習指導要領で示された「育成すべき資質・能力の3つの柱」に沿って、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価することになる。
- 大学では、大学入学共通テストの導入や明確な入学者受け入れ方針に基づき、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価するものへと大学入学者選抜を改善していく必要がある。

スライド3

「高大接続改革」＝三位一体の改革

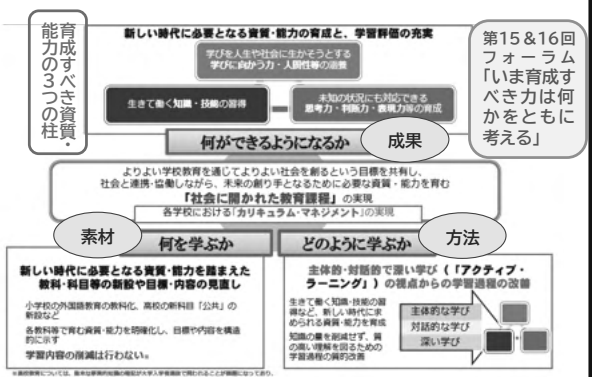
2014中教審答申　2015高大接続改革実行プラン
2016高大接続システム改革会議「最終報告」



（出典）大学入試のあり方に関する検討会議議（第18回）
R2.11.27【参考資料2】大学入学者選抜関連基礎資料集

スライド4

学習指導要領改訂の考え方　2016中教審答申 2018高校改訂



スライド5

大学入学者選抜改革　この間の動向

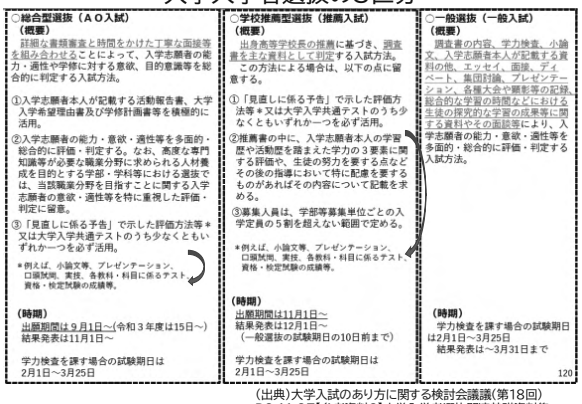
◆「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する入試に転換
◆「大学入学共通テスト」2020年度開始　2024年度新学習指導要領対応

	【これまで】	➔	【2020年度～】
共通テスト	マークシート式問題のみ	記述式問題（国語・数学）の導入	マーク式問題の工夫・改善 記述式出題は「大学入試のあり方に関する検討会議」の検討事項に
共通テスト	英語「読む」「聞く」のみ 配点：筆記200点リスニング50点	4技能評価へ転換　民間の資格・検定試験活用	リーディング100点、リスニング100点の配点 英語4技能の評価は「大学入試のあり方に関する検討会議」の検討事項に
個別選抜	学力の3要素が評価できていない入試 早期合格による高校生の学習意欲低下	主体性等評価ツールの高大接続ポータルサイト「Japan e-Portfolio」運営許可取消	■総合型選抜（AO入試）・学校推薦型選抜（推薦入試）における、小論文、プレゼンテーション、教科・科目に係るテスト、共通テスト等のうち、いずれかの活用を必修化 ■調査書の記載内容を改善 ■出願時期：総合型選抜は9月以降に 合格発表時期：ルール化 ■「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価は「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」の検討課題に

第17回フォーラム「『教育の接続』としての入試改革」

スライド6

大学入学者選抜の3区分



（出典）大学入試のあり方に関する検討会議議（第18回）
R2.11.27【参考資料2】大学入学者選抜関連基礎資料集

スライド7

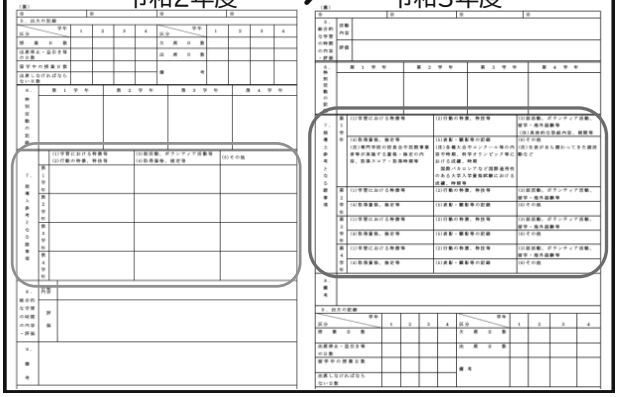
●大学入試のあり方に関する検討会議(令和元年12月～)
検討事項（1）英語4技能評価のあり方（2）記述式出題のあり方（3）経済的な状況や居住地域、障害の有無等にかかわらず、安心して試験を受けられる配慮（4）その他大学入試の望ましいあり方
※(4)の内容追加 ☚ウィズコロナ・ポストコロナ時代の大学入試のあり方
☚第1回大学入学共通テスト等の実施状況を踏まえて

●大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議(令和2年2月～)
➢「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価する多面的な評価に関する具体的な内容や手法等の検討
検討事項（1）大学入学者選抜における多面的な評価の内容や手法に関する事項（2）調査書の在り方及び電子化手法に関する事項（3）調査書や志願者本人記載資料の活用及び大学への情報提供の在り方に関する事項（4）その他審議が必要とされる事項

●大学入試センター 運営審議会「将来構想ワーキングチーム」設置(令和2年6月～)
記述式問題導入：採点上の課題(採点の体制、正確な採点)
英語4技能評価：実施上の課題(試験実施体制、採点上の課題)

スライド8

「調査書」の様式変更 大学入学者選抜実施要項
令和2年度 ➔ 令和3年度



スライド9

「調査書」記入上の注意事項**がより詳細に**
「令和3年度大学入学者選抜実施要項について(通知)」 令和2年6月19日

12 「**指導上参考となる諸事項**」の欄には，**指導要録**の同欄の記載事項のうち，(1)～(6)については以下のとおり記載すること。なお，枠の大きさや文字の大きさは任意とする。
(1) 各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等については，各教科・科目等に関する学習状況の様子や特徴(積極性など)を具体的に記載すること。
(2) 行動の特徴，特技等については，(1)以外の学校内外における活動の状況や特徴(積極性など)を記載すること。
(3) 部活動，ボランティア活動，留学・海外経験等については，部活動やボランティア活動等の具体的な取組内容，実施期間，その活動における特徴等を記載すること。
(4) 取得資格，検定等については，民間や専門高校の校長会等が実施する資格・検定の内容，取得スコア，取得年次，取得時期等を記載すること。
(5) 表彰・顕彰等の記録については，各種大会やコンクール等の内容や時期等について記載すること。特に，国際バカロレアなど国際通用性のある大学入学資格試験における成績や科学オリンピック等における成績等を記載することが望ましい。
(6) その他，生徒が自ら関わってきた諸活動，生徒の成長の状況に関わる所見など，特に必要と認められる事項等について記入すること。 (以下、省略)

スライド10

本フォーラム趣旨(続き)

- これらの状況を踏まえ、今後、高校教育においては指導と学習評価をどのように改善していくのか。
- また、大学では、高校で育まれてきた資質・能力を大学入学者選抜でどのように評価し、大学教育につなげていくのか。
- 昨年度に引き続き「『教育の接続』としての入試改革」に焦点をあてて、先進的な教育内容や学習方法、高大接続の取り組みの事例から、高校と大学が共に考える機会としたい。

事例報告①

生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り
～今、輝きの瞬間（とき）～

報告者▸　澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）

皆さま、こんにちは。城南菱創高校で主幹教諭をしております、澤井と申します。本日は、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。30 分という時間ですが、少しでもご覧いただいている方々の参考になればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（スライド１）本日、私がお話をさせていただきますのは「生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り～いま、輝きの瞬間（とき）～」ということです。「いま、輝きの瞬間（とき）」と言いますのは、本校開校以来ずっと、学校のキャッチコピーとして掲げている言葉です。今回の私の話の主題となってまいりますので、話の中で具体的に説明をさせていただきます。

（スライド２）本日のメニューです。まず、Introduction として簡単にお話をさせていただきます。続きまして、学校紹介です。京都府の方は城南菱創高校をよくご存じだと思うのですが、今回は全国でご覧になっておられると聞いておりますので、学校の紹介をさせていただきます。そして、いよいよメインですが「主体性を掘り起こす仕掛け その１」といたしまして「こだわり学、ゼミ活動」についてご報告を申し上げます。それから、少し欲張ってしまいまして「その２」といたしまして「カリキュラム選択」です。本日はこの４本立てでいきたいと思っております。

（スライド３）では、まず、Introduction です。「いま、輝きの瞬間（とき）」です。「瞬間」と書いて「とき」と読ませるのですが、皆さん、この言葉を聞かれたときに、学校のどのような場面を思い浮かべますでしょうか。これは体育祭ですが、多分、このような場面を浮かべられる方が多いのではないかと思います。「いま、輝きの瞬間（とき）」です。これは、研修旅行中のバスの中です。みんな、楽しそうですよね。これは、部活ですが、確かに、ここに映っている生徒たちは躍動的ですし、生き生きとしていますし、非常に輝いていると思います。

（スライド４）例えば、このようなシーンです。これは本校の授業風景ですが、静かにしっかりと授業を受けています。これも授業風景です。これは生徒が発表していまして、生徒が真剣に聞いているシーンです。これは本校の渡り廊下です。渡り廊下に自習机がありまして、生徒たちが黙々と自習をしています。「いま、輝きの瞬間（とき）」で、あまりこの光景を浮かべませんよね。では、ここに映っている生徒た

ちは輝いていないのかということです。

（スライド５）学校というところは、常に生徒たちに課題・ミッションを与え続けています。生徒たちがその課題を受け止める姿勢は、大きく２つに分かれます。一つは「受動的」な態度です。もう一つは「主体的」な態度です。受動的にミッション・課題を受け止めた生徒ですと、その課題は「他人事」です。いわゆるやらされ感満載で「先生がやれと言うからやってるねん」というような受け止め方になるかと思います。それに対しまして、その課題を主体的に受け止めてくれていれば、そのミッションは「我が事」となるかと思います。生徒たちが目の前の課題を主体的に受け止めて「我が事」にしたその瞬間にこそ「輝きの瞬間（とき）」が訪れるのではないかと、私は思っております。

先ほど「輝いていますよね」と言って、体育祭の写真や部活の写真を見せましたが、これも受動的に受け止めていて、他人事でしたら、輝いていないと思います。逆に「これは『輝きの瞬間（とき）』ですか」と言いました、授業中の黙々と勉強している風景や自習している風景も自分の学習課題を主体的・我が事に受け止めていたとしたら、見かけはそうではないですが、実は、輝いているのではないかと思っております。

「主体的」という言葉は、非常に難しいことだとつくづく思っています。われわれは気にせずに「主体性を身に付けさせる」と言ってしまうのですが「身に付けさせる」の「させる」が付いた時点で主体的ではないですよね。そこで、私は言葉として「主体性を掘り起こす」と言っています。掘り起こすのはわれわれで、その後は、生徒たちが主体性を身に付けてくれるように頑張ってもらうという流れかと思っております。ただ、主体性を掘り起こすといっても、放っておいても掘り起こさないので、学校において大事になってくるのが「仕掛け」かと思っております。学校の中でさまざまなところに、いろいろな「仕掛け」を仕掛けていきまして、生徒の主体性を掘り起こそうという流れになるかと思っています。もう一つ、この仕掛けに関しても、できるだけ「これは、先生が仕掛けた仕掛けや」と生徒にばれないようにしたいと思っております。さらに言えば、仕掛けた教員すらも仕掛けたことを忘れているくらいまで落とし込めれば正解かと思っております。

（スライド６）では、学校紹介に移ります。本校の沿革です。本校は京都府立城南高校と京都府立西宇治高校の２つが平成 21 年に合併いたしまして、できました。創立 12 年目の、京都府の中でも非常に新しい学校です。前身の城南高校も西宇治高校も非常に伝統のある学校ですので、そのような２校の伝統の上にできあがった学校であるとわれわれは捉えております。

（スライド７）学校概要です。本校は全日制課程の単位制高校となっております。普通科と専門学科の教養科学科がございます。普通科は各学年で４クラス、教養科学科は各学年で２クラスです。教養科学科に関しましては、人文社会科学系統と自然科学系統の２系統からできあがっております。

（スライド８）概要を続けます。男女比ですが、女子 60%、男子 40%という、女子の多い学校です。部活動の加入率に関しましては、93%で、これは京都府の中でも非常に高いと聞いております。女子だけでいきますと、京都府で２番と聞いております。学校全体で部活動が非常に盛んです。四年制大学の進学希望は 95%で、本校に入学してくるほとんどの生徒が、入学時点で、四年制大学の進学を希望しているという状況です。このような言葉があるかどうか分かりませんが「進学型単位制高校」とわれわれは位置付けさせていただいております。

（スライド９）それでは、学校紹介を終わりまして、ここからいよいよ主題の「主体性を掘り起こす仕掛け その１」といたしまして「こ

だわり学、ゼミ活動」について報告をさせていただきます。対象の生徒ですが、教養科学科の１年生と２年生になります。活動の時間ですが、毎週月曜日の７時間目を充てております。年間の回数は約 30 回です。これは２年間のプログラムになっておりますので、年間 30 回、トータルで 60 回のプログラムになってまいります。

（スライド 10）活動の流れですが、まずゴールから説明させていただきます。最終的なゴールは、２年生の各ゼミに分かれての研究活動になります。このゼミについての詳細はこの後にご説明申し上げますが、大学のゼミを思い浮かべていただければよいかと思います。生徒たちが自分の興味関心のあるゼミに分かれて研究活動を行っていくということです。最終的には、ゼミの中で代表を一人決めます。その代表がそのゼミを背負ってゼミ対抗のプレゼン大会に臨みます。大きな会場の大きなスクリーンでプレゼンをするわけです。その中で、最優秀研究賞を決定していくというプログラムとなっております。

このゼミですが、どのようなゼミがあるかといいますと、大きく理系と文系に分かれています。

（スライド 11）２年生の自然科学ゼミで、これが地学ゼミです。それから、生物ゼミ、化学ゼミ、そして物理ゼミ、最後に数学ゼミで、全部で５ゼミございます。

（スライド 12）続きまして、人文社会科学系統のゼミですが、英語ゼミ、国語ゼミ、社会ゼミという３ゼミです。５足す３の全部で８ゼミございます。先ほど、教養科学科は２クラスと言いました。２クラスで 80 人です。80 人が８ゼミに分かれますので、１ゼミ大体 10 人程度です。それに対して、各教科の教員が１名または２名付きます。実は私は国語の教員なのですが、今年はラッキーなことに国語ゼミを持たせていただいております。非常に楽しんでさせていただいております。これが２年生のゼミです。

（スライド 13）この２年生のゼミ活動に向けてあるのが、１年生です。１年生で何をするかといいますと「こだわり学」です。「こだわり学」というのは、耳慣れない言葉ですよね。全国的にも「こだわり学」を行っているところは少ないと思います。具体的には、課題発見、自己探究、プレゼン技術、コミュニケーション力、このような能力を養うのが「こだわり学」の趣旨です。この辺りは、なかなか難しいのですが、ポスターセッションやディベート大会をしながら、このような力を養っていきます。

（スライド 14）全体の流れです。もう、お気付きかもしれませんが、ゼミで一人で研究活動をしていくとき、どのような力が必要なのかを考えたときに、１年生の「こだわり学」で求める力は絶対に必要になってくるのではないかと思っております。そのため、１年生でベースになる力を身に付けさせて、それを使って２年生で主体的に研究活動をしてもらうという仕掛けを仕組んでいるわけです。特に、１年生の「こだわり学」は、なかなか工夫が必要で、こちらから与えることは非常に簡単なのですが、できるだけ自分たちで主体的に行ってほしいので、われわれはこのようなことを大切にしています。それは「面白さ」です。結局、面白ければ、生徒たちはどんどん自分たちでしてくれます。他人事にならずに我が事になります。そのため、面白さを重視しながら１年生のプログラムを組んでいるということです。

（スライド15）それでは、この「こだわり学」について、流れを少し説明させていただきます。先ほど、２年生のゼミ活動に関しましては、教科に付けると言わせていただきましたが、この「こだわり学」に関しましては、分掌に付けております。担当分掌が学科企画推進部です。そこに担当教諭を２名配置しておりまして、本年の「こだわり学」の教員は、新規採用２年目の英語科の渋谷先生です。もう１名は、新規採用１年目の数学科の山際先生という、２年目と１年目の非常にフレッシュなコンビに「こだわり学」を任せております。

ここからは、具体的に「こだわり学」についてお話をするのですが、私がここで説明するよりも、このフレッシュな二人に出てきていただいて、報告をしていただいたほうがよいかと思っておりますので、二人に登場いただきたいと思います。

（スライド16）「現在の『こだわり学』の取組について教えてください」

渋谷先生が来ました。「今、１年生は『マイプロジェクト』というものに取り組んでいます」「ほう、それはどのようなプログラムなんでしょうか」

山際先生です。「自分自身が改善したいと考えている社会的事象を１つ探し、それについて調べ、最終的には改善案を提案するといったものです」

（スライド17）「へー、おもしろい取組ですねえ。生徒たちも喜んでやってるでしょ？」「最初の内はすごく楽しんでやっていたように思うんですが。今はちょっと……」「えっ、今はそれほどノリノリではないってことですか？」「そうですねえ。課題設定の時点でその時のノリで決めちゃっている子は、実際様々に調べていくと、行き詰まるみたいで」

（スライド 18）「その行き詰まる原因って、何なんでしょうね？」「やっぱり最初の課題設定が大きすぎるんじゃないかと思います」「それと、本当に解決したい課題が見つけられないっていうのもあるような気がします」「それって根本的な問題じゃないですか？」

（スライド19）「課題は設定できても、それがどうも他人事になってる気がしますね」「それに、課題を解決するために誰に何を尋ねればいいのかも分からないみたいです」「そういったことを全部教員が教えてしまうと、意味がなくなりますからね」「そうなんです。ついつい教えてしまいたくなるんですけど、そこは自分で悩んでほしいところなんで」

（スライド20）「もうそろそろ発表の日が見え出す頃ですよね」「はい。やっと焦り出した感じです。ここへ来て、失敗したくないっていう気持ちが強く出てきました」「我々もなんか失敗させられないという気持ちが強かったかなと思います」「そうそう。１年生での失敗は、必ず２年生のゼミ活動を支えるベースとなると思うんです。だから失敗も経験だって思えばいいのかなって」

（スライド21）「１年生での成功体験は」「２年生のゼミ活動の大きなモチベーションになりますね」「１年生での失敗体験も」「２年生ではもう失敗したくないというモチベーションになりますね」「いずれにしても１年生のこだわり学が主体的な２年生のゼミ活動につながるということですね」というように、お二人に登場いただきました。私は、この二人の奮闘を前で見ております。本当に苦労して「こだわり学」のプログラムを組んでくれています。もちろん、生徒も「こだわり学」で力を付けていると思いますが、それ以上に、このフレッシュな二人が「こだわり学」でこだわって、力を思い切り付けているのではないかと私は思っています。

ここのスライド（スライド21）にもあるのですが、結局、１年生でうまく成功した生徒に関しては、当然ながら２年生の研究活動も順調に進んでいきます。ただ、１年生で全く駄目だっ

た、失敗した生徒のほうが、２年生になって、本当に失敗できないということで、主体的に自分の研究活動を進めていってくれるかと思っておりますので、この「こだわり学」は、なかなか良いプログラムではないかとわれわれは思っております。まず、これが１つ目の仕掛けでした。

（スライド 22）続きまして、２つ目の仕掛けです。「カリキュラム選択」について説明をさせていただきます。先ほどの「こだわり学」のゼミ活動は、教養科学科、専門学科のプログラムです。今回のカリキュラム選択に関しましては、普通科４クラス、160 人のプログラムとなっております。これは、普通科の３年間のカリキュラムです。字が細かくて、別に見てもらおうと思って出しているわけではなくて、こんな感じですよということですが、ご注目いただきたいところがございます。それは、ピンクのところです。１年生のピンクのところは、音・美・書です。要するに、ピンクのところが選択科目となっています。 １年生は芸術科だけですが、２年生になってまいりますと、見ていただくと３分の２くらいが選択科目です。３年生になると、ほとんどが選択科目です。そのため、生徒は朝、ショートホームルームで「おはよう」と友達にあいさつすると、終わりのショートホームルームで「どうやった？」というまで会わない友達がたくさんいるというのが３年生です。たくさんの選択科目を用意しております。

（スライド 23）少し見にくいので、この黒いところを拡大させていただきました。このような感じです。「英語表現Ⅱ」「英語特講」「実践英語」、英語だけで３つございます。ここから自由に選択します。国語も「国語表現」「古典特講」という形で２つございます。よく見ていくと「特講」というものがあるのですが、この特講科目は、簡単に言うと、入試演習です。つまり、自分の入試科目を取ってもらって、演習をしていくことになります。最初のほうで、本校は「進学型単位制」と言わせていただきましたが、このようなところに特徴を出しています。ここには、全部で 17 の科目がございます。160 人が 17 講座に分かれますので、普通に考えると１講座 10 人いきませんよね。中には 30 人や 20 人の講座が当然できますので、10 人を下回るような講座もできます。入試演習の特講の写真ですが、このような感じです。教室の３分の１くらいで入試演習をいたしますので、非常に実践的な演習ができると生徒たちも喜んでおります。

入試ばかりなのかと言われそうなのですが、そうではありません。よく見ていただきますと「スポーツⅡ」というものがあります。これは、非常に珍しいと思います。「生活と福祉」、これも珍しいですね。福祉系の科目もたくさん置いてあります。これらに関しましては、本当に少ない人数で行っておりまして、外部の地域の方に来ていただいて、講師として授業をしていただいております。少人数で、直接、地域の方から授業を受けることができるという、非常に密度の濃い授業となっております。

他の特徴としましては「実用書道」「音楽総合」「描写」と、芸術科目もあちらこちらに置いております。これらも、本当に少ない人数です。 企業の方、外部の講師に来ていただいて、少人数でこのような形で授業を展開することができますので、その科目を身に付けたい生徒にとってみると、本当に実践に近いところで実技を学ぶことができるという特徴がございます。地域の方を講師にしたり、外部講師を呼んできたりすることは、当然、全国的にどこでもされていることだと思います。ただ、年に１回、２回など、トピックになっていることが多いのではないかと思います。 本校に関しましては、本当に少人数で展開でき、年間を通しての授業のプログラムに組み込んでおります。そのため、常に誰かが校舎内におられるという状態です。そのようなことができるのが、この講座の良い

ところかと思っております。

また、どうしても気になるのが、右下の「スカラー」です。このスカラーというのは、自習です。「自習って、何やねん？」と言われそうですが、他の生徒たちは先生に付いて勉強していますが、このスカラーを取った生徒は、スカラー教室に行って自分で自習をするというプログラムです。つまり、自分の学習課題が明確になっていないと、自習なんてできません。監督はおりません。これは、週に４時間まで取れます。ただ、受験勉強をしているのかというと、そのような生徒もおりますが、中には、今年でしたら、書道関係の大学に行きたい生徒がおりまして、ちょうどスカラーの時間に書道教室が空いているので、書道教室に行って、ひたすら50 分、一人で字を書いているなど、そのような使い方をしている生徒もおります。生徒にとってみたら、非常に使い勝手の良い選択かと思います。

（スライド 24）１年、２年、３年で、これだけの選択科目があります。これを生徒は科目選択しなければなりません。ここで大事になってまいりますのは「自分の興味関心」です。興味関心が固まっていないと、自分のカリキュラム選択ができません。そして、もう一つは「自分の進路目標」です。これが固まっていないと、これだけの中から時間割をつくることはできません。われわれは「自分だけの時間割を作成する」と呼んでおります。当然、絶対に取らなければならない縛りは若干ありますが、やはり他の学校に比べると本当に自由度が高いです。そのため、われわれはこれを広報に使っております。中学校へ行って、この話をします。「君たち、自分たちで時間割をつくれるんだよ」と中学生に言いますと、中学生はびっくりします。当然ながら、時間割というのは学校が決めていて、学校から与えられるものですよね。受動的に与えられて、それを引き受けて、淡々とこなしていくと中学生は思っているのです。そのため、自分で時間割をこれだけの中から好きなものを選べるというのは非常に魅力みたいでして、本校を狙ってくる生徒たちの一番の動機は、時間割が自分でつくれるからということになってまいります。ただ、お気付きだと思いますが、これをつくるのは大変です。自由度が高いということは、それだけ悩みも多いということになります。

（スライド 25）カリキュラム選択の１年生の時間割作成の流れです。１年生で３年分、取らせ切りますので、１年生は本当に大変です。ゴールは 10 月で、そこで本登録となってまいります。10 月の本登録に向けて、７月に仮登録、三者面談です。仮登録から本登録までは、ほとんど変更はないですので、実質のゴールは７月の仮登録となってまいります。仮登録したものを夏休みの三者面談で、保護者の方、本人、担任の先生で「これでいいですね。これでいきますよ」という確認をします。７月に向けて、４月、５月で、われわれ教員側からの情報提供と指導が入ってまいります。担任による個人面談です。それから、科目選択ガイダンス、進路ガイダンスは、各分掌や各教科で行ってまいります。ここで情報を提供していきます。その提供された情報を基に、生徒たちは時間割を組んでいくわけです。

われわれがこのプログラムを考えたとき、４月、５月の教員側から情報提供をするのは、本当に小まめに丁寧にしていかないと、生徒は時

間割が組めないのではないかという話になりました。そのとおりです。そのため、こちら側もかなり覚悟していたのですが、実際にさせてみて、それは心配なかったと思いました。なぜかと言いますと、４月に生徒が入学してまいります。そうすると、当然、部活に入りますよね。部活に入りますと、そこには２年生の先輩と３年生の先輩がおります。当然、２年生と３年生はもう履修しているわけですから、１年の生徒は、２年生の先輩、３年生の先輩を捕まえて「先輩、あの授業、どうなんですか」「あの授業、面白いですか」「取って大丈夫ですか」と、情報を自ら収集し出します。つまり、われわれが心配している以上に、生徒のほうが主体的に先輩から情報収集に回ります。

それから、これは後ほど保護者の方から聞いたことなのですが「先生、高校に行きだしてから、急に、いろんなことを相談してくれるんです」「どんなことですか」と聞いたら「学校の授業とか、教科のことなんです」。要するに、自分で何を取ってよいか分からないので、保護者の方と相談しているのです。保護者の方は「そんなん、分からへんわ」と言いながらも、すごくうれしかったとおっしゃっています。つまり、自ら保護者の方に声を掛けていって、自分のカリキュラムをつくろうとしています。

また、４月になって、教科の教員がやって来ます。教科の教員は、当然ながら、自分がこれから取ろうとしている教科の教員でもありますので、授業が終わった後に先生を捕まえて「先生、僕がこの授業を取って大丈夫ですか」という話をし出します。われわれはそれを見ていると、生徒自身で積極的に動き出していると感じます。そして、何よりも、クラスの友達です。自分たちが収集してきている情報を持ち寄って、情報交換をします。「私は、こんな情報を持ってる」「私は、こんな情報を持ってる」と交換しながら「じゃあ、この授業を取ろうか」ということが高校１年生の４月、５月で、生徒たちの間にできあがっていきます。これにより、生徒というのは、我が事のこととなると本当に動くのだ、われわれが細やかな情報提供をしなくても大丈夫なのだと思いました。

（スライド26）これは最初に出したスライドですが、ＭＩＳＳＩＯＮです。今、お話をさせていただきました場合のミッションというのは「自分だけの時間割の作成」です。自分だけの時間割作成というのは、受動的・他人事では絶対にありません。主体的・我が事となってまいります。この作成のプロセスが、主体的・我が事となりますと、このようなことが起こってまいります。授業に対する責任が生まれてまいります。つまり「その授業を取ったのは誰ですか。自分でしょう。悩んで取ったんでしょう、友達と情報交換したんでしょう」ということから、その授業を取ったのは自分なのだという意識が生まれてまいります。そのため、授業に対する責任感が生まれてきます。そして、これが最終的にどこにつながるかといいますと、授業が我が事になってまいります。つまり、授業に対するモチベーションが生まれてくるということです。われわれが何も言わなくても、その授業は自分たちが取った授業なのだと、モチベーション高く授業を受けてくれるという流れの仕掛けになってまいります。これが普通科のプログラムです。以上、２つほどご説明申し上げました。

（スライド27）まとめさせていただきます。「主体性を掘り起こす様々な仕掛け」ということで、本日、お話をさせていただきましたのは、ほんの一部です。当然ながら、あちらこちらに仕掛けがしてあって、生徒たちは高校３年間、その仕掛けを経て自分たちの主体性を掘り起こしていってくれるのですが、生徒たちは高校３年間が終われば卒業していきます。大学に行ったり、社会に出たりします。社会に出たときに、生徒たちの前には常に課題がございます。これは、別に生徒だけではないと思います。わ

れわれ人間というのは、常に目の前に課題がございます。課題のない人生はないというように思います。その課題を主体的に受け止めて、我が事にする、そのような人こそ、その瞬間に人生において「輝きの瞬間（とき）」を迎えるのではないかと思っております。人生は長いですので、長い人生の中で、この「輝きの瞬間（とき）」をたくさん経験できるような人の人生は、非常に充実しておりますし、豊かなものになるのではないかと思っております。そのような人生のお手伝いとして、われわれは日々の仕掛けを工夫しているということです。

（スライド 28）以上「生徒の主体性を掘り起こす仕掛け作り～今、輝きの瞬間（とき）～」ということでお話をさせていただきました。

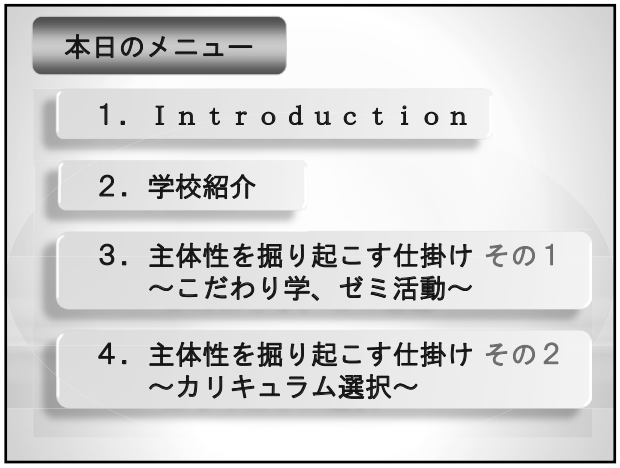
（スライド 29）ご清聴・ご視聴、ありがとうございました。ご意見・ご感想をよろしくお願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）

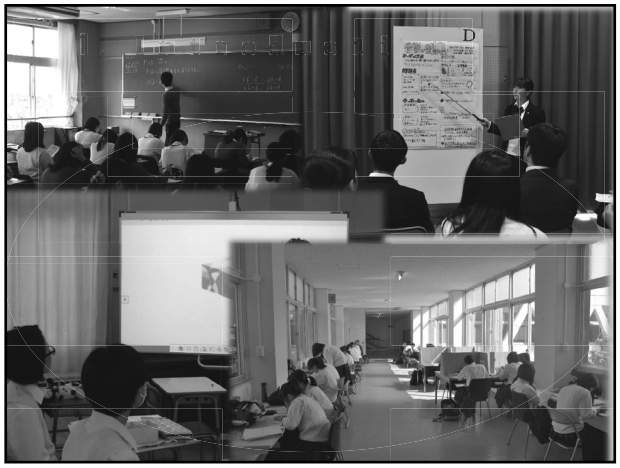
スライド1

スライド2



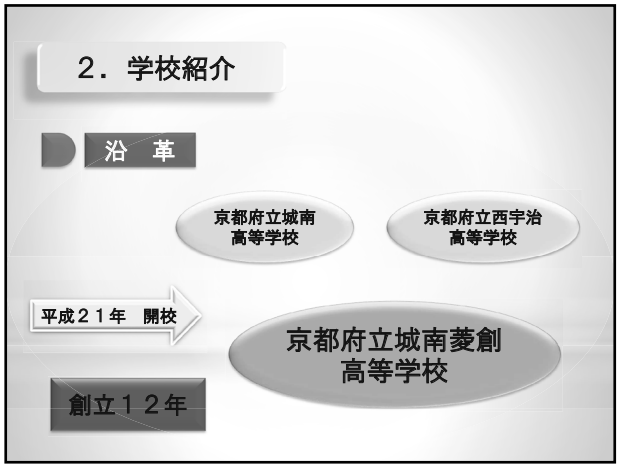
スライド3

スライド4

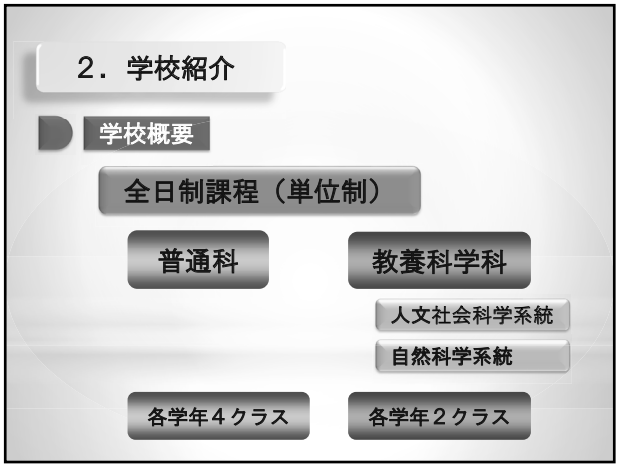


スライド5

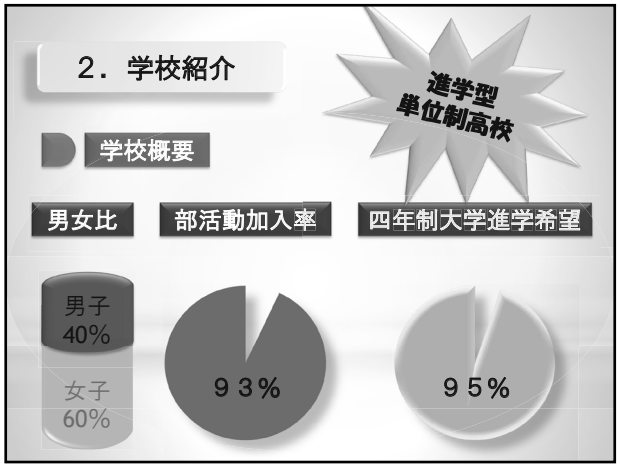
スライド6



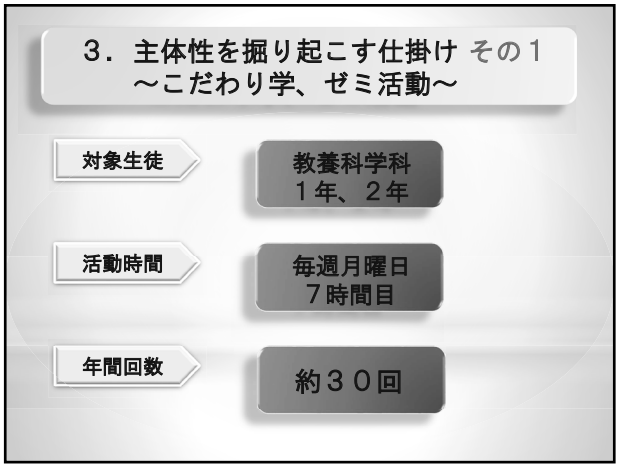
スライド7



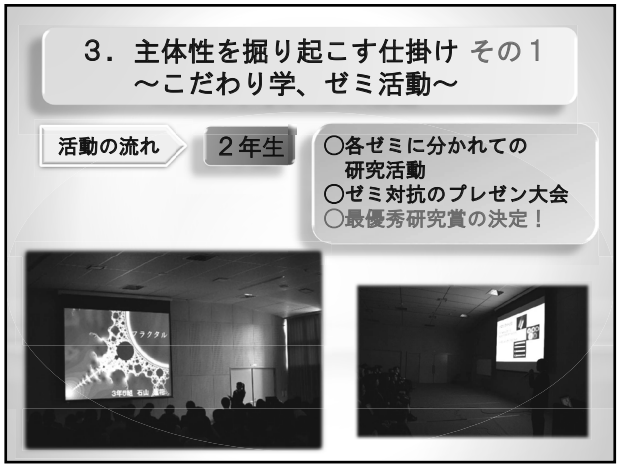
スライド8



スライド9



スライド10

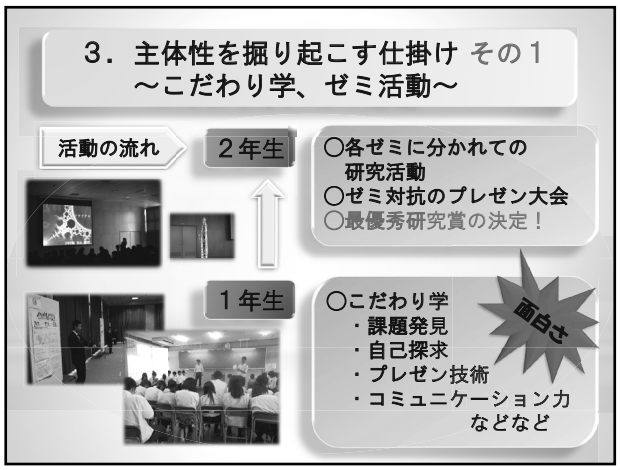


スライド11

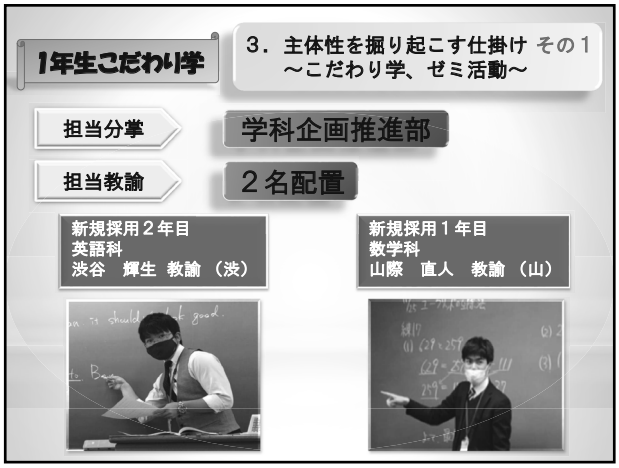
スライド12

スライド 13

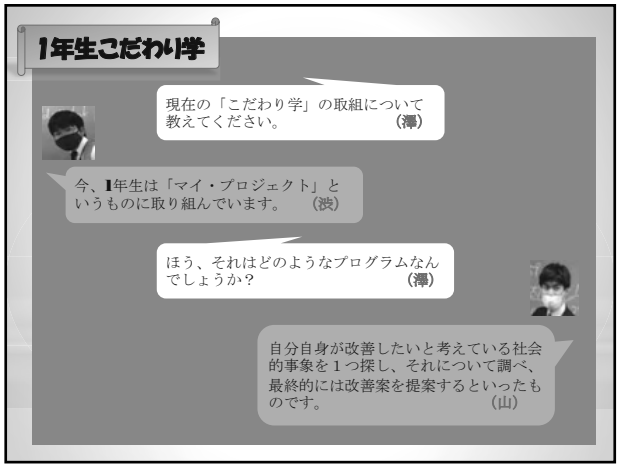
スライド 14



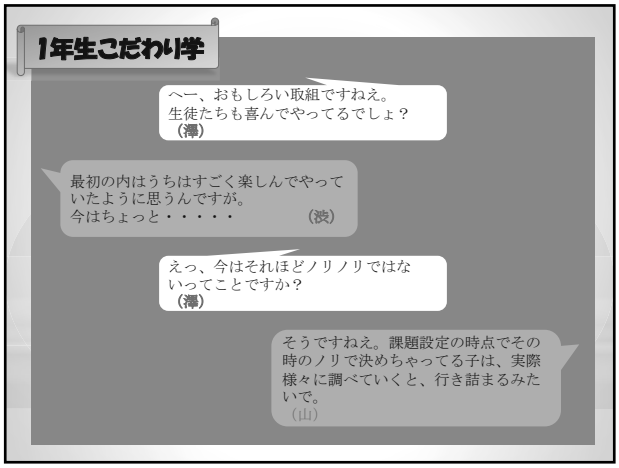
スライド 15



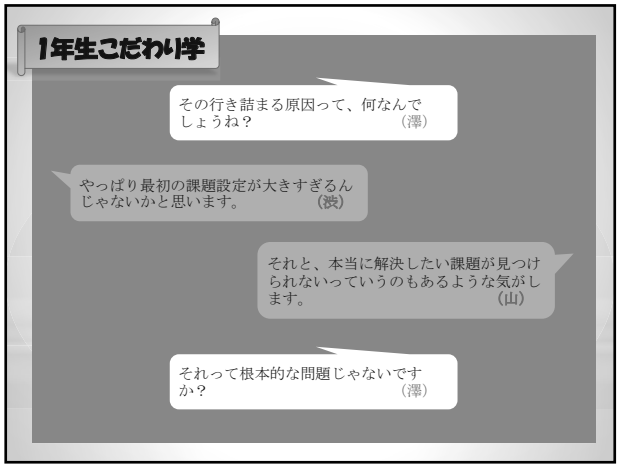
スライド 16



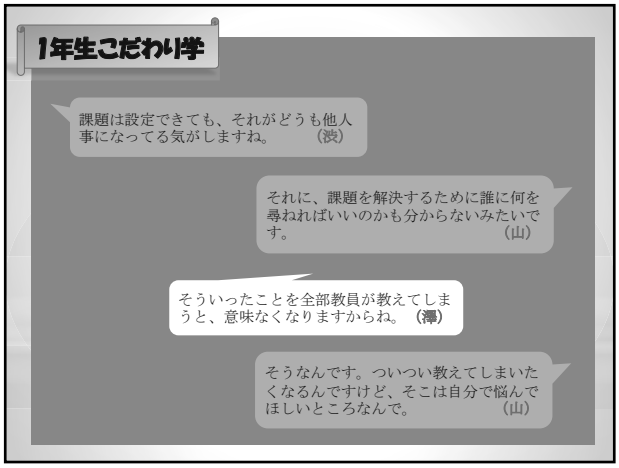
スライド 17



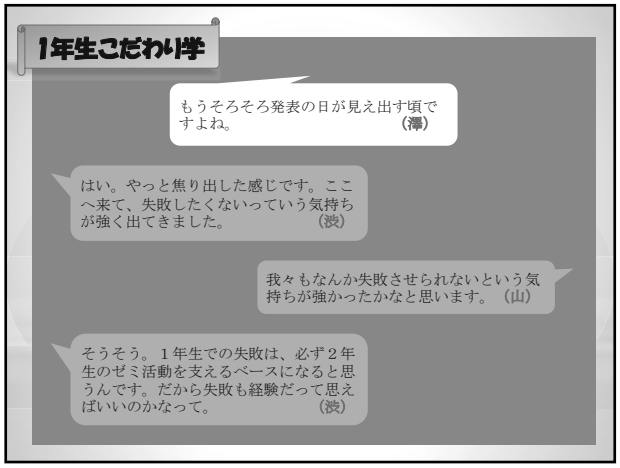
スライド 18



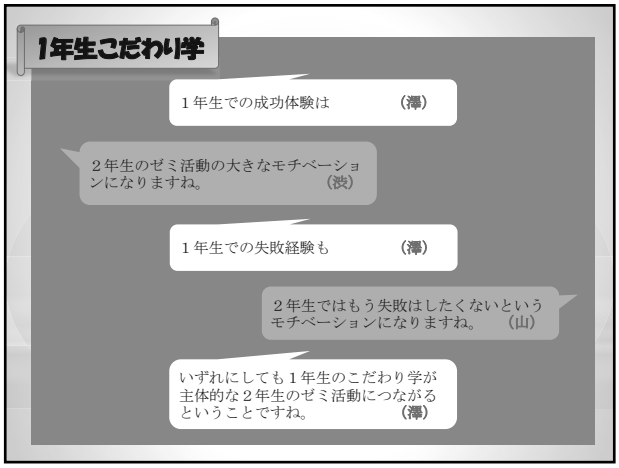
スライド 19



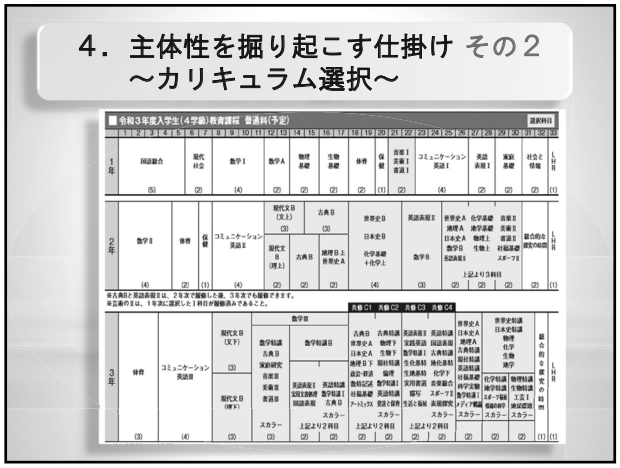
スライド 20



スライド 21

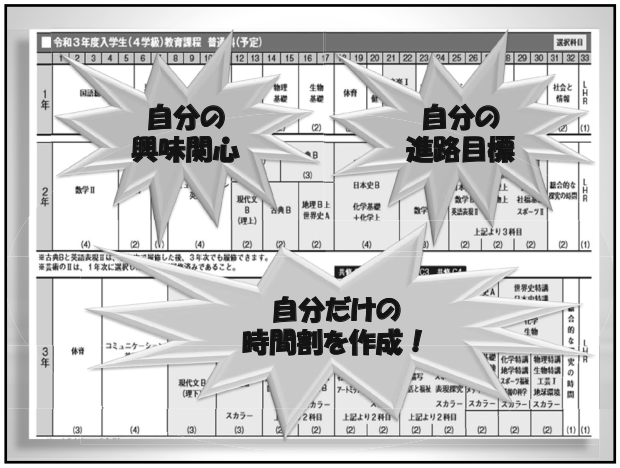


スライド 22

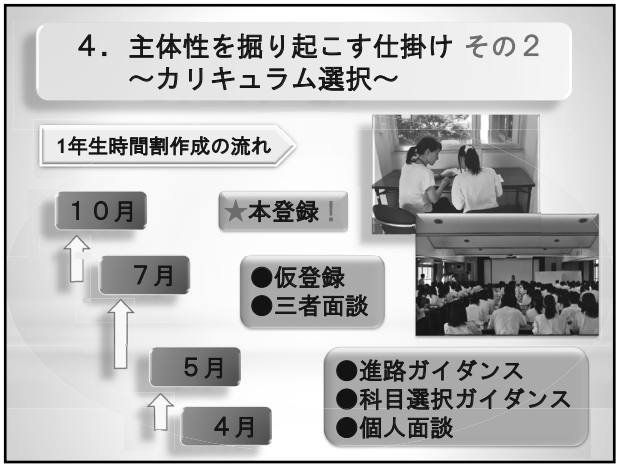


スライド 23

スライド 24



スライド25

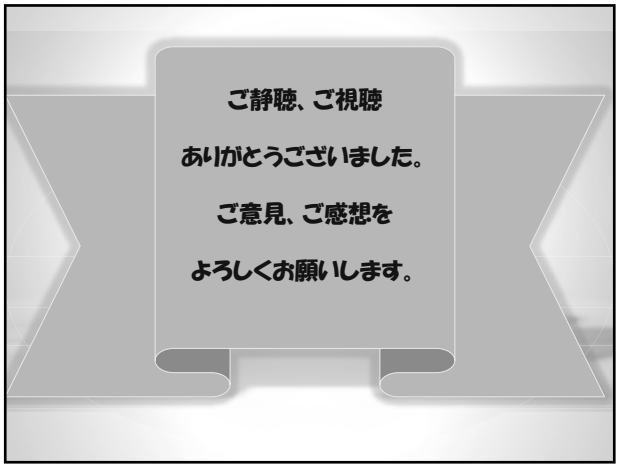


スライド26

スライド27

スライド28

スライド29



事例報告②

資質・能力の育成に向けた１０年の授業研究の歩み
～ＰＩＳＡ型学力と探究力の育成をめざして～

報告者▸　田中　昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）
池田　　径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）

田中:　大阪府教育センター附属高校の田中です。どうぞよろしくお願いします。

（スライド１）ここに名前が二人ありますように、前半は田中が、後半は池田が本校の取り組みについて話をさせていただきます。

（スライド２）まず、学校の紹介ですが、本校は 2011 年に全国初の「教育センター」附属高校としてスタートしました。今年が 10 年目になります。（イ）ですが、本校にはミッションがあります。「大阪府教育センター」と連携し、大阪の新しい教育にいち早く取り組んで、ナビゲーションスクールとして「先導」と書いてありますが、それを大阪府全体に広めるという役割があります。（ロ）は、本校の目標ですが「ＰＩＳＡ型学力」を実生活で課題を解決する力と考えて、社会に貢献できる生徒を育てることを目標に行っています。

本校には、いろいろな進路先があります。大学・短大でおよそ５割、専門学校・就職等で５割という、いわゆるボリュームゾーンの生徒が来る学校です。そのため、高大接続というよりも、われわれは、社会に出て生き抜く力を育てたいという考えで行っています。その力の中心になるのが「探究」になります。

（スライド３）前半では、私から、学校全体で取り組む授業研究についてご説明させていただき、後半は探究のお話になります。まず、学校全体で取り組む授業研究の話をさせていただきます。

（スライド４）別紙１のほうが詳しいのですが、ここに簡単に、授業研究の取り組みをまとめています。2011 年に開校したのですが、最初の２年間は前身の大和川高校との共存ということから、学校を挙げての取り組みはなかなか難しい時期でした。その間は、探究の基礎づくりとして取り組んでいました。2013 年からは、学校全体で授業研究に取り組むため、授業研究委員会を発足させて取り組んでいました。１段目と３段目にあります文部科学省の調査研究事業を中心にして進めてきました。真ん中の２段目は「観点別学習状況評価の取組」という大阪府の取り組みで、2014 年から３年計画でスタートして、それを大阪府全体に広めるという流れで行ってきました。2020 年、本年度からは、一人１台ＰＣを持つ環境における授業を考えるという「スマートスクール推進事業」です。令和４年度から入学してくる生徒がそのような環境で育つことになりますので、それを考え

るのがスマートスクール推進事業なのですが、本校もその協力校の１つとして取り組んでいます。

（スライド５）まず、2013 年から 2015 年についてです。これは教育センターが受けた事業ですが、多様な学習成果の評価手法に関する調査研究で、評価が難しい多面的な資質・能力について、どのように評価したらよいのかということで授業研究を進めてきました。教育センターで、このように進めていったらよいのではないかと、Step１、２、３で示していただきましたので、最初の３年間はそれに沿って行ってきました。まずは、アクティブ・ラーニングに取り組もうということです。その次に、パフォーマンス課題に取り組もう、そして、それをルーブリックで評価しようということで取り組みました。

（スライド６）2016 年から 2018 年は、その取り組んだものをベースにして、内容を充実させて、学びを深めようと取り組んだもので「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究」です。これは、大阪府が受けた事業で、研究校としては大阪府では本校だけの取り組みでした。１番目に、先ほど言いました、観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成について、３年間、取り組みました。それによって授業の目標・ねらいが明確になり、ルーブリックを示すことで、生徒も何を頑張ったらよいのかが理解しやすくなったと思っています。２番目に、パフォーマンス課題について最初の３年間で取り組んだのですが、それをカリキュラムに位置付けて考えて行うのはどうだろうかということから「本質的な問い」からパフォーマンス課題を考えて、それを単元末の目標として各授業を組み立てていくという流れで進めていきました。例としては、ここにありますが「コミュニケーション英語Ⅰ」で、日本文化紹介のスピーチをするのに、まずは原稿を作成し、ペアで練習し、グループで練習し、その後、クラスでスピーチするというようにステップアップしていきながら行うことで、前向きに頑張る生徒が増えていったかと思います。

（スライド７）これは授業アンケートの自己評価ですが、これに取り組むことによって、授業アンケートの評価も右肩上がりに変わっていった部分もあります。

（スライド８）これは、観点別学習評価のシラバスのひな形です。これは当時のもので、別紙（略）には本年度のものが載っています。

（スライド９）このときは４観点ですが、観点とその趣旨、その評価方法の具体例を書いていますので、生徒は非常に分かりやすいですよね。「こんなふうに頑張ればいいのか」「こういうふうに評価してくれるのか」というのが分かるということです。

（スライド 10）パフォーマンス課題についてです。本校はボリュームゾーンなので、どうしてもまず基礎学力という知識・技能に傾きがちですが、そうではなくて、やはりパフォーマンス課題をすることによって「思考力・判断力・表現力」、そして、その中で「主体性・協働性」も育まれるということで取り組んでいます。

（スライド 11）先ほどは、コミュニケーション英語Ⅰの例でしたが、数学Ⅰの場合は、このように少しずつ不等式の性質を学び、１次不等式の解き方を学び、文章から式を立てることを学び、それからパフォーマンス課題にいくという形式を取ることもあります。

（スライド 12）これは、スピーチのルーブリックの例になります。

（スライド 13）これは、数Ⅰのパフォーマンス課題をシラバスに位置付けるという部分で、このように単元末にパフォーマンス課題を設定し、それに向けて、例題で行って、その後、確認テストをして、定期考査に出すという流れです。度々パフォーマンスを行っているわけではないのですが、年間何本か単元末にこのように設定することで、年間の計画を立てることを

行っています。

（スライド 14）そのようにして行ってきたのですが、やはり課題があって、なかなかうまくいかないところもあります。ベネッセの進路マップの成績が伸びなかったり、生徒は自分では勉強していると言うのですが、実際に調べてみると学習時間が少なかったりすることがあります。それでは、それをどのようにしたらよいのかということです。「課題依存型」、課題が与えられたら頑張れるが、自分で課題を見つけて取り組む部分が非常に弱いので、対策として「カリキュラムマネジメントの実践」と「メタ認知能力の育成」、この２つを課題対策として取り組んでみたらどうかと考えました。

（スライド 15）Ⅰ段階のものをⅡ段階の「自己調整型の主体的学習」に行きたい、最終的には、社会に結び付くトランジションのところに行きたいと考えたのが、次のスライドの「クローバープラン」です。

（スライド 16）これはそのカリキュラムマネジメントの部分です。黄色の部分の「確かな学力の育成」が一番のメインになるのですが、それだけではなくて、多方面からのアプローチが大事だろうということから、いろいろなところでつながりがあるのだと意識しながら教員も取り組むということを考えました。

（スライド 17）それでは「メタ認知能力」はどうしたらよいのだろうかということです。「京都大学の教員養成ポートフォリオ」をヒントにさせてもらいました。これは、教科教育の教養と実践力、教科以外の教職に関する教養と実践力、そして課題探究力、この５つを柱にして京都大学で行っておられると本で読みまして、本校に当てはめたらどうなるのだろうかと考えたのが、このクローバープラン（ポートフォリオ）です。

（スライド 18）授業の学び、部活動・行事における学び、探究的な学び、進路学習の学び、この４つを頑張ることで、生徒に目標を持たせて高校生活を送るのはどうだろうかと考えました。この黄色とピンクの対角線の部分は昔ながらの文武両道の学びで、緑と青の対角線の部分はキャリア教育の学びというように、生徒に話をしているのですが、緑の探究的な学びで一般的なスキルを身に付けて、かつ青の部分で自分自身はどうするのかと考えさせることで取り組ませました。

（スライド 19）この４つの学習や取り組み、その成果をクリアファイルにポートフォリオとしてストックしながら、自分で調整していく力を付けていき、それが社会で生きていく力に結び付けばよいと取り組んできました。

（スライド 20、21）本校の校章がクローバーなので「クローバープラン」と言っていますが、この４つの学びを四つ葉のクローバーに見立て、それをスライド 16 のクローバープラン（カリキュラムマネジメント）の真ん中に入れて「クローバープラン」として、取り組んでいます。

（スライド 22）この「ＩＣＥモデル」は、ルーブリックを量から質へと考える部分なのですが、後半の「探究」で説明させていただきます。

（スライド 23）現在、2019 年から 2020 年に、何を行っているかというと、１つ目に、カリキュラムマネジメントの校内研修で「学年別年間指導計画一覧表」をつくりました。別紙５が詳しいので、見ていただければと思います。全教

科の内容について何をするのか、一目見たら分かります。それに加えて、育てたい力も併せてそこに載せてあります。それをつくったのはよいが、まだまだ活用できていないので、どうにか活用したいと考えたのが、２つ目の「授業デザインシート」です。付けたい力と教員の生徒に伝えたいことを合わせて授業デザインを考え、授業実践していくことで、実現させようと考えました。３つ目は、今年から全国的にキャリア・パスポートが始まりましたので、先ほどのクローバープラン（ポートフォリオ）を本校のキャリア・パスポートとして行っております。そして、４つ目が、先ほど言いました、一人１台ＰＣを使う授業を想定したスマートスクール推進事業の取り組みです。今、この４つを行っております。

（スライド 24～27）この辺は見にくいので、別紙（スライド 24、25 の学年別年間指導計画一覧表は別紙５、スライド 26、27 の授業デザインシートは略）で確認していただければと思います。

（スライド 28）ちょうど昨日、校内研修として、全体の研究授業について研究協議を行いました。これが、その様子です。（スライドの画像は略）非常に活発な意見が出ました。実は私は今年で定年のため、来年から誰か引き継いでくれないかと思っていましたが、これだけたくさんの若い教員が頑張って行ってくれているのを見て、安心だと思いました。

以上、前半は駆け足でしたが、このように８年間の取り組みをしてきました。ここから、後半の「探究」について、池田に変わります。

池田：　大阪府教育センター附属高等学校の指導教諭の池田径と申します。後半、よろしくお願いします。

（スライド 29）実践編として、本校の柱の一つである「探究ナビ」の中身について、今からご紹介したいと思います。2014 年に、一度、本校の山元前首席がここで発表しているのですが、その後に私はこの学校に来ましたので「その後の話」でもあります。

（スライド 30）私は 2017 年に本校に着任したとき「探究ナビ」というのは、これからの教育に本当に必要な豊かな可能性のある内容だと感じました。私自身、大変勉強になると思いながら参加してきました。それは、山元首席のような非常に力のある教員と一緒に行っていて勉強になったというのもありますし、その後、若手の酒井将平先生という演劇教育にも優れた指導力を持つ方が行っておられるのを間近に見られたということもあり、非常に良かったです。一方で、全教員でそれにしっかり取り組むとなると、やはり負担感があり、実際には大変です。教員の入れ替わりもありますし、探究ナビで何をしていくのか、教員や生徒自身がそのことを通じてどのようになっていくのかということが共有されていない部分もあったかもしれないと思いました。机の上に生徒の落書きがあって「探究って何？って探究したい」と書いてありました。確かに、この授業を何のために、どうなるために行っているのかが分からない生徒もいるというところもありました。

（スライド 31）私としては、可能性も豊かですし、先達たちの遺産もたくさんありましたので、探究ナビにしっかり関わっていきたいと思いました。そして、探究ナビを担当する・しないに関わらず、まずは、教員同士で何のために行っているのかを共有したいというのがありました。

（スライド 32、33）そこで「共通理解」と「実践力」についてです。これは、教員が４月当初に、研修で探究の授業について共通理解するためのピラミッドです。探究は「主体的・対話的で深い学び」を目指すこれからの教育を担う授業ですが、この頂上に持っていくためには、中段部分であるコミュニケーション、例えばグループワークなどもたくさんこなさないといけ

ません。しかし、本校は進路多様校であり、いろいろな生徒がいる中で「コミュニケーションをしてください」と言って、すぐ話し合いができるか、すぐ前向きに取り組めるかというところがあります。そのような中で、このピラミッドの中段に行くには、一番下のアイスブレイクをしっかり行って、コミュニケーションへと誘わないと、なかなか難しかったり、形だけになったり、参加できない生徒が出てきたりします。そこで、教員は探究型授業で、この探究ピラミッドのそれぞれの段階をクリアするために、デザイナー、あるいはファシリテーター、あるいはアイスブレイカーとして関わっていきます。これは探究ナビだけではなくて、これからの教育に必要な力でもあること、また、このようなことが必要になってきている社会的背景のことも、研修で共通理解しました。

（スライド34）実際にアイスブレイクをするときに何が大事かというと、生徒をコミュニケーションへと追い詰めないことが非常に重要です。生徒をコミュニケーションへと誘う、動機づけるために「コミュニケーションしなさい」「探究しなさい」と言われて「させられる」と生徒が受け取らないようにすることが大事です。そのために大切になるのが、アイスブレイクの観点です。探究型授業のために生徒がいるというのでは本末転倒になってくるので、生徒のために探究型授業を行うということを忘れてはいけないのです。教員の方が躍起になってしまったら、力の入れどころがおかしくなってきて、生徒もつらくなってしまうことがあります。

教員がアイスブレイカーやファシリテーターになるという場合、実際にどのようにしたらよいかという問題があります。これらの言葉を知っていても「分かった」と頭で理解して終わるのではなくて、実際に行ってみないと身に付かない部分があります。教員は言葉の理解はすぐにしてくれるのですが、実際に行うことが大事です。そのため、教員研修自体をアイスブレイク型で行います。

（スライド35、36）輪になって座り、実際に一緒にゲームを行って、アイスがブレイクしていく様子を体感し、どうしたらその方向にファシリテーションされていくのかということを、身をもって体験します。年に1回、全教職員で行うことで、教職員の集団づくりにもなり、実践力の向上にもつながるかと思い、私が来てからこのようなことをさせてもらうようになりました。

（スライド37）しかし、大事なことは、探究型授業について教員だけが共有していても良くなくて、先ほどの机の落書きではないですが、何のためにするのかを生徒にも共有してもらう必要があります。「意味が分からないことをさせられている」のではなく「意味が分かってしたくなる」ようにします。その意味や価値付けは、教員がしっかりしないといけないかと思います。意味や価値を生徒自身に考えてもらうという方法もあるのですが、本校においては多様な生徒がいますので、今行っていることの意味や価値を教員がしっかり伝えることが大事かと思います。

（スライド 38～40）最初のオリエンテーションの授業では、教員研修で行ったことと同じことを生徒にも言います。これからの教育で求められているのは何か、最終的にどこに行くのかという話もします。教育と探求社によるクエストカップにも参加して、付けた力を発揮する機会が用意されていることも伝えて、何のためにどのように取り組むのか、ゴールはどこかを示します。

（スライド41）今までの学校教育では、与えられた、答えが決まっている課題を、一人で黙々と解いて、分からなければ先生が教えてくれるという形で、自学自習を重視していましたが、これからの社会では、課題を自ら見つけなければならず、答えも多様で、みんなで話し合

って解いていかなければならないのです。そのような課題について答えが分かっている先生はいないので、自分で答えを探しに行きます。ネットで調べるのも古いくらいで、ハッシュタグを付けてつながって、自分で情報を探します。これから協働・探究型の社会に出ていくので、社会の中で生き抜く力を身に付けるということで、探究型授業には意味があると思います。本校生徒は大学受験がゴールという者ばかりではないので、このようなところをしっかりと伝えていく必要があると思います。

（スライド 42）「学習指導要領が、こう変わったよ」というような話もします。しかも、新しい時代に必要となる資質・能力も、枕詞のところが非常に大事だと生徒に伝えます。知識・技能が生きて働いているか、未知の状況にきちんと対応できているか。学んだことを学校で完結するのではなくて、これからは社会の中で使っていける力を付けていくということに変わっていると伝えます。高校も、大学も、今、変わろうとしているということを生徒と共有して、探究ナビの授業に取り込んでいきます。

（スライド 43）本校は創立以来 10 年間、探究ナビの授業に取り組んできた学校で、そこの生徒であるというように共通理解をしていくのです。

（スライド 44）この授業をどう評価するのかということで採用したのが、ＩＣＥモデルです。酒井将平先生が土持ゲーリー先生や広島の柞磨先生などの有名な先生を呼んできてくれて、研修を受けました。私の理解は浅いですが、このように「Ｉ」「Ｃ」「Ｅ」で、学びの質を問うていく、振り返って評価していくというものです。

（スライド 45）実際に、第１回のガイダンスの授業の最後に生徒たちに、何を学んだのか、ＩＣＥモデルで振り返ってみようと言います。探究ナビとはどんな授業かを説明したので「Ｉ（アイデア）」のところに書いてほしいと言います。それは社会の変化とつながっているという話をしたので「Ｃ（つながり）」に、この探究授業がなぜ社会の変化とつながっているかを書いてほしいと言います。最後に、人生に応用できるかということだから、ここで学んだことが将来どのようなときに役立つと想定できるかを「Ｅ（応用）」に書いてほしいと言って、ＩＣＥモデルによる振り返りの練習をさせて、この３年間のスタートを切るということになっています。

（スライド 46）探究ナビは、１年生のテーマが「人とつながる」で、２年生は「社会とつながる」、３年生は「未来を切り拓く」となっています。探究ナビⅠを担当する私は「人とつながる」を具体化するために「コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる」ということを目指して、教案を組んでいきます。先ほどの、ピラミッドの下から順番に行っていくことも生徒は理解しています。１年生は、特に下の部分に力を入れるという形で行っています。

（スライド 47～51）ＩＣＥモデルをきちんと使い切れているか自信はありませんが、このように、毎回の授業で生徒にそれぞれ学んだことを、振り返って書いてもらっています。

（スライド 52）振り返りのときに、教育用語も生徒と共有したほうがよいと思っています。ポートフォリオやメタ認知という言葉が教員

の間ではたくさん出ているのですが、生徒自身にもこれらの言葉を教えて、きちんと教員と生徒の共通言語にしていきます。教員の側ばかりが分かっていても良くないと思います。生徒にポートフォリオという言葉はファイルと何が違うのかという話をします。

（スライド 53）メタ認知はどういうことかという話もします。

（スライド 54）振り返るというのは、ポートフォリオをメタ認知することなのだということ、それがあるとどうなるのかということを伝えます。何のために毎回の振り返りを行っているのかというところを共通理解した上で、きちんと１学期全体を振り返ろうと言います。新しい教育用語も、生徒と共通のものにしていくということです。

（スライド 55～58）１学期全体の振り返りで、生徒たちが「E（応用）」のところをどのように書くのかによって、学んだことをどのように応用できるのか、どのように身に付いたのかというところを見ることができます。コミュニケーションが苦手だと言う生徒もいるのですが、人との関わり方が変わったと言って、自覚がある生徒もいました。他は見ていただければと思います。

（スライド 59）２学期は、キャリア教育に取り組みますが、コミュニケーションの応用編という位置付けです。

（スライド 60～67）その振り返りで、一度このようなことをしたことがあります。仕事のことについてしっかり学んだことを「I（アイデア）」のところに書いてもらった後に「仕事と学校の勉強がつながっているとしたら、どうか。学校の勉強なんか将来役立たない、つながっていないって言う友達がいたら何と言う？」というように聞いたり「授業を受けている生徒に『何をしているのですか？』って聞いたら、生徒Aは『黒板を写しています』、生徒Bは『受験勉強しています』と答えましたが、最も意欲が高い生徒Cなら、何と答える？」というように聞いてみたりしたのです。そうすると「“させられている”じゃなくて、“したいから”という理由で進学したんじゃないの？それを役に立たないというのなら、自分がしたい職業についたとしても、何もできないよ」というように、その姿勢の問題などを友達に言ってあげると答えた生徒がいました。「役に立つか役立たないかじゃなくて、学校の勉強が社会の中でどんな役割を果たしているかを考えてみようよ」というように、メタ認知してみようということを書いたり「学んだ中身が直接、役に立たなくても、そこに関わる中で身に付けた力は役立つはずだ」というように書いたりする生徒がいました。自分がしていることの意味を、生徒自身が自分の言葉で一生懸命説明しようとしていれば、メタ認知が実践できているということですよね。「お金や家は燃えたらなくなります。ただ、自分の勉強した知識は燃えません」「新しい学問を作るため」などと答えてくれた生徒もいました。この生徒のはよいですね。「将来どこかで、誰かのために役に立つと思って、たくさんのことを学びます」。教員は「勉強するのは自分のためだ。将来、通用しないぞ。自分のために勉強しなさい」ということをよく言いがちですが、この生徒は「勉強するのは世のため、人のためなのだ」と言うわけです。自分のことだから頑張れるという生徒も素敵です。澤井先生の発表は大変勉強になりましたから、私もまねしようと思ったのですが、他人事だから頑張れるということがあってもよいのではないかという気もします。このような考えこそ、大事にしてあげたいと思いました。

（スライド 68）そのようにして行っていく中で、将来、仕事に就くわけなので、仕事を調べて終わるのではなくて「仕事に就いている前提で職業説明会、就職説明会をする」という課題に取り組みます。

（スライド 69～73）モザイクをかけていま

すが、授業はこのような雰囲気です。今は、新型コロナウイルスの感染予防のため、ここまでできていないときもあります。これは昨年度ですが、このように探究ナビの授業を実際に行っています。教員がサポートして、生徒は当事者意識を持って、社会人として、自分事として説明するところです。ここは、先ほどの澤井先生のところと同じようなことかと思いました。

（スライド 74、75）最後に、総仕上げで、演劇をしています。これは、コミュニケーション力の集大成という位置付けで行っています。文化祭と違って、台本も、音響も、衣装も、小道具も大道具も使わずに表現するという創作劇にチャレンジしてもらっています。あらすじだけあって、アドリブも入れながら、全部、自分たちでその場で表現していく劇にチャレンジしてもらっています。全員が舞台に立って、全員が出場します。苦手と言っている生徒にも、それぞれの持ち味を生かせる役をみんなが考えて、行ってくれている状況です。裏方はいません。

（スライド 76）このようなときにもやはり、なぜ行っているかを伝えます。「それぞれの存在を肯定し合おう。対話をしよう。そのために劇をやっているよ。ただの文化祭じゃないよ」と言っています。平田オリザさんの言葉もきちんと生徒に紹介して、会話と対話は違うという話をします。

（スライド 77）応援しに来てくれている劇団員の方がいらっしゃるので、その方たちとも対話をします。「劇団の人に答えを聞くのではなく、対話してほしい」と言っています。また、教員と劇団員との対話のチャンスでもあります。外部を使うと、すぐに「お任せします」のような形になりがちですが、そこも対話なのです。私が「劇を楽しんでね」と言ったら、劇団員の方が後で「『楽しめ』と言っても、楽しめない人がいますよね」とおっしゃったことがあって「ああ、そうだな」と。劇団員の方に教えてもらいました。私は、すぐ「楽しめ」と言ってしまうので、良くないと反省しました。その反省をすぐに生徒に伝え、楽しめないということも人間的な心理状態だから、演劇では大事だという話をしました。そのような対話の機会になって良かったと思いました。

（スライド 78）これで最後です。これまでは探究の授業を行っているだけで先進的・先導的というように言ってもらえたところもありましたが、実際には、非常に力のある先生方がしっかりとされてこられたからというところもありました。これからは、まさに中身が問われるのだろうと思っています。そのときに、力のある教員が力技で行うのではなくて、体制でしっかりと行っていく、中身もしっかりとつくり上げて、しっかり残して、積み上げていけるようにしたいです。何をするか、１年後、そして３年後どうなっていくのかをみんなが共有できる状態で、教員が替わっても常にスタートできるようにしていく必要があります。一人１台ＰＣを持つ環境を活用できるようにしたいと思っていますし、特に探究ナビⅢは今後どのように行っていこうか、今はクエストカップを主に行っていますが、２年生に下ろして、３年生の中身を変えようかとも思っています。澤井先生の学校で行っていたことが、とても素敵だと思っているので、そのようなことも取り入れていけたらと思っています。

ありがとうございました。

田中　昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）・池田　径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）

スライド1

発見・探究・感動・自信

資質・能力の育成に向けた
10年の授業研究の歩み
～PISA型学力と探究力
の育成をめざして～

大阪府教育センター附属高等学校
田中昌一・池田　径

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド2

発見・探究・感動・自信

大阪府教育センター附属高校とは？

2011年　全国初の「教育センター」附属高校
としてスタート

（イ）「大阪府教育センター」と連携し、
大阪の新しい教育にいち早く取り組む
ナビゲーションスクールとして、
大阪府の教育を先導する役割を持つ

（ロ）実生活で課題を解決する力「PISA型学力」
を育成し、社会に貢献できる生徒を育てる

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド3

発見・探究・感動・自信

本日のお話

（1）学校全体で取り組む授業研究

（2）「探究ナビ」の今
～2014年報告から、どう変わったか～

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド4

発見・探究・感動・自信

学校全体の授業研究の取組み

2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
多様な学習成果の評価手法に関する調査研究								
STEP1	STEP2	STEP3						
	観点別学習状況評価の取組						スマートスクール事業	
	1年次必履修科目ｼﾗﾊﾞｽ作成	2年次必修科目ｼﾗﾊﾞｽ作成 1年次実践	残りの全科目ｼﾗﾊﾞｽ作成 1、2年次実践	全科目で実践	全科目で実践及び改善（PDCAサイクル）		1人1台PC（タブレット）環境における授業の研究	
			基礎学力の定着に向けた調査研究			クローバープランの継続	授業デザインシートによる授業実践	
			パフォーマンス課題をシラバスに位置づける	クローバープラン（カリキュラムマネジメントとポートフォリオ）の開始	ICEモデルにより学びを深める	授業改善・学習改善のPDCAサイクルの実践		

大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

スライド5

◎2013年度～2015年度

「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」（文部科学省）を授業研究の柱として、
3つのステップで、「評価が難しい多面的な資質・能力についてその評価手法及び評価指標」について研究し、授業改善に取り組んだ。その成果を活かす。

(Step1) 生徒主体の授業(アクティブ・ラーニング)に取り組む。

(Step2)指導と評価の計画を意識し、パフォーマンス課題に取り組む。

(Step3)パフォーマンス課題の実践、ルーブリック(評価指標)づくりに取り組む

スライド6

◎2016年度～2018年度
「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究」（文部科学省）を柱とした取り組み

（1）観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成と授業の実践

授業の目標・ねらいが明確になった。
（※）ルーブリックの活用も効果的に実施
⇒　生徒には、何ができて何ができていないか、
何を頑張れば良いのかが理解しやすくなった。

（2）パフォーマンス課題をカリキュラムに位置づける（逆向き設計論）
「本質的な問い」から、パフォーマンス課題を考え、
それを単元末の目標として、各授業を組み立てていく。

例　コミュニケーション英語Ⅰ　日本文化紹介のスピーチ
・原稿作成　・ペアで練習　・グループで練習　・クラスでスピーチ

⇒ 前向きに頑張る生徒の増加

スライド７

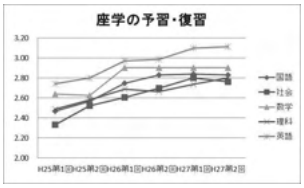
（1）観点別学習状況評価に基づくシラバスの完成と授業の実践

授業の目標・ねらいが明確になった。
（※）ルーブリックの活用も効果的に実施
⇒　生徒には、何ができて何ができていないか、
何を頑張れば良いのかが理解しやすくなった。

（2）パフォーマンス課題をカリキュラムに位置づける（逆向き設計論）
「本質的な問い」から、パフォーマンス課題を考え、
それを単元末の目標として、各授業を組み立てていく。

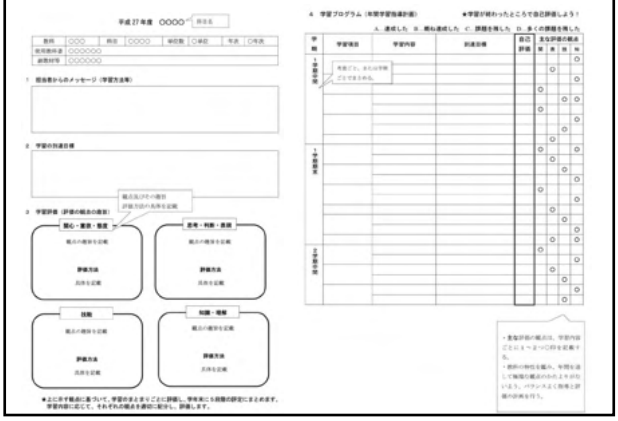
➡ 前向きに頑張る生徒の増加

授業アンケートの結果より
（4）あてはまる
～（1）あてはまらない
の平均値の推移

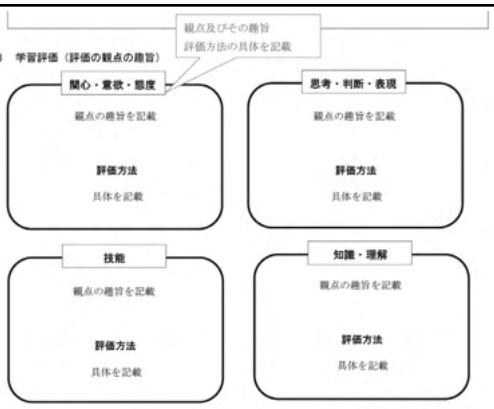


スライド８

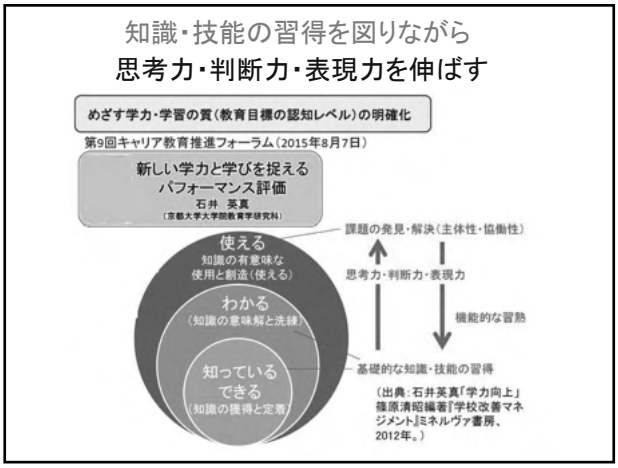
（例）観点別学習状況評価に基づくシラバスの雛型（当時）



スライド９

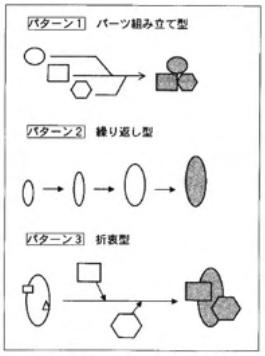


スライド１０



スライド１１

パフォーマンス課題の位置づけ



図Ⅰ－1　パフォーマンス課題の位置づけ

例　数学Ⅰ　1次不等式の応用
「当選確実には何票必要か？」
・不等式の性質
・1次不等式の解き方
・文章を読んで、条件を不等式で表す。
・パフォーマンス課題（当選確実の必要票）

例　コミュニケーション英語Ⅰ
日本文化紹介のスピーチ

・原稿作成
・ペアで練習
・グループで練習
・クラスでスピーチ（パフォーマンス）

「逆向き設計」で確かな学力を保障する
（西岡加名恵　編著）より

スライド１２

（例）「英語のスピーチ」のルーブリック

スピーチの評価基準

観点	A:十分満足できる	B:おおむね満足できる	C:努力を要する
発音	・よく聞こえる明瞭な発声で話している ・意味を理解する上で問題となるような発音の間違いがない。	・教室全体どこにおいても聞こえるような声でスピーチしている。 ・ところどころ発音の間違いはあるが、ないよう理解の妨げになることはない。	・ほとんど聞こえないか、教室の位置により、よく聞こえないことがある。 ・発音の間違いが多く、内容の理解を妨げることがある。
話しぶり	・聴衆にまんべんなく視線を送りながら、語りかけるように話している。 ・適宜、ジェスチャーも交えながら話している。	・主に聴衆の方を向いて話している。 ・ときおりジェスチャーを交えている。	・まったく前を見る様子がない ・ほとんどジェスチャーがない。
暗記の程度	・まったくかほとんど原稿を見ずに話している。	・時おり原稿を見ながら話している。	・ずっと原稿を見ており、文章を読むような状態になっている。
内容	・説明がはっきりしていて日本文化について容易にイメージできる。 ・スピーチの中に印象に残る部分があり、聞いた後、詳細に思い出せる。	・説明がある程度はっきりしており、日本文化について理解することができる。 ・スピーチを聞いた後に、少なくとも一部分は思い出すことができる。	・日本文化についての説明がわかりにくい。 ・印象に残る部分がない。

スライド 13

（例）数Ⅰ「逆向き設計」論　ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽ課題のｼﾗﾊﾞｽへの位置づけ

	4月	5月	中間	5月	6月	期末	7月	8月	9月	10月	中間
学習項目	数と式	図形		1次不等式・2次関数			2次関数		2次関数　2次方程式		
パフォーマンス課題				連立1次不等式					2次関数の最大・最小		
例題				ビタミンたっぷりなバナナシェイクを作成するのに必要なバナナの本数					たい焼きの売り上げ金額の最大値		
確認テスト				ヘルシーなバナナシェイクを作成するのに必要なバナナの本数					焼きおにぎりの売り上げ金額の最大値		
定期考査の範囲					野球部のボールの購入個数の範囲					ミニクロワッサンの売り上げ金額の最大値	
科目の目標つけたい力	「数と式」「2次関数」「図形と計量」「データの分析」について理解し、各単元の基礎的な知識と技能の習熟を図る。単元末にパフォーマンス課題を位置づけ、事象を数学的に考察する能力を育て、数学のよさを認識し、さらにそれらを活用する態度を育てる。										

10月	11月	12月	期末	1月	2月	期末
2次不等式　三角比				正弦定理・余弦定理		
2次不等式				正弦定理 余弦定理		
モンブランの販売価格の範囲				川にかける橋の長さの決定		
シュークリームの販売価格の範囲				川にかける橋の長さの決定		
		X'masケーキの販売価格の範囲			川にかける橋の長さの決定	

スライド 14

◎見えてきた課題から、新しい計画へ

【課題】

与えられた課題に対しては、前向きに取り組めるが、
自ら課題を見つけ、計画的に取り組む力が弱い。

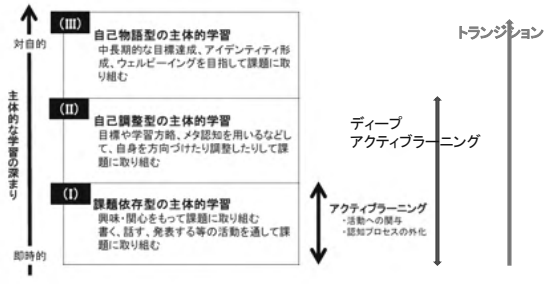
・ベネッセ進路マップの成績の伸び悩み
・家庭学習時間が少ない

【対策】 課題依存型 の主体的な学び
⇒ 自己調整型の主体的な学びへ

「メタ認知能力の育成」
「カリキュラムマネジメントの実践」

スライド 15

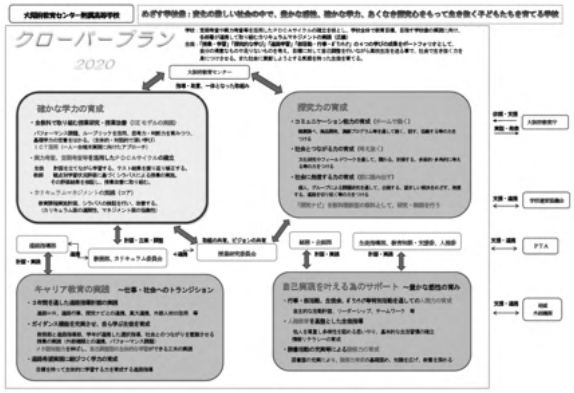
課題依存型⇒自己調整型へ（（Ⅰ）→（Ⅱ））



2015/8/8高校教育フォーラム　溝上慎一先生（当時・京都大学）講演資料より

スライド 16

（3）クローバープラン



スライド 17

メタ認知能力を育成するには？
ヒントは、「京都大学の教員養成ポートフォリオ」

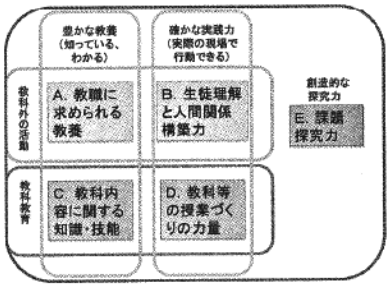


図 3-2　教師に求められる力量の５つの柱

『アクティブラーニングの評価（松下佳代・石井英真編）』の石井先生の記述より

スライド 18

クローバープラン

授業の学び・学力向上の取組み
- 授業による成果　授業における成果
- 実力テストや基礎学力テストにおける成果
- 英検、数検定、漢検等の成果

探究的な学び
- 「探究ナビ」における成果
- 探究で学んだ事を活かした成果　等

（例）「課題研究」による成果
演劇的手法を活かした研究発表

進路学習、将来の目標に向けた取組み

進路ＨＲ等で学んだ事を活かした成果　等

例「教師にまっすぐ」、大学公開講座参加
府庁内インターンシップ参加　等

部活動・行事等における学び
- 部活動・行事、生徒会活動、ボランティア活動　等

例　大会、コンテスト、
コンクール等の成果、成績

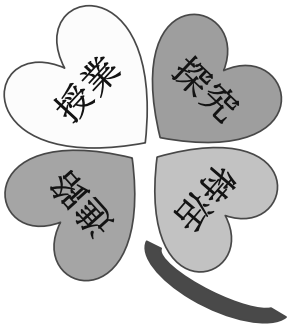
スライド 19

クローバープラン

- この**4つの学習や取組み**を、高校3年間を通して行い、その成果を**クリアーファイル**に**ポートフォリオ**としてストックしながら、**目標を持った高校生活**を送る。
- **将来の目標を考え、自分が今何をすべきか、何が自分に足りないかを考え、自己調整**をする。（メタ認知能力）
- このような高校生活を通して、**社会で生き抜く力**を身につける。

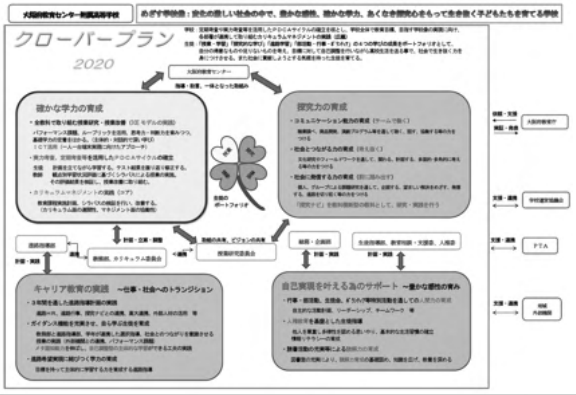
スライド 20

生徒のクローバープラン



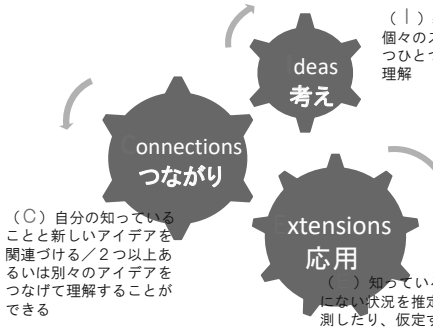
スライド 21

（3）クローバープラン



スライド 22

（4）「ICEモデル」により、学びを深める



（Ｉ）基礎、事実、個々のスキルなど、一つひとつのアイデアの理解

（Ｃ）自分の知っていることと新しいアイデアを関連づける／２つ以上あるいは別々のアイデアをつなげて理解することができる

（Ｅ）知っていることから今までにない状況を推定する／結果を予測したり、仮定する／学んだことの意味合いを理解する／仮説を立てる／新しい課題に対応する

教育センター附属高校校内研修資料より
（京都情報大学院大学・土持ゲーリー法一先生（当時帝京大学））

22

スライド 23

◎2019年度～2020年度

(1)「学年別年間指導計画一覧表」を作成。
3年間の学習の流れを把握し、目標をふまえ、教科等横断的な視点で、その目標達成に向けた教育内容を組織的に配列する。

(2)「生徒の力を伸ばす**授業デザインシート」**を作成、実践・
教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。

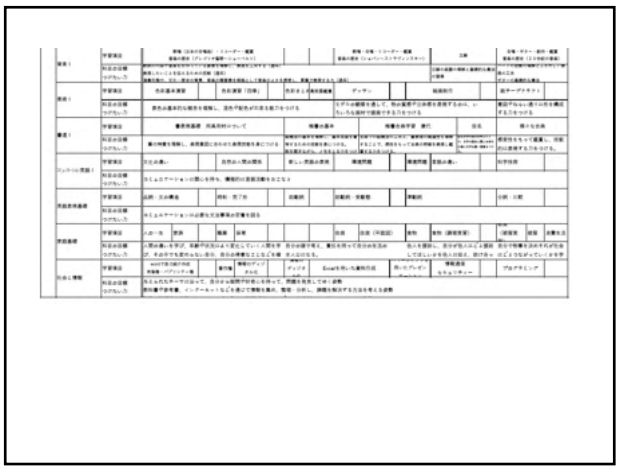
(3)生徒の主体性を伸ばす為に、**ポートフォリオを活用。**
（クローバープランをキャリア・パスポートとして実践する。）

(4)1人1台PC（タブレット）を使った授業を想定し、ICTを効果的に活用した指導方法や授業デザインについて、実践・研究。
（**スマートスクール推進事業（大阪府）**）

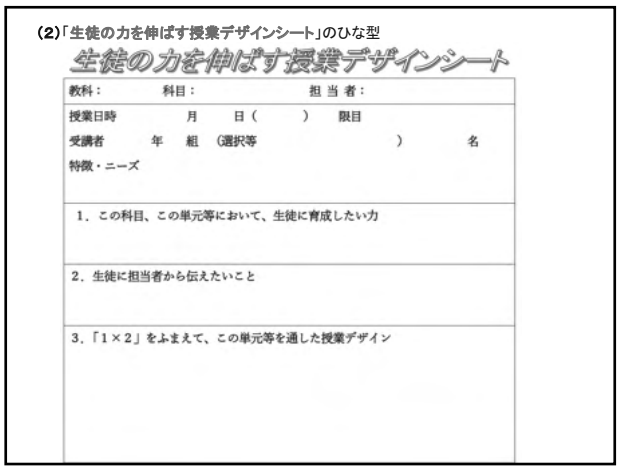
スライド 24

(1)「学年別年間指導計画一覧表」のイメージ

スライド 25

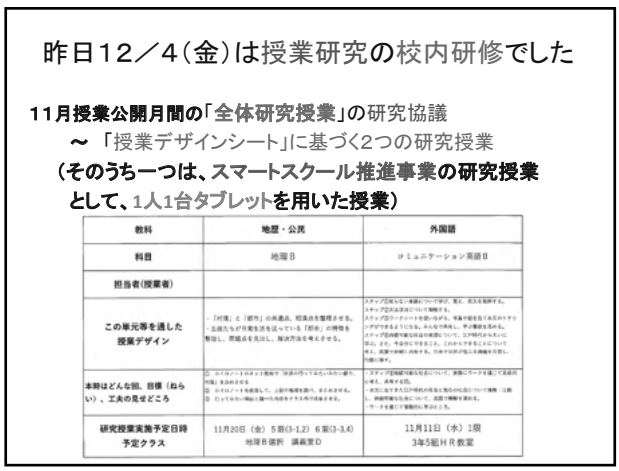


スライド 26

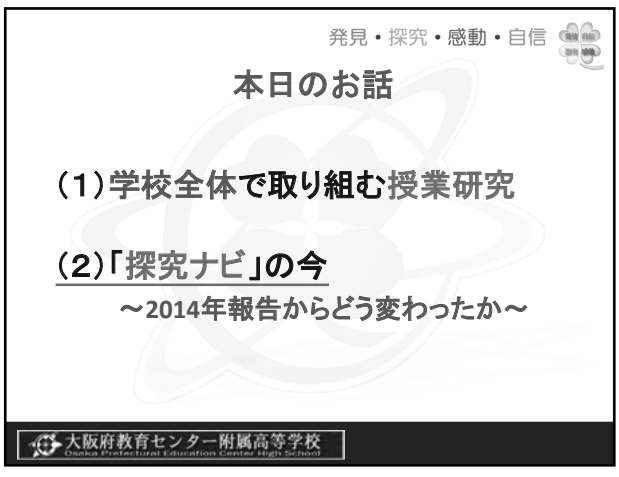


スライド 27

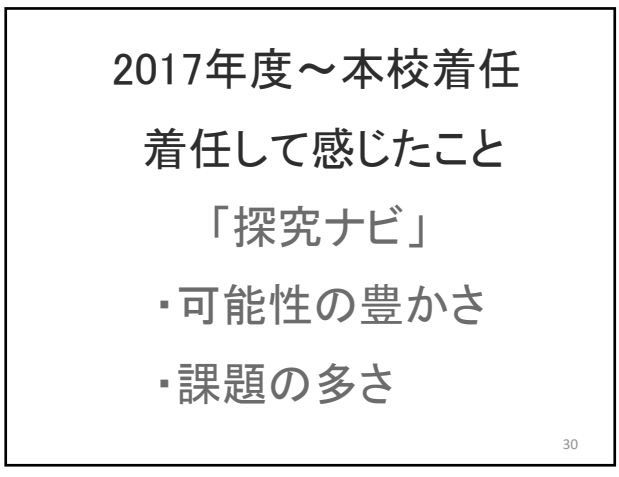
スライド 28



スライド 29



スライド 30



スライド 31

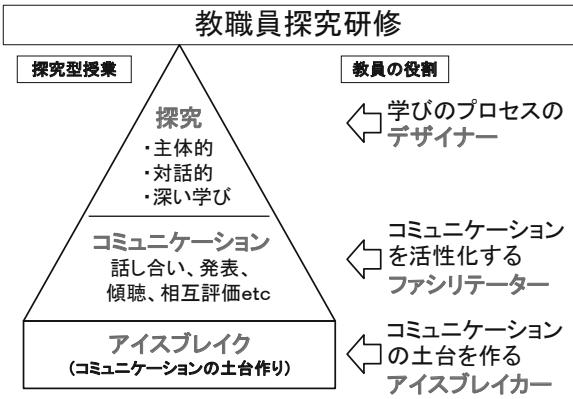
なぜ「探究」なのか

教育の今日的課題を
教員と共有する

共通理解＋実践力

31

スライド 32



32

スライド 33

～なぜアイスブレイクなのか～

①コミュニケーションツールの発達による
コミュニケーション能力の低下
（例）イエデンとスマホ、電話が苦手な新入社員

②社会のコミュニケーション化による
コミュニケーションからの撤退
（例）自称コミュ障、伊達マスク、ぼっち席

現在、学問領域のみならず多くの分野で「コミュニケーション的転回」が進行しています。（中略）それは「人と人が何らかの合意に至ろうとして話し合ったり共に行動したりすることが、多くの分野や場所で重要な意味を持つようになった」ということです。
高田明典『現代思想のコミュニケーション的展開』（筑摩書房、2011年）.

③クラス内のポジショニングの問題
（例）スクールカースト、キャラ設定、“優しい関係”

土井隆義『友だち地獄―空気を読む世代のサバイバル』（ちくま新書、2008年）.

33

スライド 34

～アイスブレイクで大切なこと～

①生徒をコミュニケーションへと追い詰めない
→生徒をコミュニケーションへと動機づける

②生徒のために探究型授業がある
→探究型授業のために
生徒がいるのではない

※良きアイスブレイカー＆ファシリテーターになるために
アタマで理解する ⇨ ココロとカラダも使って体験する
（動いて感じて理解する）

34

スライド 35

教職員探究研修でアイスブレイクやファシリテーションの進め方を体験的に理解する。

35

スライド 36

教職員探究研修でアイスブレイクやファシリテーションの進め方を体験的に理解する。

36

スライド 37

なぜ「探究」なのか

教育の今日的課題を
生徒と共有する

意味＋動機

※教員による
意味づけ、価値づけ

37

スライド 38

探究ナビⅠ　第1回

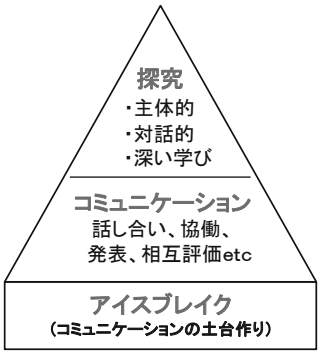
－オリエンテーション－

探究の授業について、社会の変化や自己の将来と関連付けて理解し、他者に説明することができる。

38

スライド 39

探究ナビとはどんな授業か



本校生徒は全員
週1回、2時限連続の
「探究ナビ」を
3年間受け続けます！

探究ナビⅠ（1年生）
＝人とつながる

探究ナビⅡ（2年生）
＝社会とつながる

探究ナビⅢ（3年生）
＝自己の未来を切り拓く

スライド 40

探究ナビとはどんな授業か

先輩たちが「探究ナビⅢ」で取り組んできたこと

クエストカップby教育と探求社

＝実在の企業が出すミッションに合う
商品・サービスをクエスト（探究）し、
プレゼンテーションする

2年前から参加し、
2年連続全国大会出場！

⇒全国大会2019の様子をご覧下さい。

スライド 41

なぜ探究ナビなのか①学校と社会のギャップ

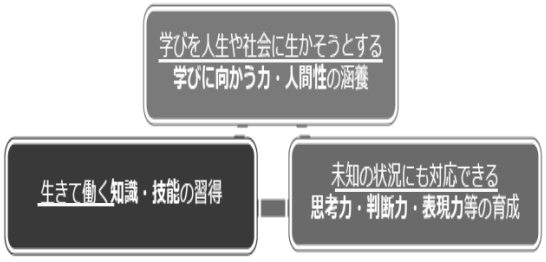
	学校 小・中・高・大学	社会 第4次産業革命、ソサエティ5.0、超スマート社会etc
どんな課題が出るか	与えられた課題 答えが決まっている課題	→自ら見つけた課題 →答えが多様な課題
誰と解くか	ひとりで	→みんなで
解いている間は	黙っている	→話し合う・学び合う
分からないときは	先生が教えてくれる	→分かる人を探して聞く →現場に行って調べる
参考等	教科書・資料集 （インターネットを見る）	→インターネットで聞く →インターネットでつながる
課題解決の形式	自学自習型	→協働・探究型

41

スライド 42

なぜ探究ナビなのか②新学習指導要領

～新しい時代に必要となる資質・能力～



⇒高校側：授業改革（主体的、対話的で深い学び）
⇒大学側：入試改革（多面的総合的選抜の実現）

42

スライド 43

本校は10年前の創立時から
本校独自の新しい科目として
「探究ナビ」を実施してきました

［従来の授業］
講義型
知識の注入
教師から生徒へ
一方通行

［探究ナビ］
参加型
知識の活用
生徒の学びを
教師がサポート

43

スライド 44

探究では「振り返り」が重要です！

ICEモデルで評価

Ideas（I）：アイデア
＝基礎的な知識や技術の学び

Connections（C）：つながり
＝基礎的な知識や技術どうしのつながりを課題や作業を通じて理解する学び

Extensions（E）：応用
＝自らの体験や生活に結び付けた知の応用、新しい価値を生み出す学び

スライド 45

今回の「振り返り」をしてみよう！

今回の振り返り

探究ナビはどのような授業なのか、社会の変化や自己の将来と関連付けて説明しなさい。

今回のICEルーブリック

要素	I（アイデア）	C（つながり）	E（応用）
探究ナビ	探究ナビの授業内容について理解している。	探究ナビの授業内容について、社会の変化と関連付けて説明できる。	探究ナビの授業内容が、自己の将来において役立つ場面を具体的に想定できる。

スライド 46

探究ナビⅠ
（1）テーマ「人とつながる」
※探究ナビⅡ「社会とつながる」、探究ナビⅢ「未来を切り拓く」
→コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる。
（2）コンテンツ
1学期
①アイスブレイク（クラス開きHR）
※名前や言葉が持つ力とその使い方
②チームビルディング
※目標を共有することでチームになれる素晴らしさと怖さ
③コミュニケーションⅠ
※ノンバーバル、イエスアンドとIメッセージ、コンセンサス
・防災（災害シミュレーションゲーム）
・夏休みの宿題（フィールドワーク＆プレゼンテーション）

スライド 47

探究ナビⅠ　2学期第1回

－ 振り返りの重要性 －

学びの記録（ポートフォリオ）を作成し、自分の学びを自分で振り返る（メタ認知する）ことで、自分の学びを自覚し、定着させ、自己の成長につなげる。

47

スライド 48

第2回授業「探究とアイスブレイク」

I：アイスブレイクとは何ですか。

C：なぜアイスブレイクを探究の授業で行うのか。アイスブレイクが探究の授業で必要な理由を説明しなさい。

E：アイスブレイクのやり方を学ぶと、実生活のどんな場面でどんな風に役立てられますか。

要素	I（アイデア）	C（つながり）	E（応用）
アイスブレイク	アイスブレイクについて理解している。	アイスブレイクと探究の授業の関連性について説明できる。	アイスブレイクを実生活の具体的な場面で役立てることを想定できる。

スライド 49

第3回授業「人間関係作りと集団作り」

I：人間関係作りや集団作りを促進したり、チームワークを高めたりするためには、どのようなことをすれば良いか、説明しなさい。

C：仲間作りが仲間はずれ作りにつながる例を、自分の体験や社会の事例と結びつけて説明しなさい。

E：以下の状況で、あなたならどのように言いますか。今日の授業を踏まえてセリフの形で答えなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
人間関係作りと集団作り	人間関係作りや集団作りを促進する要素について、自分の言葉で説明できる。	仲間作りが仲間はずれ作りにつながる例を、自分の体験や社会の事例に当てはめて説明できる。	異質なものや少数派を排除しない集団づくりのために、自分のできることを考え、周囲に働きかけることができる。

スライド 50

第4回授業「発信と受信、バーバルとノンバーバル」

I：ノンバーバル・コミュニケーションの重要性（影響力）について、説明しなさい。ただし、説明の中に必ず「メラビアンの法則」という用語を入れること。

C：相手のメッセージを受け止めるためには、どういうことが大事になりますか。今日のゲームや聴くワークで分かったこととつなげて、具体的に説明しなさい。

E：現代の社会でカウンセラーという職業が存在し、人々に必要とされているのはなぜだと思いますか。あなたの考えを書きなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
コミュニケーション	ノンバーバル・コミュニケーションの重要性（影響力）について、学んだ知識を使って自分の言葉で説明できる。	メッセージを受け止めるときに大事になることを、自分の体験や学びとつなげて具体的に説明できる。	現代の社会で受け止めることを専門にする職業が存在し、人々に必要とされている理由を分析できる。

スライド 51

第5回授業「つなげて返して合意する」

I：相手を否定せずに自分の意見を返す（言う）方法には、どんなもの（言い方）がありますか。具体的に説明しなさい。

C：グループで話し合って合意を取る時、なるべくメンバー全員が納得するにはどうすれば良いですか。今日の体験とつなげて具体的に説明しなさい。

E：日常生活で、お互いに「もう話したくない」と感じて、関係が断絶しそうになる時、コミュニケーションの面から見ると、その2人にはどんな問題が生じていると考えられますか。考えられるコミュニケーション上の問題点の指摘と、改善方法の提案をしなさい。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
つなげて返して合意する	相手を否定せずに自分の意見を返す（主張する）方法を具体的に説明できる。	グループで話し合って合意を取る時に、メンバー全員が納得するにはどうすれば良いか、自分の体験とつなげて説明できる。	日常生活で、両者の間のコミュニケーションに断絶が生じる時、そこに想定されるコミュニケーション上の問題点を指摘し、それに対する改善策を提案できる。

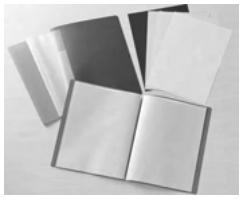
スライド 52

振り返りの重要性①ポートフォリオ

Portafoglio（伊）→Portfolio（英）

・Porta ＝「運ぶ」
・Foglio＝「紙」

書類を運びながら出し入れできるケース



ポートフォリオ
＝「学びの記録」を残し、生徒が自らの学びのプロセスを振り返って、評価するためのもの

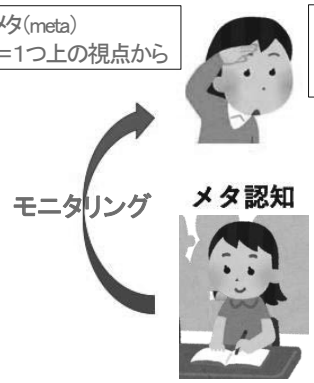
52

スライド 53

振り返りの重要性②メタ認知

メタ(meta)
＝1つ上の視点から

メタ認知
＝自分で自分を見る
＝自分の学びを自覚する



53

スライド 54

振り返りの重要性　まとめ

振り返る
＝ポートフォリオを
メタ認知する！
＝自分の学びの記録を自分で見て
自分の学びを自覚する！

振り返り ➡ 学びの自覚（定着・応用） ➡ 自己の成長

1学期全体の授業内容を振り返ろう！

54

スライド 55

2学期第1回「振り返りの重要性」

Ⅰ:1学期の授業内容で最も印象に残っているものをひとつ選び、理由を書きなさい。

C:1学期の授業全体を通して、総合的に考えると、あなたにとって最も重要な学びや気づきは何だったと思いますか。

E:1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

要素	I(アイデア)	C(つながり)	E(応用)
振り返り	1学期の授業内容から最も印象に残っているものを選び、理由を説明できる。	1学期の授業全体を振り返り、自らの学びや気づきを総合的に説明できる。	1学期の学びが自己の生き方(考え方・行動)にもたらした影響や変化を分析できる。

スライド 56

2学期第1回振り返り用紙より

E:1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

私は1学期に探究の授業をして人との関わり方が変わったなと思いました。人と話す時は微笑むなどと考えるようになりました。昔は愛想がまったくなかったからです。もう一つ変わったことは周りをよく見ることです。周りをよく見て気づける人間になろうと思ったからです。

56

スライド 57

2学期第1回振り返り用紙より

E:1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

この授業を受ける前は、クラスになじめるかどうか心配だったり、あまり他の子に自分から話にいったりしなかったのですが、この授業で人との関わり方を学んで、前よりも自分から話しかけたりするようになったと思います。

57

スライド 58

2学期第1回振り返り振り返り用紙より

E:1学期に学んだことによって、あなたの考え方や行動にどのような影響や変化がもたらされましたか。

集団で話している時に会話に入れていない子がいたら、今まで以上に気にかけるようになった。こんな風に言っても大丈夫かなと相手のことをよく考えるようになった。

58

スライド 59

2学期

④コミュニケーションⅡ

※アンガーマネジメント、ピアメディエーション

⑤キャリア教育(コミュニケーション応用)

※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ

※社会人(当事者)に成りきって就職説明会を実施

スライド 60

探究ナビⅠ　2学期第5回

ー適性検査と職業調べー

適性検査の結果に基づいて、適性のある職業について調べるとともに、様々な職業についても広く知り、働く意味を考える。

60

スライド61

2学期第5回「適性検査と職業調べ」

I：今回調べた仕事の中からひとつ選び、その仕事の内容やりがい、その仕事に就くためにやっておくべきこと等の情報をまとめて紹介して下さい。

C：仕事（働くこと）と学問（学ぶこと）は関連していることを踏まえた上で、「学校の勉強なんて将来役に立たない」という友人に、そうではないことを説得力のある言葉で伝えて下さい。

E：授業を受けている高校生に「あなたは何をしているのですか」と聞いたところ、生徒Aは「先生が黒板に書いたものをノートに写しています。」と答え、生徒Bは「進学するのに必要なので勉強しています。」と答えました。最も意欲の高い生徒Cなら、何と答えるでしょう。

要素	I（アイデア）	C（つながり）	E（応用）
適性と職業	仕事について調べ、得た情報をまとめて提示することができる。	仕事と学問の関連について、説得力のある内容で表現できる。	意味を深く考えることが意欲の高さを支えることを、日常生活で創造的に活用できる。

スライド62

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

学校の勉強は“させられてる”じゃなくて、“したいから”という理由で進学したんじゃないの？それを役に立たないというのなら、自分がしたい職業についたとしても、何もできないよ。

62

スライド63

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

将来に役立つか役立たないかじゃなくて、学校の勉強が社会の中でどんな役割を果たしているか考えてみようよ。

63

スライド64

2学期第5回振り返り用紙より

C:「学校の勉強なんて将来役に立たない」と言う友人に何と言う？

確かに直接役に立つことは少ないかもしれないね。でも、考え方とか調べ方、人と話し合って物事を解決することができる力が身についてるはずだよ。それは将来、人と過ごしていく上で、すごく大事なことだよ。

64

スライド65

2学期第5回振り返り用紙より

E:生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？

お金や家は燃えたらなくなります。ただ、自分の勉強した知識は消えません。
知識は一番の財産であり、その財産を蓄えています。

65

スライド66

2学期第5回振り返り用紙より

E:生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？

私が新しい学問を作り、
後世に残したいから、
勉強をしています。

66

スライド 67

２学期第５回振り返り用紙より

E：生徒A「先生が黒板に書いたものをノートに写しています」生徒B「進学するのに必要なので勉強しています。生徒Cなら？

将来どこかで、誰かのために役に立つと思って、たくさんのことを学んでいます。

67

スライド 68

就職説明会について

チームで仕事をひとつ選び、
その仕事をしている社会人に成りきって、
学生向けの就職説明会を開催する。

仕事内容、年収などの労働条件、
やりがいをプレゼンテーションする

今回は各チーム模造紙1枚、
持ち時間5分以内で実施する。

生徒同士でプレゼン評価をする。

68

スライド 69

「探究ナビⅠ」授業風景

スライド 70

iPadも活用してグループワーク

スライド 71

生徒の学びを教員がサポート

スライド 72

就職説明会

スライド 73

生徒による審査

スライド 74

2学期

④コミュニケーションⅡ

※アンガーマネジメント、ピアメディエーション

⑤キャリア教育（コミュニケーション応用）

※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ

※社会人（当事者）に成りきって就職説明会を実施

⑥劇作り（コミュニケーション総合）

※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない創作劇を上演

3学期

・創作劇のクラス発表会

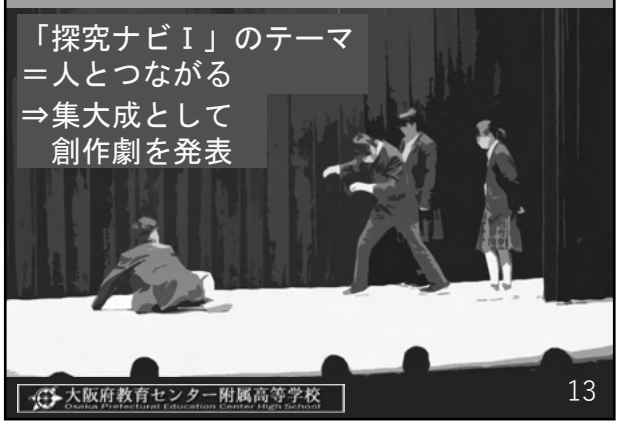
・クラス代表班の発表会

（教育センター大ホール）

スライド 75

探究ナビⅠ発表会@教育センター大ホール

「探究ナビⅠ」のテーマ
＝人とつながる
⇒集大成として
創作劇を発表



大阪府教育センター附属高等学校
Osaka Prefectural Education Center High School

13

スライド 76

劇作りについて

「存在の肯定」をしあいながら、
「対話」を重ねて物語を作り、上演する。

※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない。

会話＝価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。
「対話」は、AとBという異なる二つの論理が摺(す)りあわさり、Cという新しい概念を生み出す。AもBも変わる。まずはじめに、いずれにしても、両者とも変わるのだということを前提にして話を始める。
平田オリザ『わかりあえないことから』（講談社現代新書、2012年）

76

スライド 77

生徒　　劇団員

集団
集合知
多様性
対話

対話

専門家
専門知
専門性

教員　　劇団員

外部との連携 ≠ 外部への丸投げ
＝外部との対話の機会

スライド 78

「探究２．０」へ

これまでは探究の授業を
やっている＝先進的先導的

→これからはその中身が問われる

今後の課題

・探究に取り組む体制の充実
・１人１台タブレットのさらなる活用
・探究ナビⅢの内容再編

78

資質・能力の育成に向けた 10 年の授業研究の歩み
～PISA 型学力と探究力の育成をめざして～

大阪府教育センター附属高等学校　田中 昌一
池田　 径

１．学校全体で取り組む授業研究

（１）取り組みの概要

2013 年度より始まった授業研究は、文部科学省の２つの調査研究事業「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究」を通して、授業実践と検証を行ってきた。

（２）2013 年度～2015 年度　**高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究**（文科省）

（３）2016 年度～2018 年度　**高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究**（文科省）

・**観点別学習状況評価**の取り組み

シラバスや定期考査を観点別で考える中で、教員は生徒につけたい力をより具体的に考える事ができるようになり、生徒も目標を具体的に捉えられるようになったが、総括的評価よりも、形成的評価として進めてきた。

・**パフォーマンス課題**をカリキュラムに位置付ける（逆向き設計論）

その単元で身につけてほしい力を考え、パフォーマンス課題を設定し、それを目標として、それまでに丁寧な授業を行って「知識・技能」の定着をはかる形が、見えてきた。

・２つの**クローバープラン**（**カリキュラムマネジメント**と**ポートフォリオ**）

それぞれの部署での取り組みを、めざす学校像に向け、連携して進める事の大切さを意識してもらう為にまとめ、**カリキュラムマネジメント**の研修を行った。

ポートフォリオを使った指導は、「メタ認知能力」「自己調整能力」を伸ばし、主体的に学ぶ生徒を育てるのがねらいで、学年進行で始めた。

・「**ICE モデル**」により、学びを深める

ルーブリックの質の改善をねらいとし、「探究ナビ」で活用していた ICE モデルの考え方を、すべての教科に広げる為、研修を実施し、学校全体で共有できるようになった。

（４）2019 年度～2020 年度　授業改善、学習改善のＰＤＣＡサイクルの実践

・「**学年別年間指導計画一覧表**」（カリキュラムマネジメントの研修の成果物を活用）

３年間の学習の流れを見える化（視覚化）し、学年の目標・育てたい力、教科・科目のつけたい力をふまえ、教科横断的な視点で、その目標達成に向けた教育内容を組織的に配列し、改善する計画。

→　つけたい力を意識し、授業改善に活かす

・「生徒の力を伸ばす**授業デザインシート**」～教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。

「生徒につけたい力」と「各担当者の思い」を掛け合わせ、新たな「授業デザイン」を作成し、授業実践。

（※）その中で、**１人１台ＰＣ**を使った授業を想定した「授業デザイン」にもチャレンジ

（**スマートスクール推進事業**（大阪府））

・クローバープラン（ポートフォリオ）を**キャリア・パスポート**として実践する。

２．「探究ナビ」の今

（１）理念を広く実践に落とし込む

・教員との共有　教職員研修（探究研修）

探究ナビⅠ、Ⅱ、Ⅲの第１回授業をアイスブレイク（クラス開き HR）とし、その内容を「いじめ防止プログラム」の一環に位置づけて全教職員で共有。その際に、探究型授業の構造とファシリテーションのスキルについて共通理解し、クラス開き HR を体験する形で実践力を養う。

・生徒との共有　探究ナビオリエンテーション

探究型授業が求められる社会的背景、新学習指導要領の中身、探究型授業の特徴を理解し、振り返りを評価する ICE モデルを知る。

（２）新しい教育用語を共通言語にする

・ポートフォリオやメタ認知について学び、振り返り時に実践する。

（３）探究ナビの目標を具体化する

・探究ナビⅠ「人とつながる」、探究ナビⅡ「社会とつながる」、探究ナビⅢ「未来を切り拓く」

・探究ナビⅠ「人とつながる」

＝コミュニケーションを通して自己理解、他者理解を深め、社会の中で自己を表現して生きることができるようになる。

コンテンツ

①アイスブレイク（クラス開きＨＲ）
※名前や言葉が持つ力とその使い方
②チームビルディング
※目標を共有することでチームになれる素晴らしさと怖さ
③コミュニケーションⅠ
※ノンバーバル、イエスアンドとＩメッセージ、コンセンサス
④コミュニケーションⅡ
※アンガーマネジメント、ピアメディエーション
⑤キャリア教育（コミュニケーション応用）
※仕事と人生、適性検査と職業調べ、仕事カルタ
※社会人（当事者）に成りきって就職説明会を実施
⑥劇作り（コミュニケーション総合）
※台本、音響、衣装、小道具大道具等を使わない創作劇を上演
※劇団員との対話

（４）今後の課題

・探究に取り組む体制の充実
・１人１台タブレットのさらなる活用
・探究ナビⅢの内容再編

（別紙1） 大阪府教育センター附属高校におけるこれまでの授業研究の取組みの概要

年度		各年度の目標（調査研究のSTEP）		授業研究委員会の具体的な取組		
2011	大和川高校と共存時代					
2012						
2013	C附属・学校全体の取組スタート	多様な学習成果の評価手法に関する調査研究	STEP1 生徒主体の授業(**アクティブ・ラーニング**)に取り組む	**授業研究委員会の設置** 第1，2回校内研修（C附属の授業スタンダード確立に向けて） →授業観察シート作成 **11月授業研究月間（研究授業の実施と相互見学）** 第3回校内研修（全体研究授業（探究ナビ）の研究協議）		
2014			STEP2 **指導と評価の計画**を意識し、**パフォーマンス課題**に取り組む。	観点別学習状況評価の取組	**1年次必履修科目シラバス作成**	第1回校内研修（**観点別学習状況評価について学ぶワークショップ（生徒向けのシラバスを考える））** **→シラバスの雛型を作成** 第2回校内研修（各教科のALの共有　11月授業研究月間に向けて） 11月**授業研究月間（観点別学習状況評価を意識した授業に取組む、各教科の研究授業）** 第3回**校内研修（全体研究授業（数学・英語）の研究協議）** 第4回**校内研修** **（各教科のシラバス説明**、各教科**研究授業の報告と共有**）
2015			STEP3 パフォーマンス課題の実践、**ルーブリック(評価指標)　づくり**に取り組む		**2年次必修科目シラバス作成** **1年次実践**	第1回校内研修（**観点別学習状況評価の学習会** **～観点別学習状況評価に基づく定期考査の作成及び返却について）** **→定期考査振り返りカードの作成（形成的評価がねらい）** 6月教科授業研究月間（各教科研究授業と相互見学） 第2回校内研修（6月教科授業研究月間の総括） 8月**教育課程協議会（各教科観点別学習状況評価の取組の発表）** 11月授業研究月間（各教科のSTEP3の研究授業と3年間の総括） 第3回校内研修（全体研究授業（社会・理科・探究）の研究協議）
2016		基礎学力の定着に向けた調査研究	**カリキュラムマネジメント**を考え、**パフォーマンス課題**を**シラバス**に位置づける		**残りの全科目シラバス作成** **1、2年次実践**	第1回校内研修（**各教科3年間の取組の発表と本年度の計画発表、基礎学力の調査研究の説明）** 6月初任者研修・研究授業実施 第2回校内研修（講演「アクティブに学ぶ」） 11月授業研究月間 （**パフォーマンス課題に取り組む**　各教科の研究授業） 第3回校内研修（全体研究授業（社会・理科）の研究協議） 第4回校内研修（講演「新しい学力と学力評価について」）
2017			**「カリキュラムマネジメントの実践」**と「生徒の**メタ認知能力を伸ばすポートフォリオ**の指導」の2つの**クローバープラン**をもとに取り組む。		**全科目で実践**	**第1回校内研修（附属高校におけるカリキュラムマネジメント）** **6月教科授業研究月間**（めざす学校像をふまえた教科目標をもとに教科で工夫をし、相互見学） **第2回校内研修（続カリキュラムマネジメント・実践編）** **11月授業研究月間**（『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業～エビデンスに基づく調査研究の実践） 第3回校内研修（全体研究授業（数学・理科・英語）の研究協議）
2018			**「クローバープラン」の継続。** **「ICEモデル」をもとにルーブリックの質の改善。** **「基礎学力の定着」に向けたPDCAサイクルの構築。**		**実践の継続及び改善（PDCAサイクル）**	第1回校内研修（ICEモデル入門編） **第2回校内研修（ICEモデル実践編）** **6月教科授業研究月間**（教科で決めたテーマにそった取組みの実践。その検証を11月研究授業、総括へつなげる。） 第3回校内研修（Japan-e-portfolio） 第4回校内研修（6月実践の発表・共有、11月授業研究月間に向けて） **11月授業研究月間（「基礎学力の定着に向けてPDCAサイクルの構築に向けた授業実践と検証」～調査研究の総括へ）** 第5回校内研修（全体研究授業（国語・社会・数学）の研究協議）
2019		**「クローバープラン」の継続。** **授業改善、学習改善の為のPDCAサイクルの実践。** **「教科内研修」の実施**		**PDCAサイクルの実践（教科の自主性の尊重と全体での共有）**		**6月教科授業研究月間（教科テーマ**に基づくPDCAサイクルの実践。「年間指導計画」の**「各科目のつけたい力」を意識**した授業実践。） **第1回校内研修（「カリキュラムマネジメント」（その3）** **PDCAサイクル確立に向け、生徒の『今』を考える。）** **11月授業研究月間（6月のテーマに再チャレンジ。「各科目のつけたい力」を意識した授業実践、各教科の取り組みを全体で共有。）** 第2回校内研修（全体研究授業（社会・芸術）の研究協議）
2020		スマートスクール推進事業	**（1）教員一人ひとりが、授業改善に取り組む。** **（2）生徒の主体性を伸ばす為に、ポートフォリオを活用を継続。**	**・全員が「生徒の力を伸ばす授業デザインシート」を作成、授業実践** **・クローバープランをキャリア・パスポートとして実践** **・1人1台PC環境における授業の研究**		第1回校内研修（ロイロノートを触ってみよう。） 第2回校内研修（オンライン授業について） 第3回校内研修（ロイロノート授業実践発表。授業デザインシートについて情報交換、共有） **11月授業公開月間（授業デザインシートに基づく授業実践。1人1台タブレット環境における各教科の研究授業。）** 第4回校内研修（全体研究授業（社会・英語）の研究協議）

令和2年度　学年別年間指導計画一覧表（1年）

別紙5

			4月	5月	中間	5月	6月	期末	7月	8月	9月	10月	中間	10月	11月	12月	期末	1月	2月	期末
1年	学年目標		自律 ・人の話を聞き、自らの考えをまとめ行動にうつす　・授業規律を守り、積極的に授業を受け視野を広げる　・自分の行動に責任を持つことができる																	
	育てたい力		基本的な生活習慣、学習習慣の確立							思考力(他者と協力、自分の考えを深める)								自ら判断し行動できる力（コミュニケーション力、		
	行事		オリエンテーション 遠足				体育大会 保護者懇談			文化祭					保護者懇談 科目選択 学びの基礎診断			球技大会 探究ナビ発表 スピーチコンテスト		
	LHR		遠足準備・体育大会種目	適性検査 交通安全指導		選択説明会	文化祭討議		人権講演会	文化祭準備	文化祭準備	大学見学会		選択説明会 生徒会役選挙	分野別説明会			球技大会準備 分野別説明会		
	探究ナビⅠ	学習項目	クラス開き 良い出会いを作る	コミュニケーションワーク 表現できる場作り		防災 コミュニケーションの応用					職業観 調べ学習と発表				演劇 集団創作、自己と他者				一年の振り返	
		科目の目標つけたい力	コミュニケーションについての理解と「肯定的に受け止めて、メッセージを出す力」 「Doing」ではなく、「Being」を大事に出来る集団作り								役割分担と協働する力 プレゼンテーション能力				対話する力と自分を変える力 個を大事にできる集団作り					
	国語総合・現代文	学習項目	挑戦（随想） 羅生門（小説）			水の東西（評論） 鏡（小説）			空気を読む（評論） 自然と人間の関係をとおして考える（評論）					「方言コスプレ」現象（評論） 友よ（小説） 言葉についての新しい認識（評論）				技術としての「教養」（評論） セメント樽の中の手紙（小説）		
		科目の目標つけたい力	小説・随想・評論・詩などの様々な文章の特徴を知り、幅広い文章を読む力をつける。各単元の基礎的な知識（漢字や語彙）を身につける。文豪の作品を読み、作者について学ぶ。																	
	国語総合・古典	学習項目	古典入門・歴史的仮名遣い 「児のそら寝」（古文）			月齢・動詞の活用（四段・変格活用） 「何事の史、並人にあひてのがるること」（古文） 「春はあけぼの」「はしたなきもの」（古文）			動詞の活用（上下活用） 「芥川」、「筒井筒」（古文）					漢文入門・故事成語 「借虎威」（漢文）				助動詞の種類 「木曾の最期」（古文）		
		科目の目標つけたい力	古典の文章に触れ、日本の伝統と文化に対する理解を深める。古文の読解にむけて基本的な知識を習得する。漢文の基礎を習得し、日本と中国の文学的なつながりを理解する。																	
	現代社会	学習項目	現代社会の諸課題	青年期		民主社会と 日本国憲法			日本の政治機構と政治参加					経済（市場経済）				国際 経済・政治	課題探究 学習	
		科目の目標つけたい力	「日本の政治機構」「日本経済」「青年期の課題」などについて理解し、各単元の基礎的な知識の習熟を図る。 現代社会の諸課題を認識し、事象を社会的に考察する能力を育て、それらを活用する態度を育てる。																	
	数学Ⅰ	学習項目	数と式	実数		1次不等式・2次関数			2次関数		2次方程式	2次不等式		データの分	三角比・正弦定理			余弦定理		
		科目の目標つけたい力	「数と式」「2次関数」「図形と計量」「データの分析」について理解し、各単元の基礎的な知識と技能の習熟を図る。 単元末にパフォーマンス課題を位置づけ、事象を数学的に考察する能力を育て、数学のよさを認識し、さらにそれらを活用する態度を育てる。																	
	数学A	学習項目	図形の性質			集合・命題と論証				場合の数	順列	組み合わせ		確率	いろいろな確率			整数の性質		
		科目の目標つけたい力	図形の性質が持つ美しさに触れ、論理的に考察する力を培う			数学用語や概念に対する理解を深め、論理的な思考力と適切に活用する力を育成する。				日常的な事象に対する文章問題から読解力を養い、図や表を用いて表現力を育てる。 また様々な場面に即して、概念の意味を通して考える力を養う。								小学校から学習しているものに、より高度な理解を深め活用する態度を育てる。		
	化学基礎	学習項目	物質の構成	物質の構成粒子		物質と化学結合			身の回りの物質	夏の課題	物質量	化学反応式			化学反応 酸と塩基			酸化と還元		
		科目の目標つけたい力	日常生活や社会の関連を図りながら物質とその変化への関心を高め、化学の基礎的な内容を理解し、探究する能力を身につける。また、科学的な見方や考え方を養い、知識を活用する力を身に付ける。																	
	体育	学習項目	体つくり運動		陸上	男子：柔道・体育理論 女子：水泳			男子：水泳 女子：柔道・体育理論			選択① 陸上・器械運動・ダンス		選択② バレー・ハンド・卓球		持久走			選択③ 球技	
		科目の目標つけたい力	・体力向上 ・集団で協力し、行動する力			・泳力向上 ・学習で得た成果を自ら応用・発展させ、運動や実生活に生かす力						・技能向上 ・協調性・安全の確保ができ、また勝敗や結果を受け入れ、個人の技能・能力を客観的に判断する力				・持久力向上 ・記録向上に挑戦する力 ・実践・応用できる科学的知識			選択①②と同じ	
	保健	学習項目	現代社会の健康観、環境つくりと、応急手当							個人の健康維持、向上について（身体的）								心の健康維持、向上		
		科目の目標つけたい力	現代の健康観を理解し、リスクファクターの回避法や、応急手当の基礎的な事柄を正しく実践する力。							日常生活で隣接するリスクファクターの理解と回避法。 感染症（含性感染症）の理解と予防法、交通社会の安全化を考える力。								ストレスを正しく受け止め、対応し、自己実現を図る力。		
	芸術Ⅰ	科目の目標つけたい力	各自が体験的に感じ得た感覚を、各教科の専門用語に当てはめることで、漠然とした概念を共通の概念に置き換える。 専門用語を説明することが目的ではない。															専門用語をコミュニケーション・ツールとし活用することで、表現意図の共有を図る。		
	音楽Ⅰ	学習項目	歌唱・合唱・リコーダー・鑑賞 音楽の歴史（グレゴリオ聖歌～シューベルト）							三線				歌唱・合唱・リコーダー・鑑賞 音楽の歴史（ショパン～ストラヴィンスキー）				合唱・ギター・創作・鑑賞 音楽の歴史（20世紀の音楽）		
		科目の目標つけたい力	歌詞の内容や音楽を形作っている要素を理解し、表現を工夫する（通年） 表現したいことを伝えるための技能（通年） 演奏形態や、文化・歴史の背景、諸要素を模倣として音楽のよさを感受し、言葉で表現する力（通年）							三線の楽譜の理解と基礎的な奏法の習得								パートの役割の理解とふさわしい表現の工夫 ギターの基礎的な奏法		
	美術Ⅰ	学習項目	色彩基本演習			色彩演習「四季」			色彩まとめ	高校展鑑賞	デッサン			絵画制作				紙テープクラフト		
		科目の目標つけたい力	表色の基本的な概念を理解し、混色や配色が出来る能力をつける								モデルの観察を通して、物の質感や立体感を表現するのに、いろいろな画材で描画できる力をつける							意図やねらい通りに形を構成する力をつける		
	書道Ⅰ	学習項目	書表現基礎　用具用材について						楷書の基本			楷書古典学習　唐代					仮名	様々な古典		
		科目の目標つけたい力	①用具用材の特性を知り、、表現意図に合わせた表現技能を身につける ②扱う題材により、どのような表現の工夫がなされているかを考察する。 ③50音の歴史と日本語の発音について、カリマネ意識した授業をおこなう。						結構法の基本を理解し、基本点画を書写するための技能を身につける。話を聞きながら、メモをとる力をつける。また、読みやすい文字を書く習慣づける。			古典での結構法の工夫と、書表現の関連性を理解することで、感性をもって古典の特徴を表現し鑑賞する力をつける。また歴史的背景の説明ではカリマネを意識						仮名文字の成立を学ぶことで、文字の歴史に関心を持ち正確に文字を書く習慣をつける。	感受性をもって鑑賞し、技能的に表現する力をつける。		
	コミュニケーション英語Ⅰ	学習項目	日本文化と異文化の差異について			パンダを取り巻く環境			アンパンマンの人気の理由		携帯電話の問題点 ユニヴァーサルデザインについて学ぶ			ハリーポッターからのメッセージ	自転車の利点 大人とは何かの定義づけ			フードマイルズとはサッカー選手の論理について		
		科目の目標つけたい力	コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動をおこなう																	
	英語表現Ⅰ	学習項目	文型と動詞			時制・完了形			助動詞		助動詞・不定詞			動名詞・分詞・関係詞				比較・仮定法		
		科目の目標つけたい力	コミュニケーションに必要な文法事項の定着を図る																	
	家庭基礎	学習項目	消費行動を考える			自分らしい行き方と家族	子どもとかかわる		子どもとかかわる		高齢者とかかわる／社会福祉			衣生活をつくる	食生活をつくる			食生活をつくる／住生活をつくる		
		科目の目標つけたい力	自分の頭で考え、責任を持って自分の生活の主人公になる。				人間の違いを学び、年齢や状況により変化していく人間を学び、その中でも変わらない自分、自分の得意なことなどを確立していく。他人を援助し、自分が他人にどう援助してほしいかを他人に伝え、助け合って生きる。				自分で物事を決めそれが社会にどうつながっていくかを学び、生活を自分でデザインする。									
	社会と情報	学習項目	wordで自己紹介作成 肖像権・パブリシティ権			著作権	情報のディジタル化		情報のディジタル化	パワーポイントを用いたプレゼンテーション	Excelを用いた資料作成				情報通信セキュリティ			アルゴリズムプログラミング		
		科目の目標つけたい力	与えられたテーマに沿って、自分から疑問や好奇心を持って、問題を発見してゆく姿勢 教科書や参考書、インターネットなどを通じて情報を集め、整理・分析し、課題を解決する方法を考える姿勢 複数の情報源を参照することで、手に入れた情報が正しいかどうかを分析し、判断しようとする姿勢																	

事例報告③

千葉大学の高大連携・接続教育改革の歴史
～グローバル理系人材育成力強化を目指して～

報告者▸　野村　純（千葉大学教育学部副学部長(研究推進、国際交流)・教授）

千葉大学の野村です。今日は、よろしくお願いいたします。

（スライド１）本日は、千葉大学の高大連携・接続の取り組みについてご紹介させていただきます。

（スライド２）「Always Aim Higher」は、千葉大学のモットーです。「つねに、より高きものをめざして」ということです。実は、千葉大学は桜の名所で、３つのキャンパスがあり、桜がたくさん咲いているのですが、これは今年の写真で、残念ながら誰一人いないという寂しいスタートになりました。しかし、この中でもいろいろな取り組みを続けております。

（スライド３、４）千葉大学は「世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続けます」という憲章の下「理系に強い総合大学として、文理融合での Society 5.0 時代を担う人材」の養成を進めております。千葉大学は、今、10 学部あるのですが、６学部が医学部、薬学部、工学部、園芸学部などの理系の学部で、残りの４学部のうち教育学部と国際教養学部は文理融合の学部です。そして、残っている文学部、法政経学部でも、千葉大学の場合は文学部でも行動科学科のような脳科学を研究しているコースがあり、また法政経学部でも、経済は数学、データサイエンスですので、そのような意味では理系に強い大学となっております。その強みを生かしての人材育成を進めております。

（スライド５、６）また、スーパーグローバル大学の１つで、グローバルに活躍できる人材育成にも力を入れております。これはわれわれが行っているグローバルプログラムの例です。教育学部はあまりグローバルではないというイメージがありますが、ツインクルプログラムとＥＳＤプログラムは教育学部が主体となって行っております。千葉大学は、全学を通して、グローバルプログラムに積極的に取り組んでおります。

（スライド７）また、重点支援枠③に位置付けられておりまして、世界的研究拠点を目指す大学として、研究界を牽引するグローバルリーダー人材の育成に努めております。

（スライド８）戦略的重点研究強化プログラムが定められております。このようなプログラムを通して、世界的な研究リーダーを育成しよ

うと目指しております。

（スライド９）これを支えるために、今年度から「ENGINE プログラム」がスタートしました。ENGINE プログラムの目玉の１つは「全員留学」です。これは学部生も院生も全員、在学期間中に留学するという決まりになっています。「スマートラーニング」は、e ラーニングを交えてハイフレックスやハイブリッドなど、いろいろな形での教育を展開することで、留学中でも学部・大学院の授業を学べるようにすることを目指しています。また「データサイエンス教育」です。これは、東京大学が関東地区の主管、千葉大学がアソシエイト校になって、この２校で関東域のデータサイエンス教育を牽引することになっておりますので、千葉大学でも非常に力を入れているところでございます。

（スライド 10）千葉大学では、その中で、さまざまな入試改革を進めておりまして、入試のシステムや機会を使って多彩な才能を持つ多様な人材を受け入れて、その才能を伸ばしていこうという高大接続を目指しております。

（スライド 11）これが高大接続の例です。平成 10 年度には「飛び入学」を始めました。これは高校２年生で受験し、３年生の年には大学に入るというものです。平成 19 年度からはＡＯ入試を開始しており、平成 20 年度には「理数大好きプロジェクト」の入試を始めております。また、平成 26 年度には「秋飛び入学」、高校３年生の秋の段階で入学するという、いわゆる欧米のセメスターに合わせた形での入学が可能という体制を取っております。

平成 26 年度からは、これまで行ってきたさまざまな高大接続プログラムを全学体制で実施できるように「高大接続センター」が設置されました。その下で、大学教育再生加速プログラムの支援を受けまして「次世代才能スキップアップ」プログラムを実施してきました。これを実施している主体が、この「次世代才能支援室」です。

令和元年度からは、ＡＯ入試の改革に着手しまして、今年度、令和２年度には総合型選抜入試へと移行しております。また、ENGINE プログラムに支えられる形で新しい高大接続のプログラム「ASCENT program」を開始しました。

本日は、この「次世代才能スキップアップ」プログラムと ASCENT program を中心にお話しさせていただきたいと考えております。

（スライド 12）「次世代才能スキップアップ」プログラムは、平成 26 年度から令和元年度にかけて支援を受けて行ったものです。現在も大学の自己資金で継続中でございます。

（スライド 13）これは、高校生を対象とする取り組みで、グローバルな視点を持った科学人材育成を強化しようということで始まっております。高校生に対して大学レベルの高度な科学教育のプログラムを組むということです。千葉県はＳＳＨ活動が非常に盛んで、公立・私立を合わせて今８校のＳＳＨ校があります。高大で連携し、ＳＳＨ校がカバーしていない部分を大学がサポートすることで、全県がＳＳＨ化するという構想の下、進めているものです。また、先ほど、紹介いたしました多様な入試制度を活用した高大接続により、高校での学びを大学で生かし、さらに立派な研究者になっていくという道筋をつくりたいと考えております。

（スライド 14）このプログラムは、大学教育再生加速プログラムということから、大学教育改革のベースになるものとして捉えられてい

ます。大学教育の改革としては「文理融合教育」「長期学外学修制度」「個への対応」「学修成果の可視化」「アクティブ・ラーニング」に取り組んでおります。

アクティブ・ラーニングのところに出ております、アカデミック・リンク・センターというのは実は図書室のことなのです。千葉大学では、図書室が単に本を置いてある場所ではなく、グループ学習、個別学習をする場所があって、そこにそれをサポートするためのいろいろな資料・スタッフがいるというものにつくり替えております。面白いので、ぜひ調べていただければと思います。

入試改革としては、先ほど、ご紹介しました「飛び入学」「理数大好き」「ＡＯ」「総合選抜型入試」というように進めておりまして、現在、「ＡＯ」と「理数大好き」は総合型選抜入試の中に組み込まれています。このような多様な入試を活用して、いろいろな人材に大学に入ってきてもらおう、そして、育っていってもらおうと取り組んでおります。これを支えるものとして「次世代才能スキップアップ」プログラムが位置付けられております。まず、高大連携のカリキュラム研究として、大学から「こういうふうな科学教育はどうでしょう」という提案をします。高大接続教育としまして、高校生を大学で育成するのを少しお手伝いするということを行っています。また、高校生の学修・活動支援として「高校生理科研究発表会」や「国際研究発表会」など、高校生が大学で発表できる場をつくっております。また、このプログラムとは別に、それぞれの学部や高大連携支援室の取り組みとしても、さまざまな取り組みが行われております。

（スライド15、16）「次世代才能スキップアップ」プログラムで大学が取り組むことは、科学教育プログラムの実施により、大学での学びを実感してもらうことです。高校では、例えば、理系は物理・化学・生物・地学・数学のように、教科ごとに分かれていますが、大学ではより複合的な学びが行われます。例えば、千葉大学はデザイン教育が非常に有名です。デザインというと物のデザインを思い浮かべられると思いますが、千葉大学の場合は社会のデザイン、まちのデザイン、どのようにして共生していくかという共生社会のデザインなど面白い学びがあります。しかし、高校生にはなかなか伝わりません。先ほど、言いましたように、文学部で脳科学を行っているというのも高校生にはなかなか伝わらないので、分かってもらえる講座にしようと進めています。先生方には「ちょっと手が込んだオープンキャンパスだと思ってやってください」とお願いしております。

（スライド17）構造としては「基礎力養成講座」「G-スキッパー養成」「国際研究発表会」となっております。基礎力養成講座は、大学レベルの科学実験講座で「大学の教養レベルのものを高校生が分かるように、かみ砕いてやってください」というようにお願いしています。G-スキッパーは、基礎講座の中から「ぜひ、大学でやってみたい研究がある」と言った生徒に対して、少し厳しめの面接があるのですが、それに通った生徒たちが研究をしております。国際研究発表会では、英語で研究発表をする場をつくっております。これらを通り越えた生徒たちたちが、さまざまな入試を活用して大学に入って、さらに学びを続けていってもらいたい、そのような構造になっています。

（スライド18、19）第1段階の基礎力養成講座ですが、われわれが大事にしているのは「手を動かす」ということです。例えば、どうしても偏差値などで大学を選んで入ってきてしまう学生がいます。工学部に来たのに、ものづくりが好きではないというようなミスマッチがあると、それは、お互いにとって非常に不幸なのです。そうではなくて、手を動かすことを通して、理系というものを理解してもらおうというものです。そのため、実際、大学ではこのよ

うに、さまざまな実験講座を開いております。

（スライド 20）この成果はＨＰ上で公開しております。興味がある方は、ぜひ、ご覧いただければと思っています。例えば、この真ん中の心理実験などは、文学部の行動科学コースの先生に行っていただいております。いろいろな学部の先生方に参加していただくことで多様な講座が実施できております。

（スライド 21）これは、実際に受験して千葉大学に入学した学生からの感想です。工学部の学生ですが「実験などいろいろ通して、大学の学びが分かった」と言っています。特に、この学生は「環境と共生する科学」を学んで、それが非常に面白かったことから「受験のモチベーションが上がりました」と言っています。こちらは、教育学部に入った学生ですが「大学の授業を受けてみたら、面倒見のいい先生がいっぱいいて、とてもいいところだと思った」と言っています。この講座にはＴＡの学生も参加していますので「大学生ともいろいろ話ができたし、まわりに一緒に目指す友達ができてすごくよかった。だから、千葉大学に入りました」と言ってくれています。

（スライド 22）G-スキッパーですが、これは選抜された生徒が課題研究することです。これは、高校でいろいろしていて、その先をしてみたいであったり、高校でしてみたいのだが、文系主体の高校だったり、その分野の先生がこのようなものにあまり乗り気ではないという高校の生徒がかなり来られます。大学の研究室を使って、実際にいろいろ研究してみるということです。かなり難しいことを行います。

（スライド 23）彼の場合は、免疫細胞を分離してみるという実験に取り組みました。そして、ＡＯ入試を使って入学しました。

（スライド 24）これらを通して、科学・技術系人材の芽生えを促進して、それを大学教育の成果につなげていこうと考えています。

（スライド 25）スーパーグローバル大学として、成田空港がすぐそばにある大学として、非常に多くの海外からの研究者や大学院生を受け入れています。その教育リソースを最大限に生かそうというのが、このグローバル化教育支援としての試みです。

（スライド 26、27）国際研究発表会というものを行っているのですが、これは海外の大学、高校教員の前でポスタープレゼンをするというものです。

（スライド 28）参加する高校生は、発表から質疑応答まで全て英語で行います。今、高校では、英語でポスタープレゼンをするのが非常にはやっているのですが、ポスターは英語で、生徒同士は日本語で話をしているという光景をたくさん見ました。「これでは、やっている意味がないな。せっかく千葉大学には、こんなにたくさん海外からの研究者や留学生がいるんだから、これをうまく使えばもっと面白いものができるだろう」と思って、これを開発しました。

（スライド 29、30）私は、千葉大学でアジア・アセアン教育研究センターのセンター長をしていますので、ＡＳＥＡＮから大量に先生方をお招きすることがあります。彼らに入ってもらうことが非常に多いです。ＡＳＥＡＮの先生方や院生の前で発表する良いことは、彼らにとっても英語は外国語なので、日本の高校生の英語がつたなくても失礼な態度を取らなくて、勇気づけるように話し掛けてくれるというのが大変良いポイントです。最初は尻込みする高校生も多いのですが、一度来たら「面白かった」「また来る」と、何回でも受ける生徒がかなりいます。

（スライド 31）最初は発表だけ行っていたのですが、３年ほど前からそれだけではなくて、ワークショップをしようということから、ＳＤＧｓワークショップを行っています。初めに、地球温暖化やマイクロプラスチックなどをお題として、高校生に与えておいて、それについ

て調べてもらったのを話してもらい、大学の先生や留学生と一緒にディスカッションするものです。最初にいきなり「話して」といっても難しいので、彼らが調べたものを絵に描いてもらいます。その絵を基に高校生が話すと、ＡＳＥＡＮの大学の先生がポストイットに単語を拾ってくれるのです。単語が書かれたポストイットを用いて、ＫＪ法を行って、ポスターをつくって、発表するという２時間ほどのワークショップです。これも非常に人気があって、参加したいという高校生と高校がより一層増えています。

（スライド 32）このようにグローバルな視点からの早期育成をして「全員留学」という千葉大学の目標、さらにはグローバルな人材養成へとつなげていこうと考えています。

（スライド 33）これは、千葉大学の国際教養学部の学生ですが、この学生も参加して面白かったので、高校時代に６回参加して、千葉大学に入ってからは何回も留学しています。このように、グローバルな人材育成につながっていると思われます。

（スライド 34）もう一つ行っているのは、高校への留学生の派遣事業です。先ほど、申しましたように、ＡＳＥＡＮの大学と非常に連携が深いので、そこから留学生が来たときに、その留学生を高校へ派遣して、高校のいろいろな活動に参加してもらうことを行っています。そのときに「千葉大アンバサダー」という名前で、千葉大学の学生も、ＡＳＥＡＮの学生と組ませて、高校へ送って、教育の体験などを一緒にするというプログラムになっています。そのようなことを通して、グローバル人材の育成力強化を、高校生だけでなく大学生でも進めていくというプログラムです。

（スライド 35）これは、高校の研究発表の練習に参加する、イベントに参加する、留学生自身が研究・文化を発表するというものになっています。

（スライド 36）例えば、発表会の練習をして、その成果として全国大会で優勝しましたということがあります。そうすると、参加した留学生も非常に喜んで「おまえたちは、俺たちの誇りだ」と言うなど、良い交流の流れが起こっています。

（スライド 37）これも報告書が出ていますので、見ていただければよいですが、さまざまな交流が行われています。

（スライド 38）これが、大学が核となって、グローバル化教育活動を支援していくという、良いモデルになっているのではないかと考えております。

（スライド 39）これまでの実施状況としまして、基礎力養成講座では、徐々に人数が増えてきましたが、やはりキャパがありますので、入れなくなっているという状態になっています。

（スライド 40）国際研究発表会も、徐々に数が増えてきまして、平成 29 年度からは少し人数制限をさせていただいています。これは、最初は理系だけで始めたのですが、ＥＳＤ部会と一緒に行うようになり「文系の子も入れてくれよ」ということで入れたら、大変な数の文系の生徒が入ってきて、理系の高校の先生から「なんか乗っ取られたみたいで、嫌だ」と言われたので、その辺りの案配をしています。

（スライド 41）高校への留学生派遣事業も、年々、数が増えまして、受け入れられる数で行っています。

（スライド 42）まずは、千葉県内の高校だけですが、参加したいという高校が徐々に増えてきまして、多くの学校と連携しながら行っています。この他にも、東京都内の学校とも連携して行っています。

（スライド 43、44）高大接続による人材育成への評価では、次世代才能スキップアッププログラムについて、トップグローバル大学のＨＰ上に掲載させていただいております。

（スライド 45、46）また、スーパーグローバル

大学として、先ほど、言った取り組みの中で、実は海外の高校へ行って、高校で科学を教えるプログラムも動かしております。これも８年前から始めたのですが、千葉大学の大学院生・学部生でチームをつくります。これは教育学部だけではなくて、工学部、理学部、園芸学部など、いろいろな学部の学生をひっくるめてチームをつくって、彼らがＡＳＥＡＮの高校へ行って、ＡＳＥＡＮの高校生に科学を教えるプログラムを行っています。既に２万人以上のＡＳＥＡＮの高校生が、千葉大学の院生・学部生が行った科学の授業を受けております。 これにより、ＡＳＥＡＮでも千葉大学のネームが少しでも上がればと考えています。ここにお示ししたように、これはトップグローバル大学のＨＰですが、文部科学省のＨＰにも良い取り組み例として掲載されているので、ご覧いただければと思います。

（スライド 47）今後の展望ですが、これらの取り組みをベースとして、今、新しい取り組みを始めました。

（スライド 48）それは何かというと、高大接続を「双方向化」と「高度化」するというものです。今までは、われわれ大学から高校に対して「こういうふうな人材を養成するといいんじゃないですか。そのためには、こういうような学びがありますよ」という提案をしていたのですが、今では、千葉県のＳＳＨ校が新たにグループをつくりまして、ＳＳＨ校で選抜クラスをつくって、その子どもたちの教育を高校と大学が力を合わせて行うというスタイルの取り組みを始めました。これは、令和元年度に始めています。それに対して、大学は「であれば、大学はより高度な研究人材を養成する取り組みを始めよう」と、取り組みに入ったところでございます。

（スライド 49）高大が協働して実施するのは、先ほど申しました、カリキュラムマネジメント「こんな学びはどうですか」というものを双方向で提案しながら行っています。また、授業をどうするかに関しても、大学・高校の先生がいる中で、教えながら、お互いに情報交換をして「こういうのはどうだろうか」と考えたりしています。評価方法に関しても、ルーブリックの研究を協働で実践するなどの取り組みを行っております。

（スライド 50）先ほどの、ＳＳＨ校のグループから、大学に対して「こういう人材育成はどうですか」という提案については、ＪＳＴのプログラムで、日本全国で千葉県だけが獲得している「スーパーサイエンスハイスクール高大接続枠」で「先進科学加速化プログラム」を始めました。これは、先ほど言ったように、ＳＳＨ校でグループをつくって、その中で選抜クラスをつくって、その選抜クラスの子どもたちに高大で特別なプログラムを準備するというものです。 これは、高校だけで行うわけではなく、高校、大学と通して、その子どもたちがそのプログラムを継続して受けていくものになっています。現在、高校２年生が受けているところです。

（スライド 51）「千葉サイエンススクールネット」は、ＳＳＨを中心に理科部会の先生方が入ってつくられているものです。これから「総合的な探究の時間」が始まって、課題研究の方法に困る高校もたくさん出てくるだろうということから、実際に探究活動を先に始めた高校で、どのような実施パターンがありうるのか、

どのようなことを取り組みの中で行っているのか、どのようなところで困るのかを洗い出しています。例えば、スケジュールも、これは２年で実施するパターンが書いてありますが、１年で終えてしまう学校、２年かける学校、または３年かけて行う学校もあります。そのような内容を、全部、洗い出してみて「こんな形でのやり方がありますよ」「それぞれ発表とかいろんなものがありますけれども、こういうものを取り込むことができますよ」などを紹介するという冊子がつくられています。

（スライド52）大学では、より高度な教育を進めていこうということで、ＪＳＴの「グローバルサイエンスキャンパス」の支援を受けています。千葉大学は「ASCENT program」になっています。「ASCENT」、上に向かうという千葉大学のモットーです。

（スライド53）これは、Society 5.0の時代をリーディングしていくような人を育てていくプログラムにしようではないかというように、千葉大学では考えています。

（スライド 54）これからはいわゆるネット空間だけではなくて、現実空間とネット空間をうまくつないでいかないといけない、そうしないと、今のところ常にＧＡＦＡに負けたままですが、そうではなく、次の世界をつくっていこうという大きな夢を持って取り組んでおります。これは、科学技術の基礎力とデータサイエンスの素養を身に付けてもらう、早い段階からそれに触れてもらうということを目指しています。

（スライド55）もう一つのポイントは、千葉大学の特徴であるデザインです。デザイン力、社会をデザインしていく、未来をデザインしていくという思考・能力を持ってもらおうというプログラムです。

（スライド56、57）ASCENT programという名前で、既に第１期生を募集して、今、頑張っているところです。カリキュラムとして、まず行っているのが、先端科学基礎講座です。今年はCOVID-19によりオンライン化が非常に進んだので、かなりの部分をオンラインで行っています。オンラインではできない部分、例えば、ディベートの練習自体はオンラインで行っているのですが、最後のディベート大会だけは大学へ来てもらっています。プログラミングも、プログラミングのほとんどの部分はオンラインで勉強しているのですが、実際に習った基礎を使ってデータ解析するためのチームの話し合いは大学へ来てもらっているということを行っています。

英会話ですが、千葉大学の場合は教員研修留学生という、本国で教員をしている方が大学で学んでいるので、その方々に高校生にこのような特別な科学英会話を教えることを手伝ってもらう試みとして始めました。彼らは何といっても教員なので、高校生に教えるのが非常にうまいのです。この後、選抜講座を行って、より研究に特化した活動をすることを目指しています。さらに、この成果として、千葉大学で行っている高校生の理科研究発表会、国際研究発表会では英語で発表し、この中でよくできていると思った場合は、さらに学会発表をします。今、学会では、高校生向けのコースがありますので、そのようなところを目指していきたいと思っています。

（スライド 58）全学でのプログラムを支えるために、千葉大学では今年度から新たに「高大連携推進専門部会」という、全学での部会ができました。全学の組織と協働しながら、プログラムを実施していくという体制ができあがっております。

（スライド59）以上です。ありがとうございました。

スライド 1

第18回高大連携教育フォーラム

千葉大学

千葉大学の

高大連携･接続教育改革の歴史

～グローバル理系人材育成力強化を目指して～

千葉大学教育学部　教授、副学部長（研究推進、国際交流、広報担当）　野村　純

スライド 2

スライド 3

千葉大学憲章（目的）

千葉大学は、世界を先導する創造的な教育･研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続けます。

https://www.chiba-u.ac.jp/general/outline/charter.html

スライド 4

千葉大学が目指す人材育成

理系に強い総合大学として、
文理融合でのSociety 5.0時代を担う人材

スライド 5

千葉大学が目指す人材育成

スーパーグローバル大学として
グローバル世界で活躍できる人材

スライド 6

スライド7

千葉大学が目指す人材育成

世界的研究拠点を
目指す大学として
研究界を牽引する
グローバル リーダー人材

スライド8

スライド9

千葉大学が目指す人材育成

ENGINEプログラム（令和2年度～）
・全員留学
・スマートラーニング
・データサイエンス教育

スライド10

CHIBA UNIVERSITY

高大接続の理念

様々な入試システム、機会を活用し
多彩な才能を持つ多様な人材を受け入れ
その才能を伸ばし、開花させるための
シームレスな接続を目指す

スライド11

千葉大学の高大接続教育の歴史

グローバル サイエンス キャンパス

▶ 令和2年 ② ASCENT program
ENGINEプログラム（全員留学、データサイエンス）
総合型選抜入試 「高大連携推進専門部会」

令和元年 AO入試改革

Type III 高大接続

▶ 平成26年 全学体制での高大接続 「高大接続センター」
① 次世代才能スキップアップ プログラム
次世代才能支援室
秋飛び入学 （高校3年の秋に進学）
平成24年 ツインクルプログラム（海外の高校生へのSTEM教育）
国際研究発表会（高校生の英語発表）
平成23年 英語実験講座による早期教育（CLIL）
平成20年 理数大好きプロジェクト 入試開始
未来の科学者養成講座
平成19年 AO入試
高校生理科研究発表会
平成18年 高大連携企画室（現：高大連携支援室）
平成10年 飛び入学 （高校2年生が受験し、進学）
数理科学コンテスト

スライド12

スライド 13

高校生を対象とする取り組み

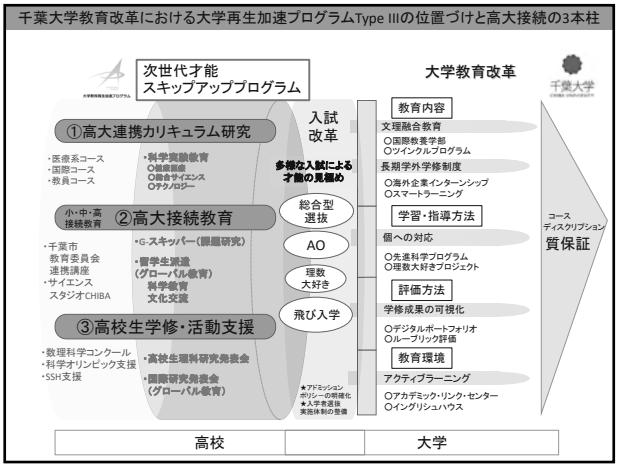
①グローバルな視点を持った科学人材育成

②大学レベルの高度な科学教育プログラム

③高大連携での千葉県全域のSSH化

④多様な入試制度を活用した高大接続

スライド 14



スライド 15

CHIBA UNIVERSITY

次世代才能
スキップアッププログラムで
大学が実施すること

スライド 16

科学教育プログラムの実施
大学での学びを実感

スライド 17

① 基礎力養成講座

大学レベルの科学実験講座

② G-スキッパー養成

大学で課題研究

③ 国際研究発表会

英語での研究発表会

様々な入試の活用

千葉大学等進学

スライド 18

基礎力養成講座

大学教養教育を基盤として
大学で実験・研究体験

スライド 19

実施風景

スライド 20

http://ngas.e.chiba-u.jp/folder/data.html

スライド 21

受講生の声

大学教育再生加速プログラム（AP）
テーマIII　REPORT 2019より

スライド 22

〔G-スキッパー〕養成

自ら立案した
課題研究に取り組む

大学の研究施設を活用して
研究を進める

スライド 23

活動記録例

事例

●G-スキッパー活動期間：
高校2年生、3年生前期

●活動内容
細胞を分離し収集する技術の習得
キラーT細胞(CD3$^+$CD8$^+$細胞)の分離・濃縮の系を確立することができた。

●進学状況：AO入試

ポスター

スライド 24

期待される効果

科学・技術系人材の
芽生えを促進

スライド 25

グローバル化教育支援

スーパーグローバル大学としての

教育リソースの活用

スライド 26

国際研究発表会

スライド 27

国際研究発表会

海外の

大学、高校教員の前で

ポスタープレゼンテーション

スライド 28

国際研究発表会

参加高校生は

発表から質疑応答まで

全て英語で行う

スライド 29

国際研究発表会

スライド 30

スライド 31

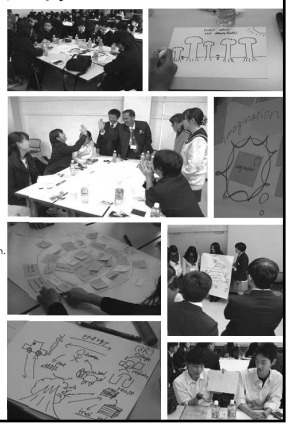
SDGsワークショップ

グローバルな環境課題について討議する
・地球温暖化
・気候変動
・マイクロプラスチック

Instruction for Activity

Activity with high school students and teachers
The theme is "Protect the Environment – about Microplastics problem-" .
Please support the students to discuss and reach their conclusions.
Each room has 3 to 4 groups.
Please join the groups and help the groups with their discussion in English.
Each Room has 1 facilitator, Chiba University Professor, and staffs.
If you have any questions, please ask him and staffs.

Room	International students	Facilitators
2201	Ms. Lapitan & Ms. Jessica	Tsuji sensei
2202	Mr. Wang & Mr. Peter	Yamato sensei
2203	Ms. Esther & Ms. Jacintha	Nomura sensei
2204	Ms. Pichinart	Onishi sensei
2205	Ms. Norbu & Ms. Nese	Kato sensei



スライド 32

期待される効果

グローバルな視点を
早期から育成
→全員留学への接続

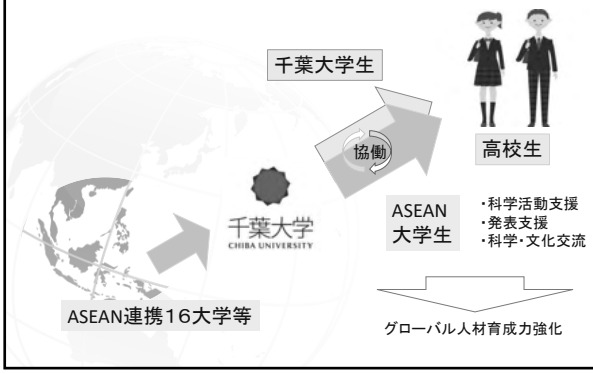
スライド 33

受講生の声

大学教育再生加速プログラム（AP）
テーマIII REPORT 2019より

スライド 34

高校への留学生派遣事業



スライド 35

具体的な取り組み

・高校生の研究発表の練習支援
・高校の授業やイベントに参加
・留学生による研究・文化紹介

スライド 36

留学生派遣のアクティビティ

スライド 37

http://ngas.e.chiba-u.jp/folder/data.html

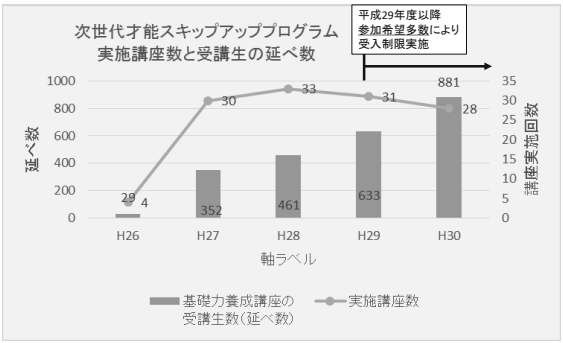
スライド 38

期待される効果

大学が核となる
グローバル化教育活動の
効果的な支援モデル開発

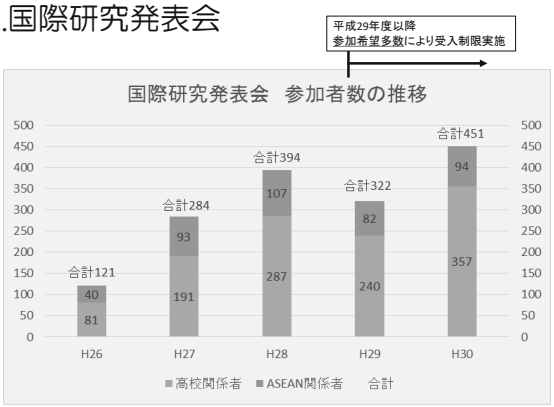
スライド 39

これまでの実施状況
1.基礎力養成講座



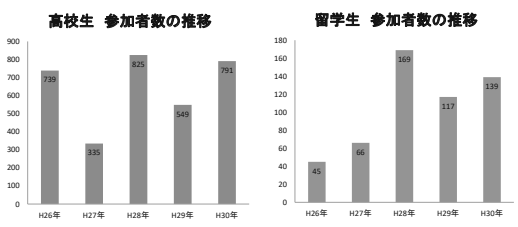
スライド 40

2.国際研究発表会

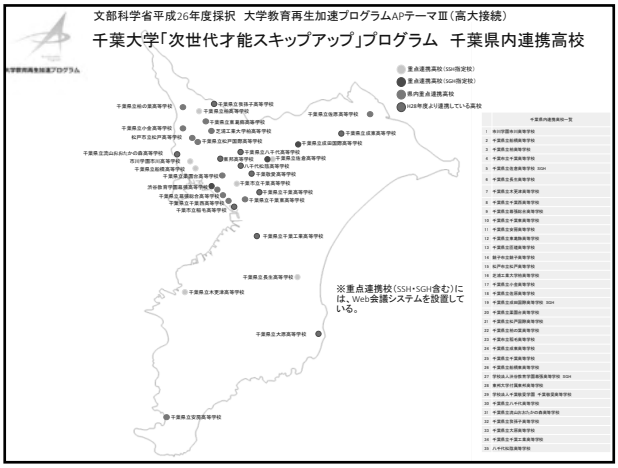


スライド 41

3.高校への留学生派遣事業



スライド 42



スライド 43

高大接続による人材育成への評価

大学教育再生加速プログラムタイプIII（高大接続）
「次世代才能スキップアッププログラム」

https://tgu.mext.go.jp/sdgs/index.html

スライド 44

スライド 45

Super Global　University
として
海外の高校とも高大接続を目指す

ツインクルプログラム

https://tgu.mext.go.jp/sdgs/index.html

スライド 46

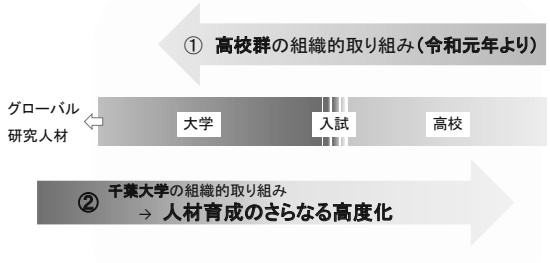
スライド 47

今後の展望

これら取組をベースとする
新たな取り組み

スライド 48

高大接続の「双方向化」と「高度化」



スライド 49

高大が協働して実施

カリキュラム研究
授業研究とその協働実践
評価方法研究
（ルーブリック研究など）

スライド 50

① 高校が主導する高大接続研究との協働

高校が選抜した生徒を、高大が協働で研究人材へと育成

スーパーサイエンスハイスクール高大接続枠

『先進科学加速化プログラム』
～グローバルなプロジェクトを牽引する
次世代型科学技術系リーダーの創出～

スライド 51

① 高校が主導する高大接続研究との協働

千葉サイエンススクールネットとの協働
「総合的な探究の時間」の導入に向けて

https://www.chiba-c.ed.jp/funako/fttp_kousin/ssh/ssnet.html

スライド 52

② 大学による高度な人材養成を目指す高大接続研究

グローバルサイエンスキャンパス（JST）

https://gsc.e.chiba-u.jp/

スライド 53

CHIBA UNIVERSITY

Society 5.0を創出する
未来リーディング人財養成

科学技術の高度な基礎力とSociety 5.0において
世界を作り上げる能力を併せ持った課題解決型科学技術人財の養成

ASCENT program

Advancing the Society5.0 by Coordination of ENGINE Talent Promoting Program

スライド 54

取り組みのバックグラウンド

Society 5.0では

現実空間と情報空間の有機的な結合

によって新たな価値を創造していく

科学技術の基礎力+データサイエンスの素養が必要

人工知能による自動運転、自立型ロボット、抗ウイルス抗体
をシミュレーションによって創出する研究など

スライド 55

育成する人材像

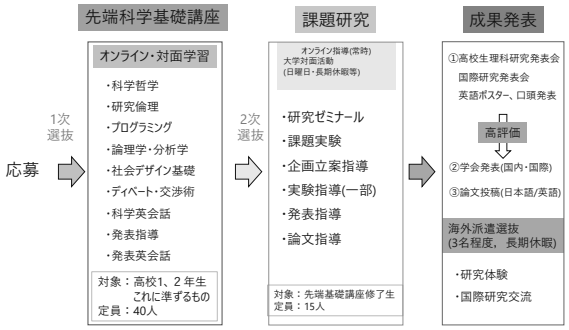
科学技術分野の高度な基礎力と
データサイエンスの素養に基づいて、
Society 5.0をデザインすることのできる
「未来価値創出力」
を持つ研究開発人財

スライド 56

ASCENT
プログラム

スライド 57

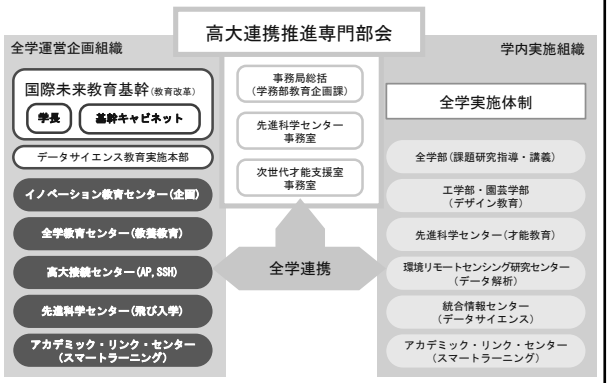
カリキュラム



様々な講義のオンライン受講が可能です（一部対面での演習・実習あり）

スライド 58

全学でのプログラム実施体制



スライド 59

HP ASCENT program
https://gsc-chiba.movabletype.io/

HP 次世代才能スキップアッププログラム
http://ngas.e.chiba-u.jp/

連絡先
次世代才能支援室
TEL・FAX 043-290-2584
メール jisedai-ap@chiba-u.jp

パネルディスカッション

高校・大学は入試と教育にどう向き合うか

パネリスト▸　澤井　洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）
田中　昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）
池田　　径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）
野村　　純（千葉大学教育学部副学部長(研究推進、国際交流)・教授）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸　細尾　萌子（大学コンソーシアム京都高大連携推進室コーディネーター／立命館大学文学部准教授）

細尾:　失礼いたします。細尾萌子と申します。私自身、フランスの論述中心の大学入試のバカロレア試験の研究をしておりまして、それと引きつけつつ、非常に興味深く拝聴しました。まず、皆さまからたくさんのご質問をいただきまして、ありがとうございます。恐縮ながら、その全てを取り上げられなかったのですが、いくつか選ばせていただいたものをまずご紹介いたします。それらについて、３つの事例報告の報告者の方に、順番にお答えいただきます。その後、時間が余りましたら、それぞれの報告者同士で、お互いへの感想や質問を交流できたらと思います。

まず、事例報告①については、４つの質問を選ばせていただきました。１つ目が「教員の協働」に関する質問です。「こだわり学」とゼミは興味深い探究の授業ですが、それを直接担当しているのが若い新任のお二人なのか。また二人に探究の理念をどのようにお伝えされたのか。各ゼミには教員が一人付いていると伺いましたが、他の先生方とこのお二人はどのように連携を取っているのか。

２つ目に、学校独自の科目のあり方についての質問がありました。このフォーラムで柱の一つに据えている「評価」に関わるものです。スカラーという学校設定科目があって、それを生徒が選択できることに興味を示された方が多かったのですが、これも単位として認定されるのか。スカラーの目標や年間計画、さらに評価の基準はどうなっているのか。

３つ目は「カリキュラム評価」の質問です。「いま、輝きの瞬間（とき）」をつくっていくためのさまざまな仕掛け、特に「こだわり学」やゼミ、生徒独自の時間割といった仕掛けの評価はいつ誰がどのように行っているのか。例えば、生徒や保護者が学校アンケートなどの形で関わることはできるのか。それとも学校の先生が自己評価の形でされているのか。

４つ目が、そのような魅力的な仕掛けにどうしてもかかってこない生徒や、仕掛けになかなか参加しない生徒をどのようにフォローしているのかという、生徒への「個別支援」の質問になります。

事例報告①への質問は他にもあるのですが、

いったんここで終わりまして、事例報告②の質問へ移ります。

次は、大阪府教育センター附属高校です。学校全体として、パフォーマンス評価や探究ナビなど、本当にさまざまな取り組みをされていて、その研修を学校でされているお話は出ましたが、それ以外にも学校の教員が全体として同じ方向に向かっていくために何かされているのかという、これも「教員の協働」についての質問になります。

２つ目に、パフォーマンス課題という思考力・判断力・表現力を評価する課題をかなり前から取り入れ、しかもシラバスに計画的に位置付けてきたとのことですが、それでもなお自ら課題を見つけたり、計画的に取り組んだりする力が弱かったというのは、評価の方法に問題があったのか。パフォーマンス課題は、思考力などを評価するパフォーマンス評価の典型的な方法の１つですが、その方向自体に問題があったのか。それとも、パフォーマンス課題だけでは不十分で、今、取り組まれているメタ認知の評価も加える必要があるのか。

３つ目に、探究活動に取り組むことでどうなっていくのかをイメージできない生徒、また、いくら働き掛けても後ろ向きになる生徒もいるかもしれませんが、そのような生徒にどのようにアプローチしていくのか。これも、先ほどの城南菱創高校と同様に「個別支援」の質問になります。事例報告②への質問は以上です。

次に、事例報告③の千葉大学への質問になります。千葉大学は国立大学ということもあり、高校生と大学生のどちらかというと上の層を接続してグローバルリーダーを育成することに取り組みの重点があるように見えますが、ボリュームゾーンの人たちにとっても高校から大学、仕事とキャリアを築いていく必要があります。ボリュームゾーンの生徒たちも含めて接続するための仕掛けがあるのかが、１つ目の質問です。

２つ目の質問として、今日の前半の２つは高校の実践例だったわけですが、その２つを聞かれて、大学としてどのように受け止められたでしょうか。これは、私の司会としての質問ですが、加えさせていただきます。

では、事例報告①から、お答えをお願いいたします。

澤井：　失礼いたします。ご質問、ありがとうございました。まず、教員の協働からお話をさせていただきますと「こだわり学」は２名が中心になって行っていただいているのですが、この「こだわり学、ゼミ活動」というプログラムの流れは、専門学科の目玉として行っておりますプログラムです。その専門学科を回しますのが、学科・企画推進部というところです。つまり、この専門学科の１年生、２年生のプログラムは分掌の担当の業務として回しております。そのため、２年生のゼミに関しましても、それを仕切る教員が１名おります。それも、学科・企画推進部の教員ですので、その中で当然ながら共有はできあがっております。また、各教科の先生が入っておられますので、各教科の先生に関しましては、まず年度当初に集まっていただいて、情報を共有して、目線を合わせます。その中に、当然ながら、１年生の「こだわり学」を行っていただくあの２名も入っております。このように、流れはできあがっているかと思います。全教員に関しましても、全体の発表会等もございますので、学校全体でも、一応、目的意識等の共有はできていると考えております。これが１つ目です。

続きまして、スカラーです。時間がございませんでしたので詳しい説明を省かせていただきましたが、実は、スカラーというのは単位制というシステムを最大限活用させていただきまして、その枠の中で設定したプログラムです。従いまして、これは科目ではございませんし、目標や年間計画も、当然、出てきませんし、評

価もしませんし、単位認定もしないということです。そのため、スカラーを選択する生徒に関しましては「これは、単位に入らないよ」ということは最初に言ってありまして、それを理解した上で、なおかつスカラーを取っていくという流れになるかと思っております。これが２つ目です。

３つ目の「輝きの瞬間（とき）」の仕掛けの評価です。これは、別に、仕掛けだけではなくて、どこの学校でもされていますと思いますが、われわれの教育活動は好き勝手に教員が行っているわけではございませんので、当然ながら大きな目標があって、その目標の下にわれわれが動いているということです。そのため、必ずそこには評価が生まれてくるというように私は思っております。その評価なのですが、教員レベルに落とし込みますと、教員に関しては、当然ながら、自分の授業に関する自己評価は挙がってまいります。また、われわれが次年度に仕掛けをつくっていくときに参考にさせていただきますのは、やはり生徒です。そして、保護者の方から上がってくるアンケートの結果です。そのアンケート結果を基にしながら「これは良かったな」「これは駄目だったな」というように反省をさせていただいて、次年度につなげていくことになるかと思います。

最後に、個別支援の仕掛けにかかってこない生徒へのフォローです。これは、このようなところでお話をさせていただきますと、絶対に良い話しかしませんので、そこで駄目だった話はなかなかしないのですが、仕掛けにかかってこないと言うと、釣りみたいで嫌ですが、当然ながら、そのような生徒はおります。しかし、これも私が発表の中で言わせていただきましたが、少人数の講座が非常に多くございまして、教員一人あたりの生徒数が非常に少ないですから、教員と生徒の関係性は、１対 40 に比べれば１対５や１対 10 のほうが密になってまいります。その講座が複数あるということは、１つの仕掛けにかかってこなくても、別の仕掛けにはかかってくるかもしれないので、どこかの先生には相談に行ける可能性は、普通の学校よりあるかと私は思っております。

学校全体といたしまして、別に学校で推奨しているわけではないのですが、とにかく個別指導が徹底している丁寧な学校だと思っております。そのため、朝、昼、放課後には、先ほど、出ました渡り廊下等では教員と生徒がずっと話しています。質問したり、進路の相談に答えたりしています。そのような中で、個別の指導が徹底しておりますので、生徒側にしてみても、個別指導を利用していることになるかと思います。全体の仕掛けにはかかってこないが「自分だけの仕掛けをつくってください」ということから、私も国語の教員ですが、その生徒用に２年間の学習プログラムを組み、私は「ルート」と呼んでおりますが、ルートを組んであげて、そのルートの進捗状況をチェックしてあげるということも、本校の単位制の形ではできるかと思っております。

細尾：　ありがとうございました。では、次に事例報告②のお答えをお願いします。

田中：　はい、失礼します。教員の協働の部分ですね。学校全体としての取り組みについては、授業研究を８年間行っていまして、授業研究委員会は、最初、進路指導部が管轄して、そのメンバー構成は各学年の進路担当だったのです

が、それでは各教科が足並みをそろえて取り組むのがなかなか難しいということから、進路指導部から独立した形で授業研究委員会のメンバー構成を大きく変えました。今は、教科と進路と教務というメンバーで、私がそれをまとめるという形で行っています。その部分では、それ以降は各教科、すなわち全教員が取り組む形になっている部分はあります。

ただ、研修の参加については、なかなか難しい部分があって、始めたころは参加率が悪い教科については、管理職からその教科の主任に話をすることもありました。それは進路が行っていたころで、それ以降はメンバー構成も変えて、かなりみんなに参加してもらえる形になりました。問題は、他の指導とのバッティングがあります。部活動、補習、講習などとバッティングしてしまいます。また、やはり考査前などに研修を入れられると、働き方改革の面でも難しいので避けてほしいということもあって、日程を選ぶときには非常に苦労しています。実は、昨日、研修があったのですが、本当は 11 月末に行う予定だったのです。その 11 月末はコロナの関係で行けなかった修学旅行とバッティングしてしまって、昨日は試験前とバッティングしてしまいました。最終的に参加者が少なくて、どうなるのだろうと思ったのですが、いろいろな指導が終わると、徐々に増えてきました。今の雰囲気は、特に生徒指導などの他のことがなかったら、みんなが参加するというところはあるかと思います。その辺りは、こちらも企画するときに、いろいろ教員の様子などに配慮しながら、考えているところでしょうか。池田先生からも何かありましたら、お願いします。

池田：　そうですね、探究に関して言うと、探究委員会があるわけでもなく、担当分掌、担当委員会がない中で行ってきたところもありました。先ほどの発表で言いましたが、個人の先生に対して大変負担がかかっていたところもあったので、それを全体化したいということです。先ほどの探究研修では、私は人権推進委員会も担当しているという立場を利用して、本校は、いじめ防止プログラムの一環として、探究ナビ１回目の授業で、全学年、全クラスで集団づくりのアイスブレイクを行うという位置付けにします。いじめ防止に関わらなくて良い先生はいませんし、今は法的義務で求められていることなので、そのように全校的にアイスブレイクを行うための研修ともするのです。そのときに、探究ナビ１回目の授業でもあるから、探究とはそもそもこのような授業で、アイスブレイクはこのような意味があるということを伝えます。１回の研修で、いじめ防止プログラムの実行にもなるし、本校の柱でもある探究への理解にもなって、担当する教員とそれ以外の教員も共に参加して行えます。その研修自体が教員の集団づくりの第一歩になっています。４月は新転任の方もいらっしゃって、最初は教員同士の中でなかなか関わりがなく、不安な教員もいます。そこで一緒に参加して、輪になってゲームをすることで、実は教員同士のアイスブレイクになっています。その後、研修以外でいろいろな仕事をお願いしやすくなったり、新しく来た先生との関係を結びやすくなったりする機会にもなっています。実際に、新転任の先生から「こんな機会をありがとうございました。なかなか他の先生と話せなかったんです」と、御礼を言われたこともあります。それは、生徒も同じように感じて４月を迎えているのだろうから、そのような気持ちを大事にして、教員や生徒の間で行っていける機会ができたら、探究への理解が深まるかと思っています。

また、探究は本校の柱の一つなので、私は広報委員という立場を利用して、広報のスライドをつくるときに、書き入れています。広報は、本校の場合、主に、分掌長と新転任２年目までの先生方が担当して行っているのですが、その新しく来た先生方に、探究とはどういうことか

を理解してもらう機会になっています。私は、学校広報とは、外向けだけに行うのではなくて、スクールアイデンティティを内外に示すために行っていると思っています。そのため、学校の中においても、私たちは何を目指して、どのように学校として行っていくのかを内側に示す行為でもあるから、広報の活動を利用して共通理解をしていきます。このように、人権推進や広報などの立場でできることも行って、通常の研修以外の機会でも「探究とは何か」ということが共通理解できるよう努力をしています。生徒も先生も同じ人間だから、やはり意味が分からないことをさせられていると思ったら、負担感が大きいです。「負担」と「負担感」は違うと思っています。負担はなかなか減らせないですが、負担感は減らせるだろうと思います。意味が分かってしてみたくなる、これを行うことで教員にも生徒にもメリットがあると実感できるような機会をたくさんつくることが大事かと思って、日々意識して行っているつもりです。

細尾：　ありがとうございます。では、次に質問２への回答をお願いできますか。

田中：　はい。「パフォーマンス課題の限界」ですが、パフォーマンス課題は、最初の３年間の文部科学省の調査研究のときにいろいろ取り組んでいて、例として数学を挙げさせてもらいましたが、そのストックとしてできたパフォーマンス課題を１年間、並べて見ると、ちょうどうまいこと１年間の計画にできました。１年間、それで計画を立ててしまおうと考えたら、なかなか難しいです。新しいものを次々とつくっていくということはかなりつらいので、できたものをためていって、前の先生がされたものを少し変えてしてみようかという形で良いと思います。そのようにしていくことで、徐々に教科として積み重ねができてきて、良い形になっていくのかと思っています。どの教科も、全部、そのような形でシラバスにパフォーマンス課題を位置付けて行っているかというと、そうではなくて、できているところはその範囲で行いましょうということです。だから、パフォーマンス課題で全て解決できるということではなくて、パフォーマンス課題としては非常に有効なものかと私は思っています。

また、メタ認知の評価ですが、そこはかなり難しいので、時間がかかると思っています。クローバープランのメタ認知を始めたのが３年前で、そのときは国の調査研究の下で行っていたのです。今年は、やはり小・中・高一斉にキャリア・パスポートがスタートしたのがかなり大きいということで、新１年生の担任団は非常に前向きに取り組んでくれていました。計画は立てていても、実際に行うのは担任団なのです。担任団がどれだけ力を入れて行ってくれるのかというのが、かなり難しいです。キャリア・パスポートになったこともあって、今の１年生の担任団が、それを、非常に前向きに取り組んでくれて、その結果が徐々に出てくるのではないかと思っています。すぐに結果が出るものではないと思っています。しかし、粘り強く続けていきたいと思っています。

池田：　パフォーマンス課題については、私は社会科、地歴・公民の公民科の教員なので、パフォーマンス課題について学んだことを、この前の倫理の授業で行ってみました。古代ギリシ

ア哲学の単元を勉強した後に、古代ギリシアの哲学者が一堂に会した「アテネの学堂」を、ラファエロがルネサンス期に描いているのですが、それを自分たちでつくろうというパフォーマンス課題を設定しました。それぞれの哲学者が、いろいろなポーズで絵画の中に描かれているのですが、そのポーズと思想は結び付いています。そのため、自分たちで学んだ思想を、単元の最後にポーズで表現しようというパフォーマンス課題でした。しかも、本校はロイロノートを試験的に導入しているので、そのロイロノートという授業支援アプリのカメラ機能を使って、実際にポーズを写真に撮りました。「なぜ、そのポーズをしたのか」「この哲学者はこの考え方をしているからこのポーズで表現しました」ということが分かる形で写真を撮り、ロイロノートのプレゼン機能を使ってプレゼンさせて、しっかりとルーブリックで評価するということを行ったのです。やはり手探りの部分があって、科目によってなじむ・なじまないはあるかもしれませんが、パフォーマンス課題というのは、これからの教育においては、本当に授業支援アプリとの相性も良くて、方法としては良い考え方です。テストで記憶力だけを問うのではない部分で評価できる可能性を秘めていると非常に感じました。方法は、手探り状態なので、うまくいかないところもあるのですが、そのようにうまくいくところもあります。

細尾：　質問３への回答もお願いできますか。

池田：　探究については、本当に難しくて、一緒に活動していくといっても、コミュニケーションが苦手で、初めからシャッターが下りているような生徒もいます。家庭環境がいろいろあったり、いろいろ課題があったりするような多様な生徒がいる本校の中で、みんなで探究を行っていくためには、個人と集団の２つにそれぞれアプローチしていくのが大事だと考えています。先ほどのピラミッドの一番下で示したように、アイスブレイクは集団へのアプローチです。どのような集団をつくっていくのかというときに、ただ「アイスブレイクで遊んで、楽しかったね、おもしろかったね」というように、体験があり、学びはなしで楽しかっただけでは意味がないと思っています。例えば「名前ビンゴ」という、16 マスの何もないビンゴにお互いの名前を書き合って、自己紹介を兼ねてお互いの名前を知っていくというアイスブレイクの回があります。その最後には、名前とは何だろうと、名前がある意味を考えていきます。名前があるのは、その人に祈りや願いが込められた証しであるという話をしていきます。そのような者同士がこれから一緒に付き合っていくのに、その名前をどう利用するのか、そもそも傷つけるため、存在を損なうために利用することもできるが、どうするのかという問い掛けをしてみて、お互いの存在を肯定していく集団づくりをしていこうと伝えます。

　チームビルディングのときも、チームには何が大事かということから「チアウェーブ」という、先生を座らせないいす取りゲームをします。輪になって、１つだけ空いた席に、先生が座ろうとしたら、ウエーブのように生徒が席を移動して、先生を座らせないというゲームです。これもチームワークであって、先生を座らせないという目標が共有できたらチームになれます。それは素晴らしいけれども、目標は怖いよね、どんな目標でもチームになれるよねと話をします。「先生を仲間に入れないという目標でも、これだけチームになれたよね。人間は、誰かを仲間に入れないという目標を共有してもチームになれてしまうよね。何のための目標なんだろうと、しっかり考えないとね。目標があればチームになれるだけだったら浅いよね。どんな目標か、中身が大事だね」という話をして、どのような集団になっていこうかというところを最初にしっかり丁寧に行っていきます。そう

すると、警戒して何をさせられるのだろう、参加しないでおこうという生徒たちも、徐々に安心してきて、これから、そのような集団づくりをしていくのだということを生徒自身も理解してくれます。「探究が嫌で参加しません」「この日休みます」という生徒はあまりいません。

集団をきちんとつくっていく一方で、個別にもアプローチします。その日の状態によって、なかなか入りにくい生徒もいます。その場合は「休んでいいよ」「席を外すか」と言ったり、教室の隅に休むスペースをつくって「そこで見ていて」などと言ったりして、乗り降り自由のように、状態に応じて参加できる範囲で行っています。だからといって「あなたは、これに参加したとは見なしません」ということはしないで、生徒は自分の状態をきちんとメタ認知し、調整しながら、できたら参加できる方向に行い、こちらもファシリテーションしながら、生徒を尊重して行っていきます。それを見て他の生徒も、自分もそのように扱ってもらえるのだろうと安心します。「何かさせられる」「みんなで話し合わされる」というような心理的プレッシャーで行っていくのではないというところをしっかり伝えていかないと、ピラミッドの上が低くなり、適当にやり過ごす、人の意見に合わせる、何も言わないで黙って過ごす時間になってしまうことがあるので、集団と個人にそれぞれしっかりとアプローチすることで、相互作用で参加率が上がる、意欲が増していく流れが大事だと思っています。

細尾：　ありがとうございました。では、事例報告③の質問１への回答をお願いします。

野村：　千葉大学で、ボリュームゾーンをどうするかということなのですが、千葉大学は全国区の大学ですので、ボリュームゾーンとの接続というのはなかなか難しいところがあります。ただ、われわれの高大接続・連携の活動の中で、特に国際研究発表会などでは、いろいろな生徒の参加を認めています。そのような意味で、直接、千葉大学には入ってこないだろうと思われる生徒でも、自由に参加して、発表できます。われわれは、他のものは理系にこだわって行っているのですが、理系の科学の実験というのは人を選ぶのです。われわれが選ぶというよりは、生徒が「これは、ちょっとやりにくいな」というところがあります。英語でプレゼンをする部分は、何か話がしたいという気持ちさえあれば、われわれは「日本の文化紹介でもいいですよ」という形で受け入れているので、そのような形で入ってくるという入り方はあります。実際に、非常にたくさん入ってきてくださっているところもあるし、それを通して、グローバルな視点が育ち、そのような方向に向って、生徒たちに自分の人生の目標を設定してもらえればよいのかと考えております。

細尾：　ありがとうございます。２つ目の質問について、１つ目の報告は、主体性を育む仕掛けに関するもので、２つ目の報告は、クローバープランやＩＣＥモデルを活用したメタ認知や主体性の評価に関するものでした。主体性の指導や評価などの高校の実践について、大学としてどのように受け止められているかということでお願いします。

野村：　お話をお聞きしていて、大学での学びのスタイルと非常に近いなと感じたのと、その

ようなところを育てていただくと、大学の中で、自分で学ぶところが非常にうまく動くのかというように考えました。単位制で、カリキュラムを自分で考えるというのは、まさに大学の学びのあり方で、スカラーというのは大学では自由選択単位に当たるのかと思います。自分で目標を持って、大学の授業を取って、自分はどうなるのかということを明確に考えられる力は非常に大事だと思いますので、それは高校のときから育てていただけるのは非常に良いことかと思います。

また、大学では、今、アクティブ・ラーニングが非常に言われていますので、チームビルディングをして、そのチームで学び合う姿勢が非常に大事だと思います。先ほど、アカデミック・リンク・センターという新しい図書館のご案内をさせていただきましたが、まさにそこは学生同士が集まって、課題を探究していくという場になっております。そのような意味では、非常に勉強になるものでした。メタ認知の評価は、確かに、そのようなことを通して自分を知ってもらうのは大変良い試みなので、ぜひ大学でもそのような授業を取り入れていったほうがよいかと思いました。

細尾：　ありがとうございます。大阪府教育センター附属高校と城南菱創高校は、それぞれ高校ですが、お互いのフィールドが違います。相互質問ということで、事例報告①の澤井先生から、大阪府教育センター附属高校の実践を聞かれてどのようなことをお感じになったか、質問でも感想でもお願いできますか。

澤井：　はい。今、おっしゃったとおりで、同じ高校でも、まず他府県の取り組みを聞く機会は意外に少ないです。そのため、このように非常に詳細な報告をいただきましたので、特に、今後に関しましては、評価の部分では悩んでいるところがございますので、主体性の仕掛け作りをいかに評価につなげていくかというのは、これから２年、３年のわれわれの課題だと思っていますので、その点は非常に参考になったと思っております。ありがとうございました。

細尾：　ありがとうございます。田中先生から、城南菱創高校の実践についてのご感想などをお願いします。

田中：　本校も普通科単位制です。10 年を超えて、次の 10 年に向けて、どのように学校をつくっていこうかと考えているところです。実際、本校の生徒、ボリュームゾーンの生徒が単位制の中で選択しようとすると、非常に難しい面があります。逆に、ある程度、レールを敷いてあげたほうがよいのかもと思って、今、それを考えています。コースを選ぶときに、まず、しっかり考えるのがよいのではないか、その中で科目を選んだらよいのではないかと考えています。今日のお話を聞いて、改めて、これからの自分の学校をどうしていくのかということを、もう一度、考え直そうかと思いまして、非常に勉強になりました。ありがとうございます。

細尾：　ありがとうございます。では、最後に一言ずつ、今度は逆の順番で、全体を振り返って、一言ずつお願いできますでしょうか。

野村：　大学の立場で今日の話を聞かせていただいて、高校・大学が同じ方向を向きながら人材育成することは、良いことなのではないかと思います。大学ごとにそれぞれキャラも違いますから、大学と高校の組み合わせはいろいろとありうると思いますが、人材育成を考えたときに、やはりつながっている部分は非常に大きいので、その部分をいかにうまくつなげていくのか、いかにそれを多様につなげていくのかという部分をこれからみんなで研究していくことが、より効果的な人材育成につながっていくの

ではないかと思います。また、それとは別に、その間で悩むということも、高校生、大学生の人生の発展に非常に役に立つと思うので、スムーズにつながる部分とストラグルする部分がうまく残るように組めると、きっと面白い人材育成が進むのではないかと思いました。

細尾：　ありがとうございます。池田先生、お願いします。

池田：　学びのスタイルが、高校と大学で徐々に共有されていっている時期かという気がしています。本校の卒業生が来てくれたときに「探究は、やっているときはそう思わなかったけれども、大学へ行ったら、話し合うとか、それを発表するとかいうスタイルで勉強することが非常に多いから、周りがまごついている中、自分たちはそれをリードできるような立場になりました」と言っていました。また「専門学校のプレゼン大会で優勝しました」という卒業生からビデオメッセージをもらって、探究の授業で流して、先輩方はこのようになることができていると紹介しました。学びのスタイルは、新しく高校と大学がお互いに共有して行っていけたらよいというのはあります。

しかし、学びのコンテンツについては、やはりオーダーメイドで目の前の生徒に何を学んでもらうのかということが大事だと思います。コロナ禍でつくづく思いましたが、オンラインだけで良いのだったら、私は社会科ですが、日本一うまい社会科の先生が全学校にオンライン授業をしたらそれで済みます。逆に言ったら、贅沢なことに、いろいろな学校のいろいろな生徒、生身の生徒に、生身の人間、教員がたくさんいて、目の前の生徒に合う内容で授業を行っているという、ありがたい状況です。そのような贅沢な状況なので、教育とは常にオーダーメイドで、生徒のために何ができるかというところがあるし、それができることが私たちの現場の大事な部分だということがあります。今、3年生をどうしようかと、探究2.0ということで考えているときに、本校の生徒にとっての探究とは何か、生徒にとって意味のある探究とは何か、必ずしも大学受験だけではない、多様な生徒たちにどのような探究をしてもらうかということを考えようと思いました。澤井先生の報告はすごく参考になりましたし、それをこれから考えていこうと思いました。

細尾：　ありがとうございます。澤井先生、お願いします。

澤井：　失礼します。先ほども言わせていただいたのですが、同じ高校でも他府県の取り組みを聞く機会は非常に少ないですし、また大学での取り組みを同じ土俵で聞かせていただく機会はもっと少ないと思っておりますので、今回は非常にありがたかったと思っております。本校に関しましては、理論がまず明確にあって、それに基づいたシステム設計をしているというわけではなくて、まず実際に行ってみて、その後、その経験の成否を分析して、次年度につなげるという流れになっております。そのため、本日の皆さんの報告を聞かせていただきまして、本校のこれからの仕掛け作りの大きな参考になるかと思っております。本日は、ありがとうございました。

細尾：　ありがとうございました。主体性を育

む仕掛けや、その評価、高校と大学の双方向の連携や接続について、手探りでまず行ってみることが大事なのかと思いました。成果は時間をかけて現れるということ、また「負担＝負担感」ではないということが興味深かったのですが、意義を伝えて負担感を減らしたり、また生徒が休める場を認めたりしながら行っていく、その中で手ごたえが見えてくるのかと思いました。

ありがとうございました。

第１分科会【国　語】

論理的思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造
―教科の枠を超える論理力―

報告者▸　谷本　寛文（京都光華女子大学准教授／京都大学特任准教授）
報告者▸　山本　亮至（京都光華中学校/高等学校教諭）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 藤岡　文彦（京都光華中学校/高等学校教頭）

グローバル社会、高度情報化社会において「自ら考え判断し行動することのできる力」がこれまで以上に求められている。本分科会では、論理的な思考力・判断力・表現力の育成に係る課題を明らかにし、実生活に生かすことのできる論理力育成プログラムを提示する。さらに、Society 5.0 時代に求められるクリティカル・シンキングの能力育成に係る具体的な教育方法を教科横断的な視点から提示する。

概　略

大学側として報告者１・谷本氏からは「論理的思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造－教科の枠を超える論理力－」というテーマが提示され、必然性と汎用性を実感する学びについてご提案をいただいた。対象とする文章を吟味・評価するためには、どこに何が、どのように書かれているのか正確に読み取る基本的な読解力が必要であるという実感、さらに吟味・評価する過程と結果において「なるほど」という自覚的な学びやものの見方・考え方を磨くことが重要であることをご教示いただいた。また、指導の具体として、吟味・評価する読みの能力を育成するために必要な読みの視点と評価の観点を示していただいた。

高校側として報告者２・山本氏からは、谷本氏からご教示いただいた吟味・評価するために必要となる汎用的な読みの視点と評価の観点をもとにした論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業づくりについて実践報告をしていただいた。吟味・評価する読みの実践として、３種類のテクストを用いた授業についての報告があり、それぞれの視点と観点を意識した読みの重要性を伝えていただいた。事前・事後のアンケート調査からも生徒の論理力向上を認めることができるものとなっていた。

全体討論の内容

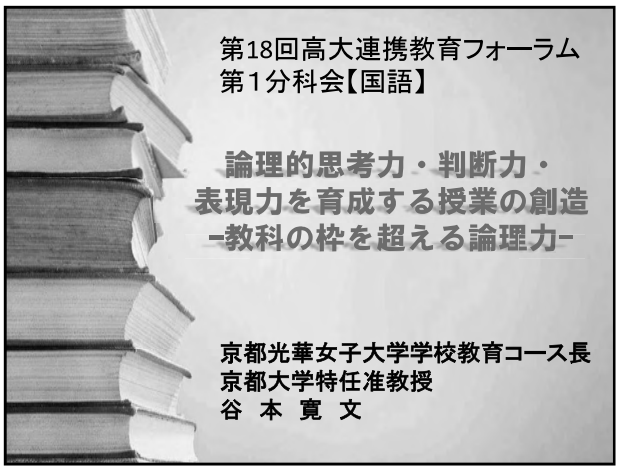
コーディネーターの藤岡氏の進行により「正確な読解力育成」と「高大連携の意味と価値」という２つのテーマについて、ディスカッションが行われた。まず「正確な読解力育成」に対して、山本氏からは、表現をする場面において、何が問われているのか、問いに付随する条件は何かを明確にし、構造的に表現内容を組み立てることが重要であることを生徒の実態に基づき提起された。

また、谷本氏からは、生徒に対して自らの考えを根拠に基づいた表現を求めることで「正確な読解力」が向上するということと「筆者はなぜ」という疑問を持つことが自らの表現力を高めることにつながるという説明があり、山本氏が実践された生徒自らの問題づくり（ＱＦＴ）の価値について評価された。次に「高大連携の意味と価値」について、両氏それぞれの立場から、その重要性が説明された。これらをもとにして、藤岡氏から、高大連携の物理的なつながり、心のつながり、さらには教科の枠を超えたつながりの意味と価値が再認識された。最後に、日本の未来を担う子どもたちの生きて働く国語力の向上・育成に向けて、本分科会に参加された方々とともに、さらなる高大連携の充実・推進に努める旨の確認があり、全体討論が締め括られた。

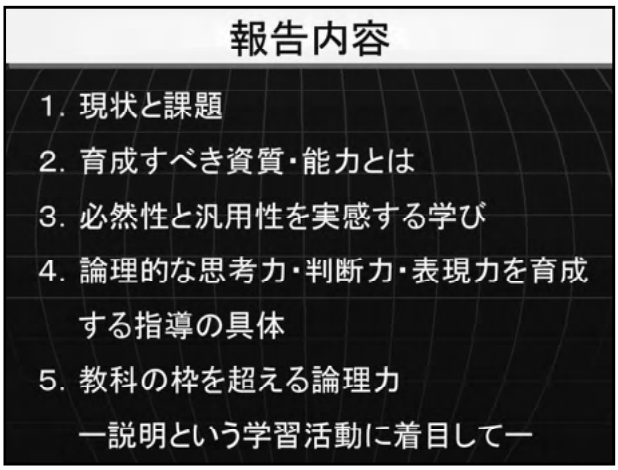
到達点と今後の課題

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成するために、大学から提案された理論に基づく吟味・評価する読みの実践が、高校現場において効果的であることが明らかとなった。今後は、論理力育成のために、さらに高大連携を密にして、単なる国語の教室という枠組みではなく、キャリア教育の視点も踏まえ、教科横断的な実践へと高め、深めていくことが重要となる。

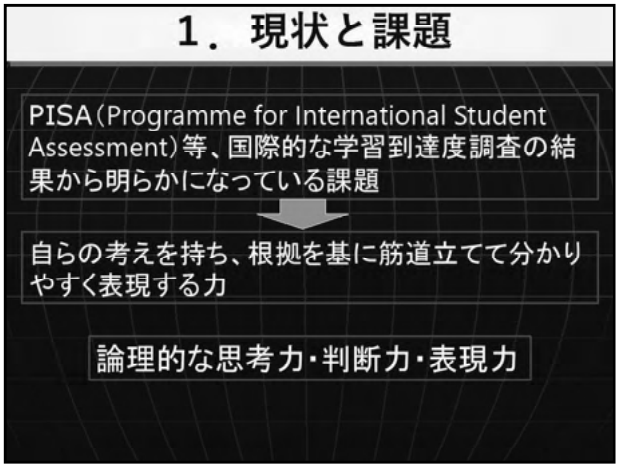
スライド1



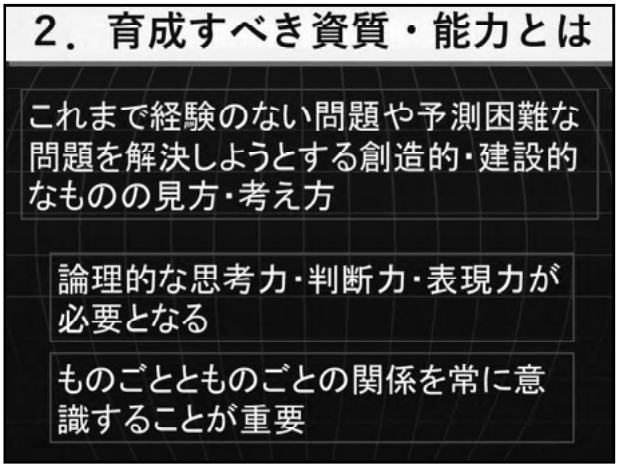
スライド2



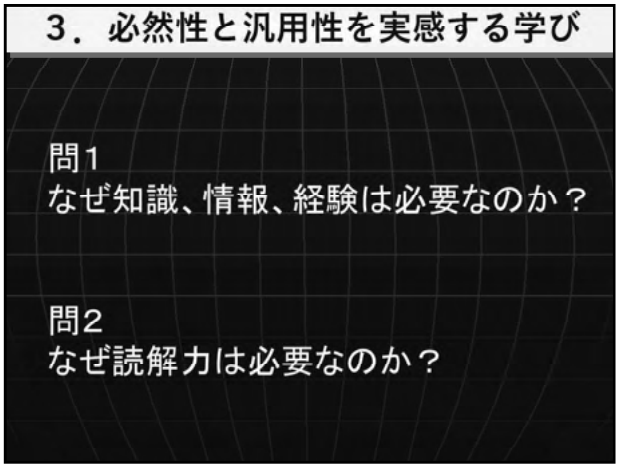
スライド3



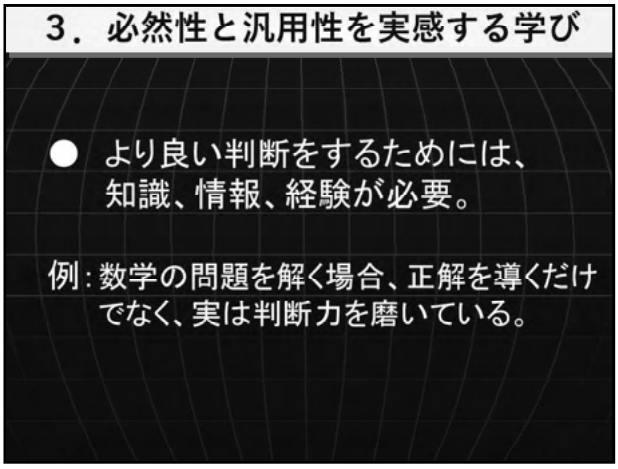
スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

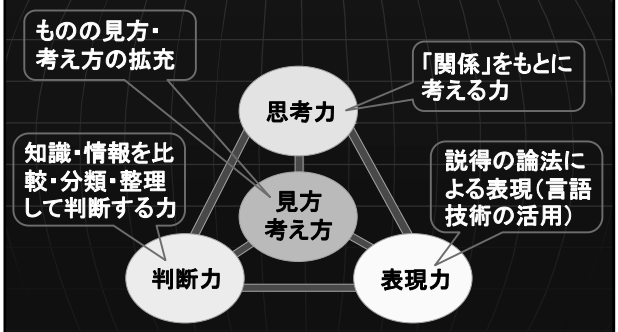
３．必然性と汎用性を実感する学び

- 実生活で求められる読みの能力は、吟味・評価する読みの能力

吟味・評価するためには、まず何がどこに、どのように書かれているのか、正確に読み取る基本的な読解力が必要。

スライド8

３．必然性と汎用性を実感する学び



スライド9

３．必然性と汎用性を実感する学び

「なるほど」という自覚的な学びが重要

ものの見方・考え方を磨くことが重要

スライド10

４．指導の具体

吟味・評価する読みの能力

- クリティカル・リーディング
- クリティカル・シンキング
- クリエイティブ・シンキング

スライド11

４．指導の具体

吟味・評価する読みの能力

観点１.
何が分かりやすいのか、その理由は。

観点２.
何が分かりにくいのか、その原因は。
どうすれば分かりやすくなるのか。

スライド12

４．指導の具体

吟味・評価する読みの能力

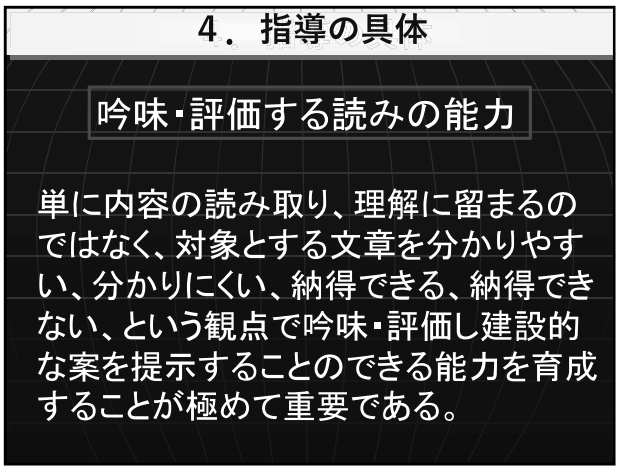
視点１：表現

視点２：内容・事柄

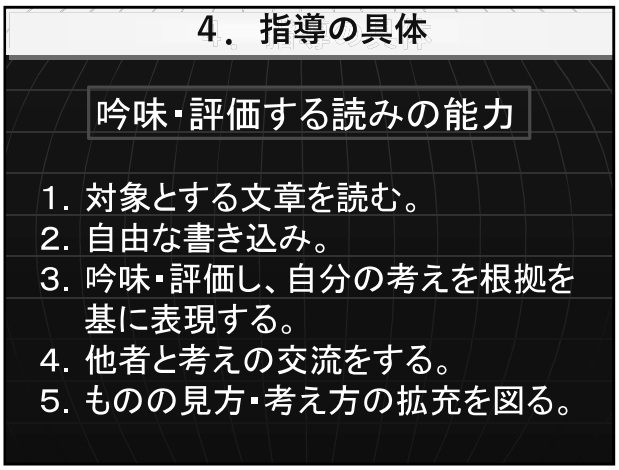
視点３：論理展開（組み立て方）

参考：広島大学名誉教授 森田信義の理論

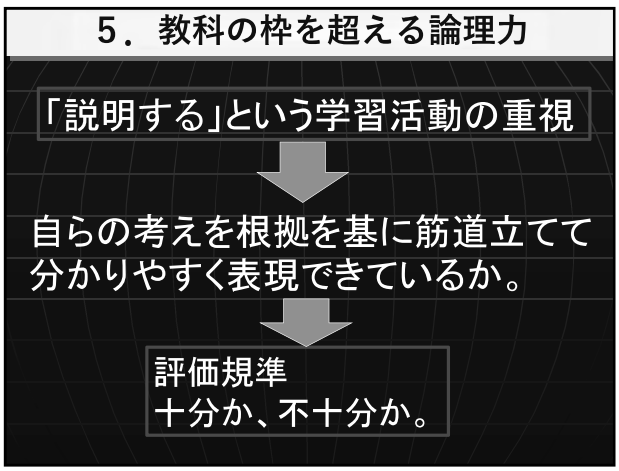
スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド1

第18回高大連携教育フォーラム
第１分科会【国語】

授業実践報告

京都光華高等学校　国語科　山本亮至

京都光華中学校／高等学校

スライド2

本資料について

- 論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り
- アンケート結果
- 授業者としてのまとめ
- 継続的な研究内容

スライド3

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

全４時間+実践後アンケート

時数	学習活動	学習目的
1	実践前アンケートの実施	• 読みの意識の実態調査 • 読むことについての課題意識を持たせる
2	吟味・評価する読みの実践1 社説「部活動の地域移行　教員負担の削減だけでは」 京都新聞　2020/09/13 ①個人での自由な書き込み②グループでの意見交換 ③全体交流	• 「吟味・評価する読み」の観点と視点の確認 • 観点と視点を意識した読みの実践
3	吟味・評価する読みの実践2 社説「高校生の就職　コロナ禍で支援厚く」 朝日新聞　2020/07/08 ①個人での自由な書き込み②グループでの意見交換 ③全体交流	• 「吟味・評価する読み」の観点と視点の確認 • 観点と視点を意識した読みの実践
4	吟味・評価する読みの実践3 社説「生活とAI　特性を理解すれば賢く使える」 読売新聞　2020/09/06 ①個人での自由な書き込み②グループでの意見交換 ③全体交流	• 「吟味・評価する読み」の観点と視点の確認 • 観点と視点を意識した読みの実践

スライド4

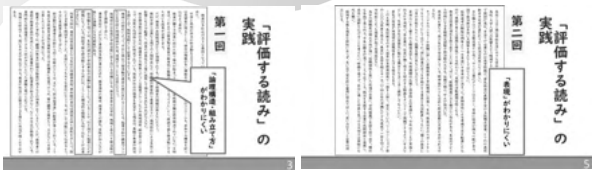
論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

全４時間+実践後アンケート

スライド5

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

吟味・評価する読みの実践1～3

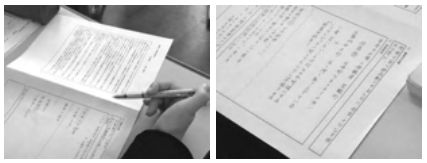


第１回「論理構造・組み立て方」
第２回「表現」
第３回「内容・事柄」

スライド6

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

吟味・評価する読みの実践1～3
①個人での自由な書き込み



- **「なるほど」と思う筆者の工夫**
  なにがわかりやすいのか、その理由は。
- **読者として納得できないところ**
  なにがわかりにくいのか、その原因は。
  どうすればわかりやすくなるのか。

スライド7

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

吟味・評価する読みの実践1～3
②グループでの意見交換

- **筆者の主張**
- **わかりやすかった点とその理由**
- **わかりにくかった点とその原因**

スライド8

論理的な「思考力・判断力・表現力」を育成する授業作り

吟味・評価する読みの実践1～3
③全体交流

- **なにがわかりやすいのか、その理由は。**
- **なにがわかりにくいのか、その原因は。**
  どうすればわかりやすくなるのか。

「文章を改善するための建設的な案」を提示する

スライド9

アンケート結果

実践前アンケート

実践後アンケート

スライド10

アンケート結果

実践前アンケート

「論理的な文章を読むときは、どのようなことに気をつけているか。」

スライド11

アンケート結果

実践前アンケート
「論理的な文章を読むときは、どのようなことに気をつけているか。」

- 25人のうち15人が接続表現に気をつけている。
- 25人のうち8人が筆者の主張に気をつけている。
- 文章中の事実と意見に着目することができている。
- 回答が単語のみの生徒が見られる。
- 「～こと」を用いた文章で回答できていない生徒が見られる。

スライド12

アンケート結果

実践後アンケート

「吟味・評価する読みが、なぜ必要だと考えるか。」

スライド 13

アンケート結果

実践後アンケート
「吟味・評価する読みが、なぜ必要だと考えるか。」

- 全ての生徒が「～ため」「～から」を用いた文章で回答している。
- 25人のうち12人が自らが表現する場面を想定した回答をしている。
- 身につけたい能力として「筋道立てて分かりやすく表現する能力」を挙げている。
- 25人のうち3人が大学入試に役立つからと回答している。
- 自らが社会に出た場面を想定している。

スライド 14

アンケート結果

アンケート結果の比較

- 目的意識を持った読みを確立することができた。
- 適切な文末表現を用いることができた。
- 読み手を意識した表現を用いることができた。
- 自らが「評価すること」の観点が「評価されること」に繋がることを認識できた。
- 「筆者の主張」「接続表現」「文章構成」などが文章を読むに当たって必要な視点であることを再確認できた。
- 筆者の論理に対して自らの意見を持つようになった。

スライド 15

授業者としてのまとめ

実践授業　全４時間+実践後アンケートによって

- 的確に筆者の主張・意見を読み取ることができるようになった。
- 接続表現や文末表現を適切に用いるようになった。
- 自身の意見を支える具体例を述べるようになった。
- 文章を推敲する意識が生まれた。
- 口頭での発表においても、聞き手を意識した丁寧な発表を行うようになった。

スライド 16

継続的な研究内容

今後に向けて

「吟味・評価する読み」の観点と視点を意識した読みによって、生徒にどのような変化が現れたのかを数値によって明らかにしていきたい。

第２分科会【地歴・公民】

地歴・公民科の学びを通じて育成したい資質・能力

報告者▸　海老瀬将太（京都府立鴨沂高等学校教諭）
報告者▸　徳永　俊太（京都教育大学大学院連合教職実践研究科准教授）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 藤田　五樹（京都府教育委員会高校教育課指導主事）

主体的・対話的で深い学びを通じて、課題の多面的・多角的考察および課題解決に向けた公正な判断力の育成を目指す高等学校倫理の授業実践を報告する。また、新学習指導要領での目標も見据え、地歴・公民の学びを通じて育むべき力とはどのようなものなのか、大学からお招きする登壇者に解説をいただく。

概　略

はじめに鴨沂高等学校教諭　海老瀬将太氏が実践発表を行った。海老瀬氏は冒頭、未来社会の姿を映し出す「20XX in Society 5.0 ～デジタルで創る、私たちの未来～」（経団連作成）の動画を提示して、動画に描かれるような未来社会を生きていくには、今までにない価値を創造し活用する力が必要であり、その力の育成のためには教育が変わることが必要だと効果的に示された。知識集積に加え、ＡＩやＩｏＴ技術をうまく活用する「創造力」を身に付ける授業が今後は増えていくとのことである。その授業展開の核になるのが新学習指導要領に記載される「主体的・対話的で深い学び」であるが、海老瀬氏は学びを主体的で深くするために「対話」に焦点を当て授業改善を図っており、倫理の授業におけるその実践例を発表された。「先哲（教材）との対話」⇒「他者との対話」⇒「自己との対話」という流れで授業を組み立て、それぞれを「個人ワーク＝先哲（教材）との対話」⇒「グループワーク（吟味）・中間発表・グループワーク（再構成）・最終発表＝他者との対話」⇒「個人レポート＝自己との対話」という形で実践している授業例を示された。

続いて京都教育大学准教授　徳永俊太氏が発表された。新学習指導要領の着目点は、児童生徒が「何ができるようになるか」であるが、徳永氏によると「できる」子どもたちは本当に「わかっているのか」という視点を持つことが重要とのことである。加えて、ＯＥＣＤの定義するエージェンシー（自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく力）を育むことにより、個人の幸福だけでなく、社会全体のウェルビーイングを捉えることができる子どもを育成していく必要性について述べられた。「地理歴史科」の目的は、子どもたちに、現在を理解し未来を創る能力を育み、当たり前を問い直す批判的な見方・考え方を育むことであり「公民科」の目的は、子どもたちに民主主義社会の構築・発展に寄与する力を育むこととされた。「大人が見せる社会を子どもが見ている」という印象的な言葉と共に、民主主義が子どもたちに根付かないとすればそれは社会に民主主義が構築されていないからであり、子どもに民主主義の体現を問う前

に、まず大人が体現できているのかを問うべきであるとされた。

全体討論の内容

質疑応答

・「探究の高度化」と言う時の「高度」の定義とは何か。

→例えば小学校では身近なことの探究から始めていくこと。高校では探究の対象を社会全体へと広げながら、小・中学校で取り組んだ内容よりも深く物事を探っていくこと。（徳永氏）

・事例発表の授業時における教科の協力体制はどのようなものであったか。

→文部科学省指定のプロジェクトとリンクさせ、教科全体で取り組む体制をつくり、他の教員と内容等を協議しながら複数のクラスと合同で展開した。（海老瀬氏）

・事例発表の授業においてコンピテンシーをどのようにして測っているか。

→正直なところ、点数化にはそぐわないので、評価形態については現在も模索中である。（海老瀬氏）

→評価をする際にはコンテンツベースにならざるを得ないが、新学習指導要領では道徳での評価のあり方などを参考にすることもできるのではないか。（徳永氏）

→教科指導の観点からは単元目標をしっかり設定して、目標に準拠して評価をしていくことが大切である。（徳永氏）

到達点と今後の課題

新学習指導要領においては、地歴・公民科の見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを通じて「思考力・判断力・表現力」を育成することが求められる。そのような中で、鴨沂高等学校海老瀬氏の実践発表では、直面する課題の多面的・多角的考察および課題解決に向けた公正な判断力の育成をいかにして実現するか、その一端を見せることができたのではないか。また、高等学校地歴・公民科の究極の目的は、子どもたちに民主主義を根付かせ、社会の中で民主主義を体現できる力を育むことであるという京都教育大学徳永氏の提言は、参加者にも深く印象に残り、地歴・公民科の授業において指導すべきことを再認識でき、今後の指導のあり方について示唆に富むものとなったのではないかと思われる。

今回はオンラインでの開催となり、参加者との意見交流を通じて高校・大学の発表内容をさらに深く掘り下げて、新たな知見の獲得へとつなげる活動を行えず残念ではあったが、両氏の発表内容は参加者にも大変参考となるものであり、分科会の目的である「地歴・公民科の学びを通じて育成したい資質・能力」を十分に提示できたのではないかと考える。

スライド１

2020. 12.5（土）
高大連携教育フォーラム
第2分科会「地歴・公民」

地歴・公民科の授業を通じて育成したい資質・能力

～ 未来を「生きる力」～

京都府立鴨沂高等学校
教諭　　海老瀬　将太

スライド２

経団連「20XX in Society 5.0～デジタルで創る、私たちの未来～」

スライド３

出典：自動運転LAB（https://jidounten-lab.com/u_middle-class-autonomous-bus-start）

スライド４

スライド５

・これからの学校・教育の在り方が変わってきそう。
知識集積にプラスして、AIやIoT技術をうまく活用する「創造力」を身につける、磨く授業がふえていくのでは・・・？

スライド６

スライド 7

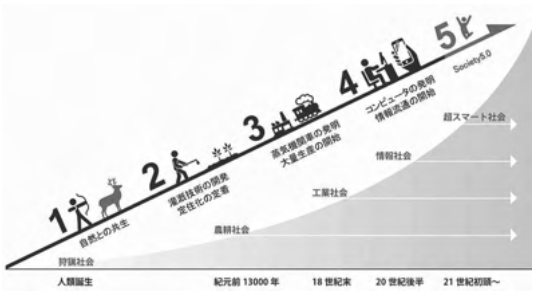
本発表の流れ

①Society5.0 と新学習指導要領

②「地歴公民科」と主体的・対話的で深い学び

③授業実践例の紹介

スライド 8



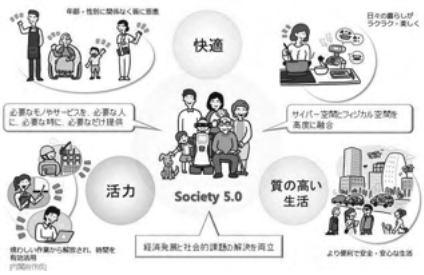
Society 5.0とは、AIやIoT、ロボット、ビッグデータなどの革新技術をあらゆる産業や社会に取り入れることによりする実現する新たな未来社会の姿です。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、人類社会発展の歴史における5番目の新しい社会の姿とも言えるでしょう。

スライド 9

IoT（Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これらの課題や困難を克服します。

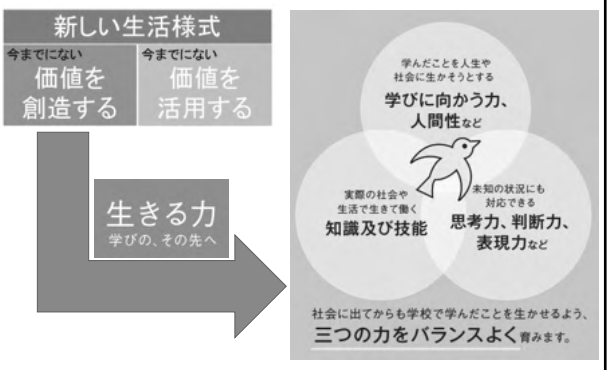
人工知能（AI）により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されます。

スライド 10



Society 5.0では、ビッグデータを踏まえたAIやロボットが今まで人間が行っていた作業や調整を代行・支援するため、日々の煩雑で不得手な作業などから解放され、誰もが快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることができるようになります。

スライド 11



スライド 12

本発表の流れ

①Society5.0 と新学習指導要領

②「地歴公民科」と主体的・対話的で深い学び

③授業実践例の紹介

スライド 13

第３節　公民科の目標

社会的な見方・考え方を働かせ，現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

スライド 14

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなっており、高等学校においては、社会で求められる資質・能力を全ての生徒に育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことがこれまで以上に求められる。

そのため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要。特に、生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実が必要。

（情報を的確に理解し効果的に表現する、社会的事象について資料に基づき考察する、日常の事象や社会の事象を数理的に捉える、自然の事物・現象を観察・実験を通じて科学的な概念を使用して探究する　など）

文部科学省：高等学校学習指導要領の改訂のポイント より

主体的・対話的で深い学び → 対　話

に向けた 授業改善　　に焦点を当てた 授業改善

スライド 15

(1) 選択・判断の手掛かりとなる概念や理論及び倫理，政治，経済などに関わる現代の諸課題について理解するとともに，諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

先 哲（教 材）との対話

スライド 16

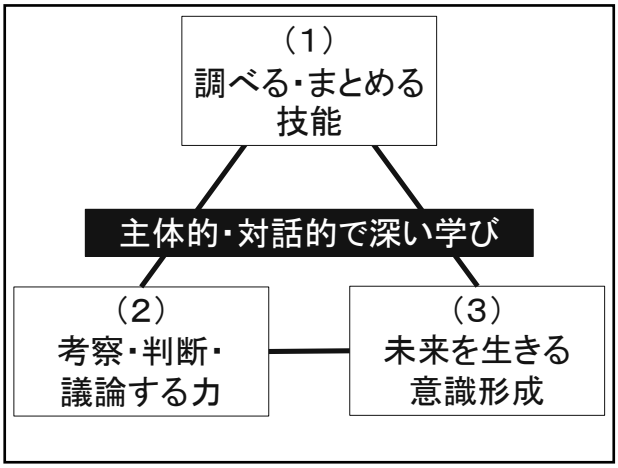
(2) 現代の諸課題について，事実を基に概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，解決に向けて公正に判断したりする力や，合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う。

スライド 17

(3) よりよい社会の実現を視野に，現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される，人間としての在り方生き方についての自覚や，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや，各国が相互に主権を尊重し，各国民が協力し合うことの大切さについての自覚などを深める。

自 己 との対話

スライド 18



スライド 19

本発表の流れ

①Society5.0 と 新学習指導要領

②「地歴公民科」と主体的・対話的で深い学び

③授業実践例の紹介

スライド 20

足 跡 を残す授業

スライド 21

これから学ぶ「倫理」とは

～ 一度きりの人生、絶対に幸せな方がいい！ ～

スライド 22

その時、その一瞬の「私」を記録する

⇒ 自分の成長過程を知り、深めていく

第1回授業 → 最終回授業

スライド 23

授業実践例の紹介

単元：国際社会に生きる日本人としての自覚

1　日本の社会と風土

テーマ　「日本人」って一体何なのだろうか。

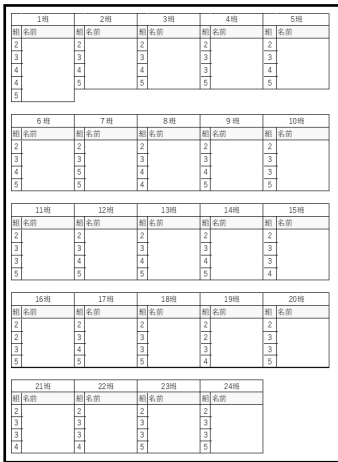
第3学年

講座A（3年標準クラス 選択講座）　26名

講座H（3年発展文系　選択講座）　37名

3　組（京都文化コース）　34名　計97名

スライド 24



・1グループ、4～5人で構成

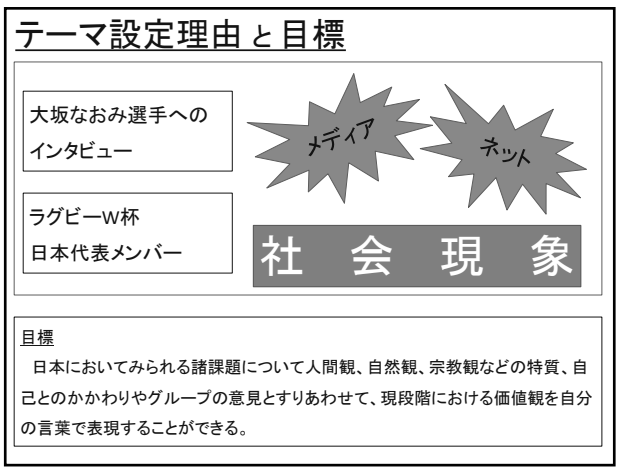
・3つの講座から1グループを編成

・各グループに1台iPadを配布

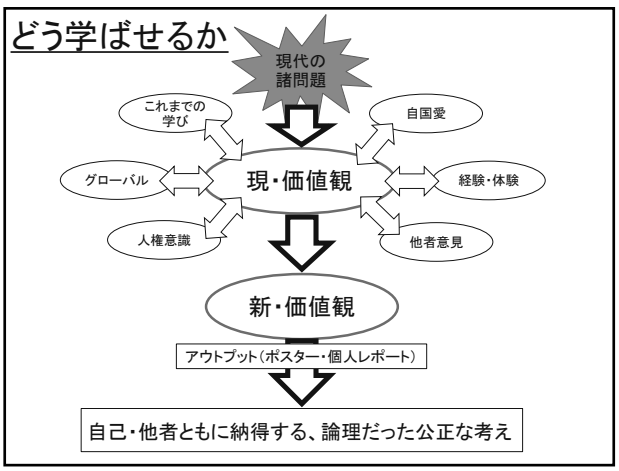
スライド 25

スライド 26

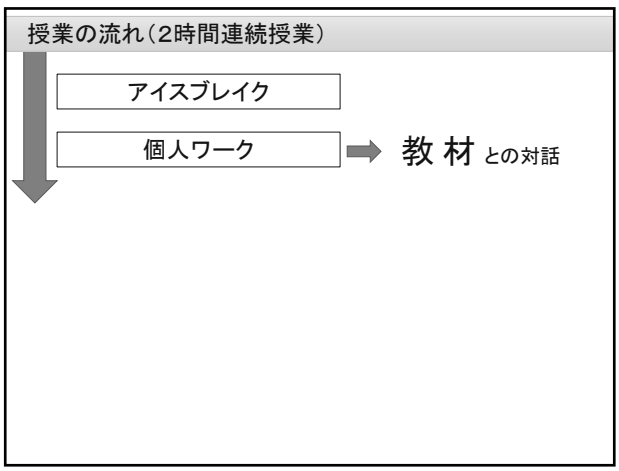
スライド 27



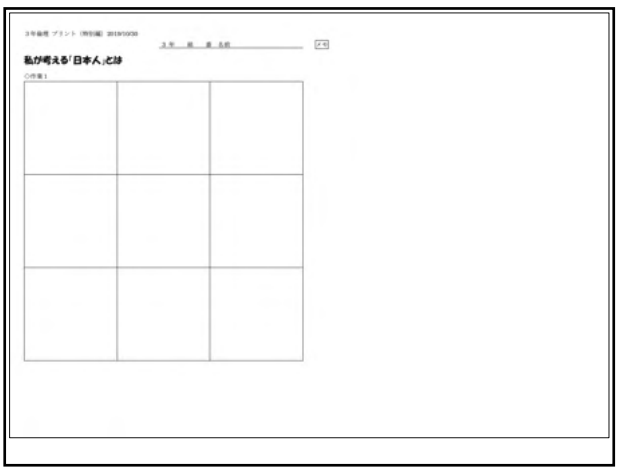
スライド 28



スライド 29



スライド 30



スライド 31

授業の流れ（2時間連続授業）

アイスブレイク

個人ワーク ➡ 教 材 との対話

グループワーク（吟味）

中間発表（ワールドカフェ）

グループワーク（再構成）

発表

他 者 との対話

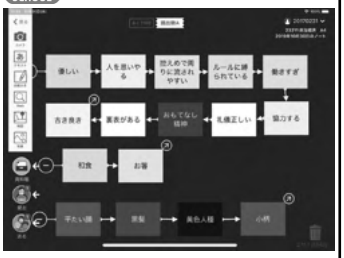
スライド 32

グループワーク（吟味）

中間発表
（ワールドカフェ）

グループワーク
（再構成）

アプリケーション
ロイロノート・スクール



スライド 33

（イ）ワールドカフェ

比較的新しい手法として、ワールドカフェがあります。少人数による会話を、メンバーを入れ替えて何度か行うことにより、偶然的に参加者全員と話し合っているような効果が得られる手法です。カフェのような気の張らない場所での自由な会話を楽しもうという考え方です。街づくり、組織改革、教育など様々な場面で活用されています。

‖ 進め方

1）4人で1つのテーブルに座ります。

2）各テーブルでテーマについて話し合います。テーマは全テーブル共通です（1回の話合い（ラウンド）は 20 分程度です）。

3）テーブルに置かれた模造紙に、話合いの中で気付いたことを"落書き"のように書いていきます。キーワードでも絵でもなんでも様式は問いません。

4）各テーブルでホストを決め、その人を残して他の人は"旅人"となって別々のテーブルに移動します。

5）次のラウンドで、ホスト、旅人共に、前のラウンドでの話を簡単に共有します。その後、更に話を進め、模造紙に気付いたことを書き込みます。

6）次のラウンドは、最初のテーブルに戻り、各テーブルで得られた発見や気付きを共有し、更に話合いを進めます。

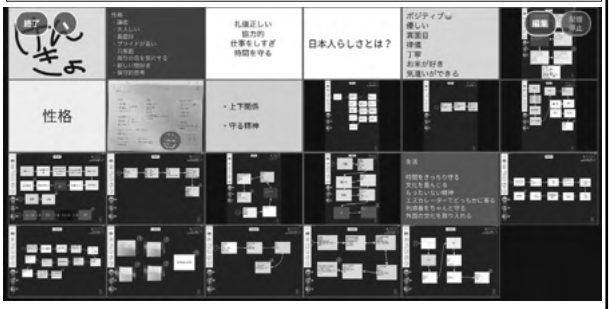
7）最後に、気付いたことや学んだことなどのキーワードを各自付箋紙に書いて、模造紙に貼り、共有して終了です。簡単に各グループから発表してもらうこともあります。

＊ 進行に当たって司会（ファシリテーター）が"司令"をかけるようなことはしないのも特徴の一つです。時間になったら無言で手をあげるなどの合図を事前に決めておき、それに気付いた参加者が静かに話をやめます。

出典：『私たちが拓く日本の未来』（総務省・文部科学省）p36

スライド 34

発表



スライド 35

授業の流れ（2時間連続授業）

アイスブレイク

個人ワーク ➡ 教 材 との対話

グループワーク（吟味）

中間発表（ワールドカフェ）

グループワーク（再構成）

発表

他 者 との対話

個人レポート ➡ 自 己 との対話

スライド 36

スライド 37

授業目標 とはまた別に

3講座合同で協働作業を行うことにより、各生徒の長所が存分に活かされ、新たな価値観の創造、自己の価値観の再構成をねらいとする。

スライド 38

A講座（標準クラス）

ペア・グループワークが活発

⇒ 感情的感覚的発言が多くみられる。

H講座（発展文系）

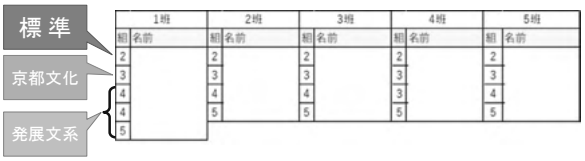
情報を取捨選択して論理的な思考がある程度できる

⇒ 主観的で一面的な意見に陥ることが多い。

3組（京都文化コース）

協働作業を数多くこなし、アウトプット能力が高い

スライド 39

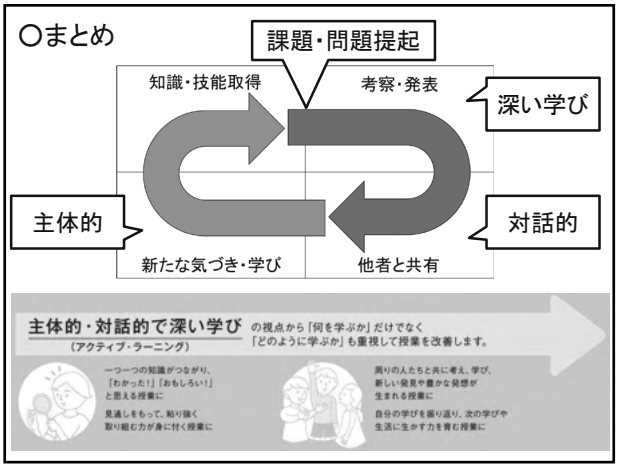


それぞれのグループでそれぞれの役割を自覚し、責任を持って果たす

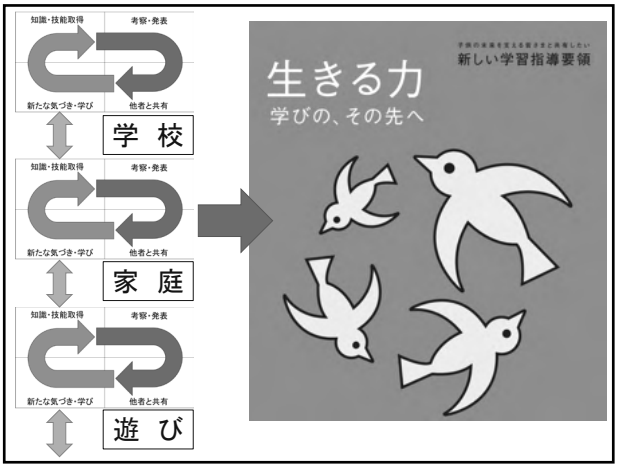
座学では見出せない「生徒の姿」

→ ファシリテート能力、デザインカ、空間把握能力、気遣い、世界観、コーディネート能力・・・

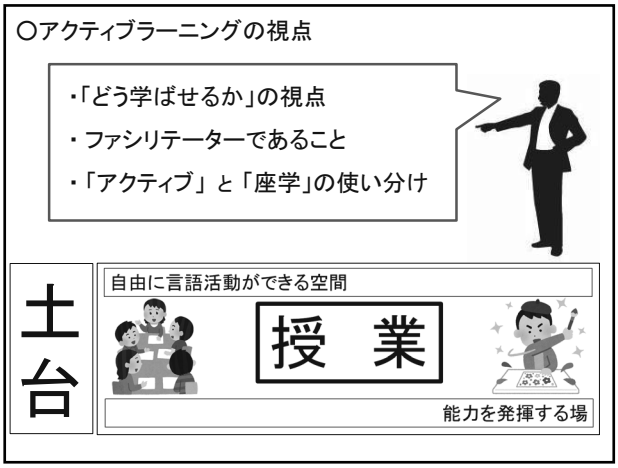
スライド 40



スライド 41



スライド 42



スライド 43

参考文献等

文部科学省（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）

・平成29・30年改訂 学習指導要領　周知・広報ツール　リーフレット

・高等学校学習指導要領の改訂のポイント

・主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

・高等学校学習指導要領（平成30年告示）

内閣府

・Society5.0とは（https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/）

経団連

・「20XX in Society 5.0～デジタルで創る、私たちの未来～」（ショート版）

SoftBank

・すごい明日体感ドラマ（https://tm.softbank.jp/sugoi_ashita/#/landscape）

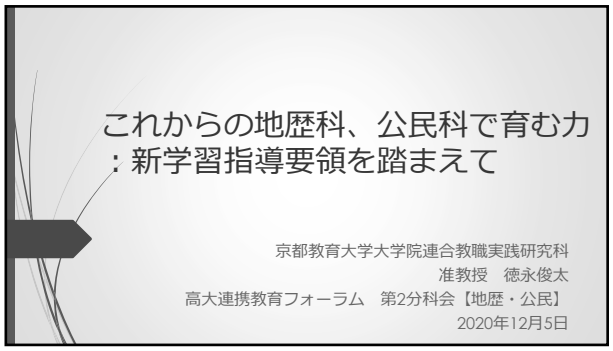
時事ドットコム

・「日本人」とは何か　～ラグビーW杯を釜石で観戦して～【コメントライナー】

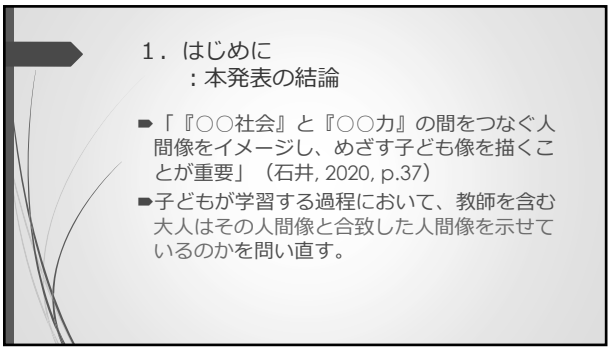
（https://www.jiji.com/jc/v4?id=20191015com0001）

教育ファシリテーターになろう　グローバルな学びをめざす参加型授業（石川一喜 編・小貫仁 編）　弘文堂

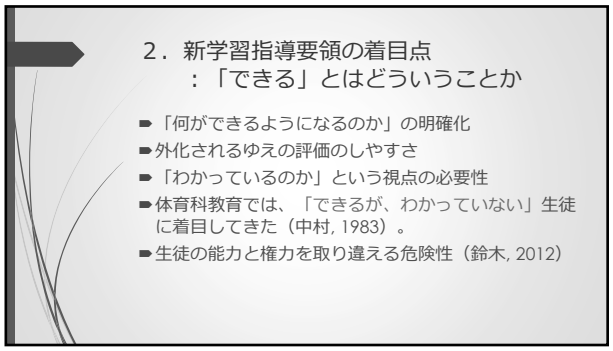
スライド1



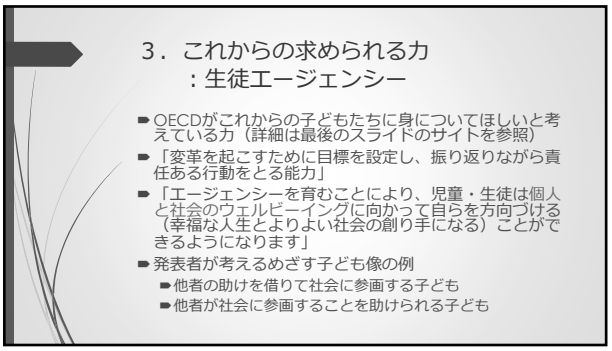
スライド2



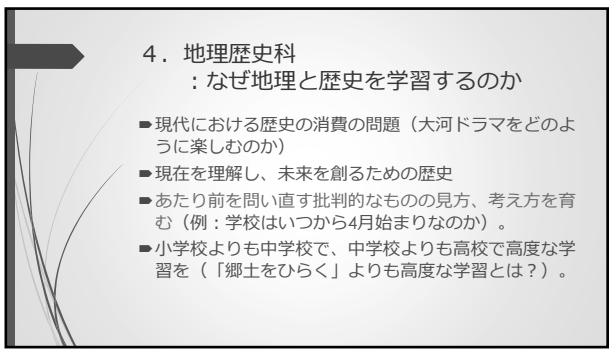
スライド3



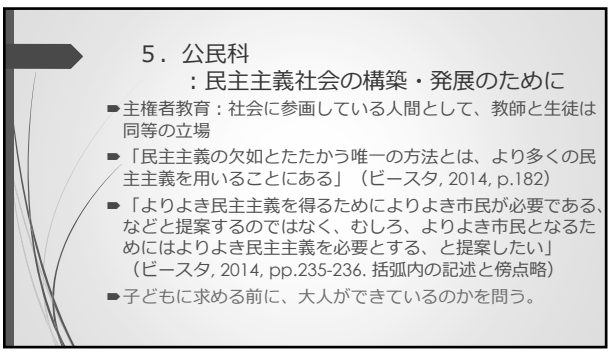
スライド4



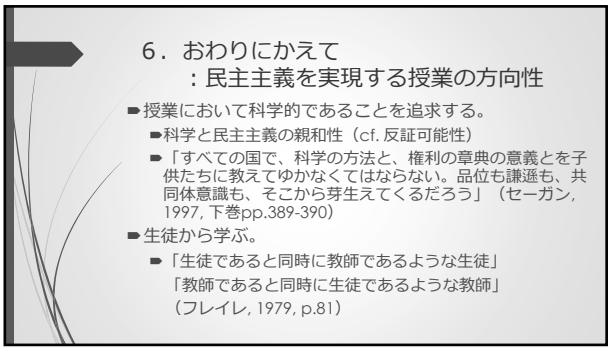
スライド5



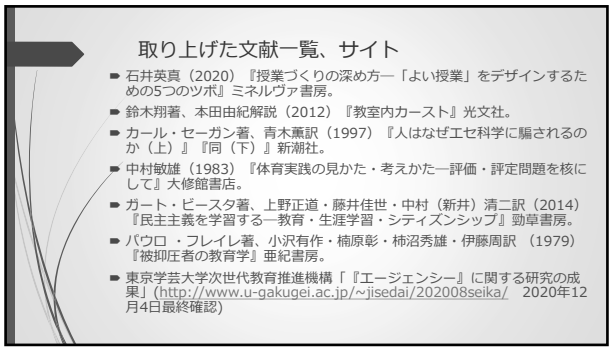
スライド6



スライド7


6．おわりにかえて
：民主主義を実現する授業の方向性
授業において科学的であることを追求する。
科学と民主主義の親和性（cf. 反証可能性）
「すべての国で、科学の方法と、権利の章典の意義とを子供たちに教えてゆかなくてはならない。品位も謙遜も、共同体意識も、そこから芽生えてくるだろう」（セーガン, 1997, 下巻pp.389-390）
生徒から学ぶ。
「生徒であると同時に教師であるような生徒」
「教師であると同時に生徒であるような教師」
（フレイレ, 1979, p.81）

スライド8


取り上げた文献一覧、サイト
石井英真（2020）『授業づくりの深め方―「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房。
鈴木翔著、本田由紀解説（2012）『教室内カースト』光文社。
カール・セーガン著、青木薫訳（1997）『人はなぜエセ科学に騙されるのか（上）』『同（下）』新潮社。
中村敏雄（1983）『体育実践の見かた・考えかた―評価・評定問題を核にして』大修館書店。
ガート・ビースタ著、上野正道・藤井佳世・中村（新井）清二訳（2014）『民主主義を学習する―教育・生涯学習・シティズンシップ』勁草書房。
パウロ ・フレイレ著、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳 （1979）『被抑圧者の教育学』亜紀書房。
東京学芸大学次世代教育推進機構「『エージェンシー』に関する研究の成果」(http://www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/202008seika/ 2020年12月4日最終確認)

第３分科会【数　学】

数学的な見方・考え方を働かせるということ

報告者▸　河崎　哲嗣（岐阜大学教育学部准教授）
報告者▸　吉田　和馬（京都市立塔南高等学校教諭）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 岡本　弘嗣（京都市教育委員会指導部学校指導課指導主事）

新学習指導要領実施に向けて、学習意欲の改善や数学的な表現や論理的な説明を重視するなど、数学的活動の一層の充実が求められている。学習指導の改善・充実において、数学の学習内容をどのようにして定着させ、学力を付けるのか、高校・大学それぞれの視点から議論する。特に、21 世紀型能力・スキル育成に向けて、高校現場では数学的な見方や考え方を働かせる活動を構築し、学びが深まったかをどのように見取っていくのか、具体的事例をもとに考える。

概　略

数学的な見方・考え方を働かせ、新学習指導要領では「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点で評価を行うことになっている。本分科会においては、数学的な見方・考え方を働かせるとはどのようなことか、また、生徒のどのような活動から見取っていくのかを中心に報告と議論を行った。

河崎氏からは、授業改善と評価の改善という視点から、高校・大学での現状がどのようになっているのか。なぜ数学を学ぶのかという大きなテーマへ向けてこれから社会で必要になるスキルの育成として、フェルミ推定を題材に学習思考の仕組みや、それらをどのように評価するのかという話題提供があった。

吉田氏からは、ポートフォリオやパフォーマンス課題を行う際に、生徒が数学的な見方・考え方をできたのかの評価や、リフレクションの重要性やそのポイントなどを、自身の実践報告を通してその有用性や課題点などの報告があった。

全体討論の内容

河崎氏の報告に対して、大学としてはどのように数学的な見方・考え方を働かせられたかを見ていけるのかという質問の中から、吉田氏の報告の中身である、高校生ポートフォリオやリフレクションを評価することに相性のよい生徒と、そうでない生徒がいるのではないかという議論になった。

特に、主体性の評価について、結果として、振り返りなどで単純に文章量を多く書いた生徒や、教師の意に沿うことが高評価につながることは果たして良いのかと問題提起し、高校においては観点別学習状況の評価を指導要録に記載する際の課題にもつながる中身となった。

到達点と今後の課題

分科会全体を通して、生徒の数学の力が付いたかを高大できちんと見取っていくことの重要さと、公平性・妥当性、教員の負担などさまざまな面から考えながら、力が付いたかをどのように見取るのかの手法について意見が交換できた。多面的な評価の推進という観点から、どのような評価が最も良いという順位を付けるのではなく、高大での具体的な実践を交流し、研究機関と連携しながら、数学的な活動の充実に向けた指導改善を日々行っていく必要があると確認された。

スライド１

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

教育評価の模索とその行方
－授業改善（教師の指導・生徒の学習）と教育情報データの活用－

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学
河崎　哲嗣

スライド２

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

先ず数学教育の歴史を振り返りましょう

数学教育の現代化（1950年代前半アメリカで論議）
学習指導要領（1969年告示，1972年実施）に導入
学力上位の生徒には有効、1970年代中庸から「落ちこぼれ」の散在

（根底にある基本的な考え方）全ての子どもに確かな学力を保障する

より強くなる教師の思い

問題解決の1つとして，　学習評価　　**相対評価**　→　**絶対評価へと推移**

1981年改訂に併せて、学習指導要録の改訂がなされ、
到達度評価としての「**観点別学習状況評価**」が導入された。

研究指定校を定め、到達度目標，到達度規準，評価方法の研究が開始された。

スライド３

アカデミック・セントラル主催ウェビナー

東海国立大学機構における高大接続・高大連携
ー大学のあるべき姿の実現に向けてー

2020年11月 4日［水］11:30–12:30
開催方法　：　Zoomウェビナー

事前申込　参加無料　対象：東海国立大学機構教職員　定員：500名

主催：東海国立大学機構 教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）
共催：岐阜大学 教育推進・学生支援機構 アドミッションセンター
　　名古屋大学 教育基盤連携本部

昨今、将来の国内外の方向性を視野に入れ、大学のあるべき姿を大学自身が考えることが求められています。その一環として、日本の将来を託せる学生を迎え育成するため、高大接続・高大連携をさらに充実することが必要とされています。
そこで、アカデミック・セントラル高大接続連携部門では、高大接続・高大連携、及びこれらに深く関わる入試広報や入試等について、岐阜大学、名古屋大学の現状を整理し、それぞれの大学の特性を発揮するための今後の在り方を検討するウェビナーを企画しました。文部科学省及び岐阜大学、名古屋大学の両大学から話題提供していただき、東海国立大学機構としての今後の展望を描くことを目的とします。

講師　　高橋　浩太朗（たかはし・こうたろう）
　　文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室　室長補佐

　　永野　拓矢（ながの・たくや）
　　名古屋大学 教育基盤連携本部 アドミッション部門　准教授

　　清島　絵利子（きよしま・えりこ）
　　岐阜大学 教育推進・学生支援機構 アドミッション・センター　准教授

コーディネーター
　　岐阜大学 教育推進・学生支援機構 アドミッション・センター長　　綿縄　守
　　名古屋大学 教育基盤連携本部 アドミッション部門長　　石井　秀宗

申込方法　下記リンクよりご登録ください。
　　https://zoom.us/webinar/register/WN_Yv3b7eudReWRR9h9HG-47Q
　　なお、接続人数は最大500名（先着順）となっております。

お問合せ　東海国立大学機構 教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）
　　TEL：052-789-2161（平日9時－17時）　メール：nuga@adm.nagoya-u.ac.jp

プログラム

11:30
開会挨拶
東海国立大学機構 教育基盤統括本部長
藤巻　朗

11:35–11:50
「高大接続・高大連携の将来について」
文部科学省 高等教育局 大学振興課
高橋　浩太朗

11:50–12:16
「高大接続・高大連携としての入試広報
ー名古屋大学における活動ー」
名古屋大学 教育基盤連携本部 准教授
永野　拓矢

「地域の中核拠点大学の使命を達成するための岐阜大学における高大接続・高大連携・入試の現状」
岐阜大学 教育推進・学生支援機構 准教授
清島　絵利子

12:16－12:21
質疑応答

12:21
総評
名古屋大学副総長
教育基盤連携本部 副本部長
佐久間　淳一

岐阜大学副学長
教育推進・学生支援機構長
福井　博一

12:25
閉会挨拶
東海国立大学機構 理事
杉山　誠

スライド４

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

1990年代、**新しい学力観**　**知識・理解**　→　**関心・態度を重視**
↓やがて
生きる力を主張
各観点ごとにどのくらい本人に力がついたかを重視するようになった。

現実は

全員に理解させる最低基準の内容である（学習指導要領の一般的な見解）
状況下では、評定はＡや◎が付くのが普通であり、
最低のＣや△が付けてしまうと、教師の指導力不足を指摘される。

一方、優秀な生徒の評定でも、最低基準は超えているという
判断しかできないという曖昧さがどうしても残る。

絶対評価は、最高基準下と最低基準下では持つ意味が異なる。

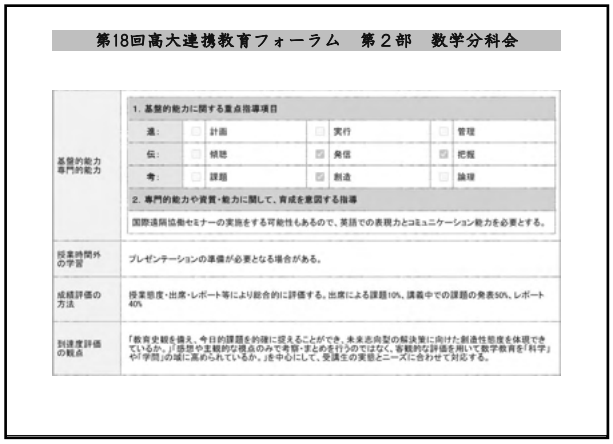
スライド５

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

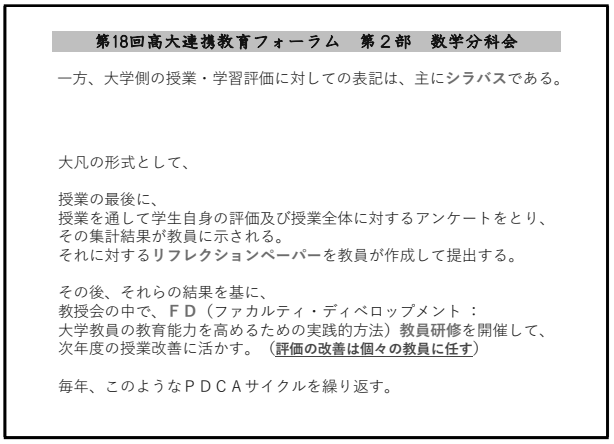
スライド6

スライド7

スライド8

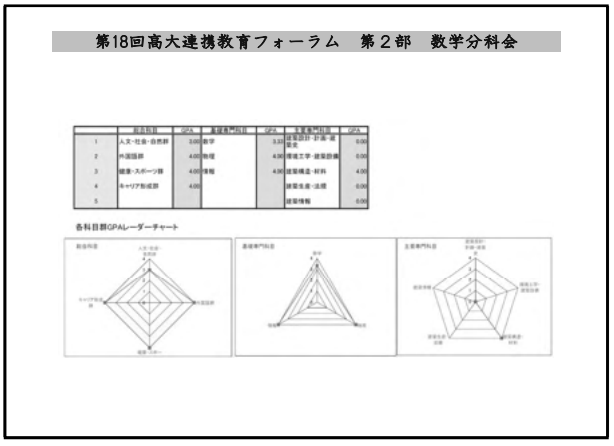


スライド9



スライド10

スライド11



スライド 12

スライド 13

「アクティブラーニングを始める１０のコツ」　小林昭文

1　モデルを見よう，体験しよう。まねできるヒントをつかもう。
　－　どの「流派」でもＯＫ，あれこれ見てみよう　－
2　理論学習をしよう。社会学的，歴史的意義を重視して，　　数学的活動
　－　役に立つのは組織開発，人材開発，学習理論など　－
3　小さなチャレンジから始めよう。ちょっとやって反応を見る。
　－　「１分間，隣の人と話し合って」だけでも効果あり　－
4　何かやったら生徒の反応を聞こう。できれば生徒にシェアリング。
　－　生徒の声はリフレクションのきっかけ，勇気の源，アイデアの泉　－
5　行き詰まったら，中断の準備をしよう。失敗はつきもの。
　－　授業の途中でも，「やめます」と言える準備と覚悟を　－
6　毎日できる程度の授業準備をしましょう。労力と成果のバランスを大切に
　－　手抜きをする，生徒にやらせる，ＰＣ等を活用するなど　－
7　一般解はどうでもいい。目の前の生徒たちにだけ役立てば充分
　－　「この生徒たちだけのため」の工夫こそが一般解のヒント　－
8　校内に仲間をつくろう。授業を見せ合うだけでも「大きなパワー」
　－　２，３人からでｏｋ。教科・学年だったらすごいこと　－
9　校外に仲間をつくろう。校外の仲間を呼ぼう、行こう。
　－　見に行くことは支援。来てもらえば内部活性化　－
10　教科・科目の壁、校種、地域等々の壁を乗り越えよう！
　－　壁を超えるごとに世界が広がり、アイデアが湧きます　－

スライド 14

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

本日のテーマ『**数学的な見方・考え方**』について

子ども達に「何故数学を学ぶのか？」という問いかけにおいて、

「どう考えたら良いだろうか」
「どこから手をつけて良いだろうか」
「何を手がかりに考えたら良いだろうか」
「どんな考え方が使えるだろうか」

と考えるとき、「数学的な見方・考え方、発想、アイデア、態度」が重要となり、これらは我々の日常生活の中のあらゆる場面で使う考え方なのである。**我々は子ども達に伝える責務がある。**

数学的な見方・考え方とは少々異なるが、
例えば、素敵な異性と出会い、「もっとお近づきになりたいな」と思ったときに、
「誕生日に花を贈るのがいいかな？」「携帯電話の番号を聞いてみようかな？」
「いっそ、告白してしまおうかな？」など、様々な方法を考えてみることがあります。
すなわち、どのような手がかりで、どのように思いを伝えていこうかという方法を考え
それらが上手くいった場合には次にどうする、上手くいかなかった場合には、
この手で…、という発想やアイデア、手筋を考える筈です。

ある種の問題を解決する場面に遭遇したときに、「何故？」「どうして？」を解決していく発想や方法、考え方は同様であろう。

スライド 15

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

塔南高校の吉田和馬先生のような教師独自の評価の取組を、
有用な教育情報のデータを活用することによって、
「授業」と「評価」を一体にした改善を、
もっと自在に教師毎で実現可能とならないのだろうか。

2020年9月15日

国立教育政策研究所
令和2年度教育研究公開シンポジウム
高度情報技術の進展に応じた教育革新
～「学習評価」の充実による教育システムの再構築：
みんなで創る「評価の三角形」～

スライド 16

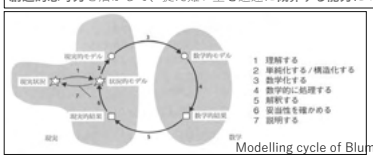
第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

テーマ：入試（大学改革）

どのようにして評価するか、
能力を妥当なテストで測ることができるか、
そのテスト開発にも結びつく

評価の仕組みと測定するテスト開発研究（一例紹介）

問題解決学習の1つ、「数学的モデリング」の日独協働研究において、21世紀型スキルとして「フェルミ推定」に着目。
創造的思考力を活かして、捉え難い量を迅速に概算する能力について研究



Modelling cycle of Blum and Leiß(2005)

スライド 17

第18回高大連携教育フォーラム　第２部　数学分科会

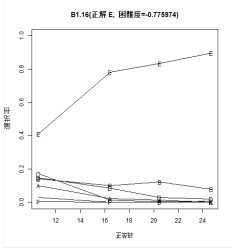
項目反応理論（ＩＲＴ）によって、良問と判定した評価問題
－創造的思考力（フェルミ推定）－

GPS-Academic

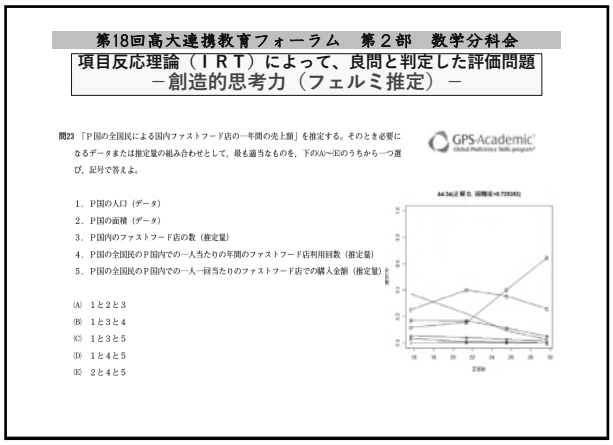
「ベルリン市民のガソリン消費量は，１年間でどのくらいになるか」を，「ガソリン消費量は，市内で所有されている自動車の台数に比例する」と仮定して推定する。そのとき必要になるデータまたは推定量の組み合わせとして，最も適当なものを，下の(A)～(E)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

1．ベルリン市内の人口（データ）
2．ベルリン市内の世帯数（データ）
3．１世帯あたりの人数（推定量）
4．１世帯あたりの自動車保有数（推定量）
5．自動車１台あたりのガソリン消費量（推定量）

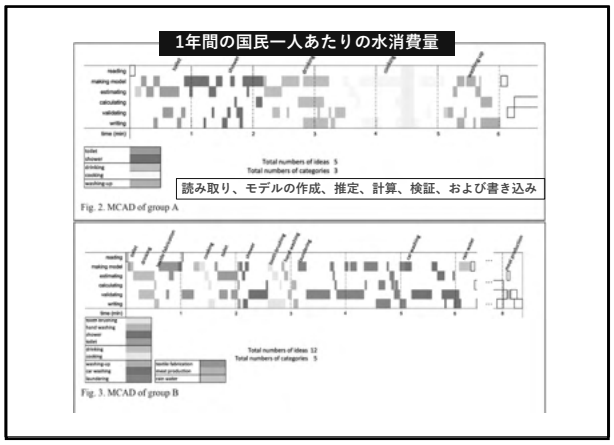
(A)　1と3
(B)　2と4
(C)　3と5
(D)　1と2と4
(E)　2と4と5



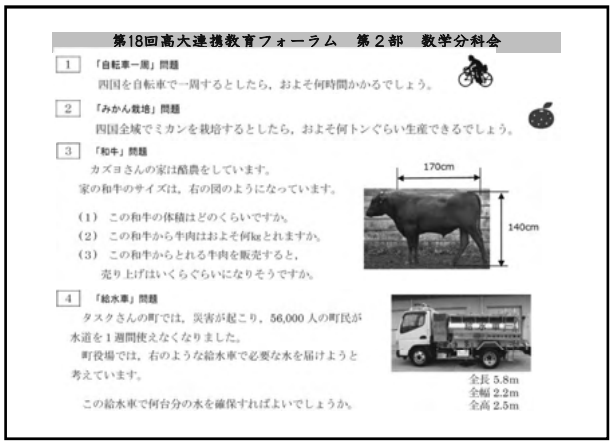
スライド 18



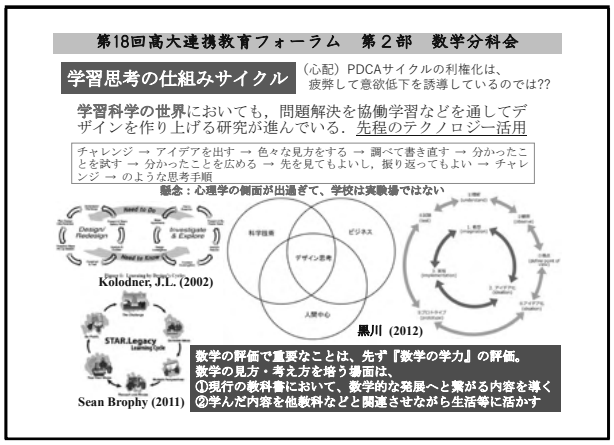
スライド 19



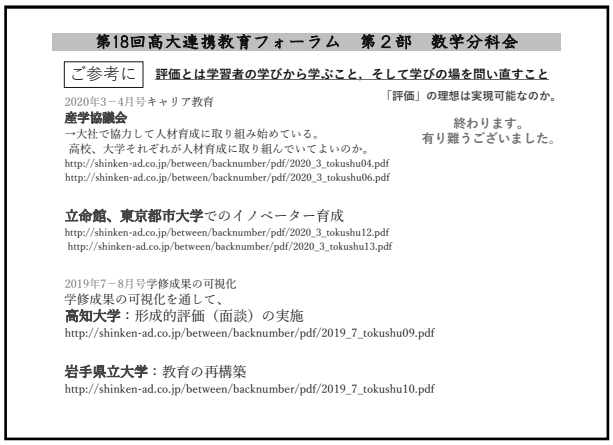
スライド 20



スライド 21



スライド 22



スライド1

或る高校教員の実践の変遷

見方・考え方の顕在化としての数学的活動を
どう捉えるか リフレクションを焦点に

2020.12.5 京都市立塔南高等学校 吉田和馬

スライド2

自己紹介

氏名：吉田和馬

勤務歴：
2015～2018　京都市立西京高校
2019～　京都市立塔南高校(現任)

スライド3

報告の主題

どのように学ぶか
主体的・対話的で深い学びの視点に立ち授業を改善していく

↓

学習指導要領における数学科の目標
数学的な見方・考え方を働かせ，数学的活動を通して，数学的に考える資質・能力を次の通り育成することを目指す．
（以下省略）

スライド4

報告の主題

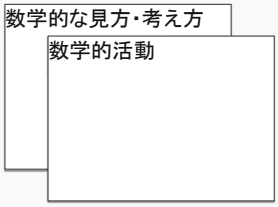
数学的な見方・考え方とは
「事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着目してその特徴や本質を捉えること」(見方)
「目的に応じて数，式，図，表，グラフ等を活用しつつ，論理的に考え，問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能を関連付けながら，統合的・発展的に考えたり，体系的に考えたりすること」(考え方)

数学的活動とは
「事象を数理的に捉え，数学の問題を見いだし，問題を自立的，協働的に解決する過程を遂行すること」

※ 高等学校指導要領(平成30年告示)解説 数学編 理数編 23-26p

スライド5

報告の主題

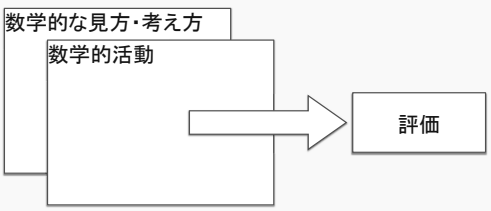


「数学的な見方・考え方は問題を解決する中で数学的活動として観察されるものである」※
（数学的な見方・考え方の顕在化としての数学的活動）

※岩崎秀樹，溝口達也．「新しい数学教育の理論と実践」．ミネルヴァ書房．2019．45p

スライド6

報告の主題



パフォーマンス評価，ポートフォリオ評価，チェックテスト，リフレクション(振り返り)によって捉える

スライド 7

報告の主題

リフレクション(振り返り)

・自己の学習の過程を振り返って次につなげる
・メタ認知能力の育成
・形成的評価に用いる

高等学校の数学教育において，見方・考え方を捉えることができるリフレクションを模索したい

スライド 8

第1期

タイミング：単元に1～2回のグループ演習毎
内容：記述式

スライド 9

第1期

確認テスト

1 0000 から 9999 までの番号のうちで，次のような番号は何個あるか。
(1) 0101，0033 のように，同じ数字を 2 個ずつ含むもの
(2) 1248 のように，異なる数字が左から小さい順に並んでいるもの

スライド 10

第1期

◎ふり返り
1. 学習態度の目標(しゃべる、質問する、説明する、動く、チームで協力する、チームに貢献する、全員で100点をとる)に沿って行動できましたか？それによって気づいたことは何ですか？

2. 今回の学習内容について重要なポイント、つまづきのポイントは何だと思いますか？

スライド 11

第1期

結果
「○○が難しかった」
「○○できた!」
「○○を解くときは××する」 ……等

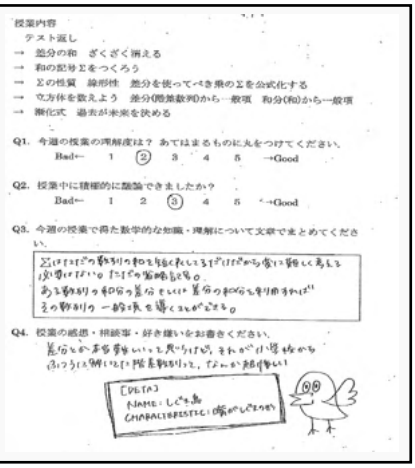
感想の域を出ないリフレクションが多い

→リフレクションを書く際に生徒が思考するような仕掛けが必要

スライド 12

第2期

タイミング：毎週&演習毎
内容：5段階評価&記述式



スライド 13

第2期

Q3. 今週の授業で得た数学的な知識・理解について文章でまとめてください.

Σはただの数列の和を短く表してるだけだから変に難しく考える必要はない。ただの省略記号。
ある数列の和分の差分もしくは差分の和分を利用すれば
その数列の一般項を導くことができる。

Q3. 今週の授業で得た数学的な知識・理解について文章でまとめてください.（三行以上）

平面上の点を矢印、数字のペアの両方でとらえることによって、考え方のはばが広がり、知りたい対象に応じて、解き方を変えれるようになった

スライド 14

第2期

項目
- 理解度はどの程度でしたか？
- 気になった問題は？理由とともに教えてください
- 演習全体の感想
- 前回の演習時に比べ，あなた自身に起きた数学学習についての変化を教えてください。
- 演習をより良いものにするにはどうしたらよいと思いますか？

1. 空間ベクトルの理解度はどれくらいですか？最もあてはまると思う数字に○をしてください。
Bad← 1・2 ③ 4・5 →Good

2. 空間ベクトルの演習で特に気になった問題は何番ですか？理由とともにお答えください。
番号：半
理由：ねじれの位置にある2直線の距離を求めることができるのに感動したから。

3. 空間ベクトルの演習全体はどうでしたか？自由にお書きください。
自分で解いてみて分からなかった問題が、
理当の人の解説を聞くと分かったのでよかった。
演習でしれば間をじっくり時間をかけて解くことがないのでよかった。

4. 前回の解説会に比べて，あなた自身に起きた数学学習についての変化を教えてください。
前回の平面ベクトルの演習で使った知識を応用して解けるかどうか考えた。

5. 解説会用の演習プリントは解説会開始の何日前に配るとちょうど良いと思いますか？最もあてはまるものに○を付けてください。
前日　2日前　3日前　4日前　5日前　6日前　一週間前　それ以上（　）

6. 解説会をより意義深い時間にするには，どうすれば良いと思いますか？要望・自成等自由にお書きください。
今問自分で解いてみる。

自由記述欄
入試問題を自分で解けたときはうれしい☺

Thank you

スライド 15

第2期

6. 解説会をより意義深い時間にするには，どうすれば良いと思いますか？要望・自成等自由にお書きください。

すべての問題を自分で解いた上でのぞみたかった。
プリント配られてから解説会までにせめて週末をはさんでほしい…!!

4. 前回の解説会に比べて，あなた自身に起きた数学学習についての変化を教えてください。

こういうのが分かりたいっていうゴールを決めて，
解き方を考えながら計算するようになった。

スライド 16

第2期

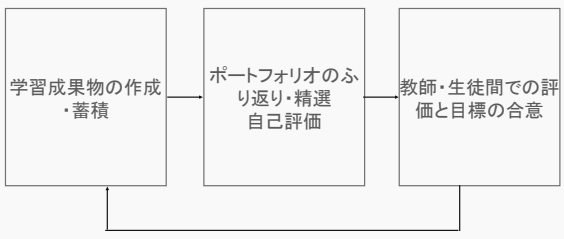
結果
- 5段階の自己評価を次回の授業内容にフィードバックできた（形成的評価）
- リフレクションの質問方法や順番の工夫によって，より数学的な見方・考え方を捉えた記述ができている
- 成長を実感することで生徒の授業に対する満足度が高まった
- 生徒の学習に対する姿勢に変化がみられた
- 「○○ができた」「○○が難しい」などの瑣末なコメントが撲滅できたわけではない

→学習過程をふり返り，差を認識することが重要

スライド 17

第3期

タイミング：学期毎
内容：ポートフォリオを生徒が自ら編集し，ふり返りの内容についてプレゼンテーション



スライド 18

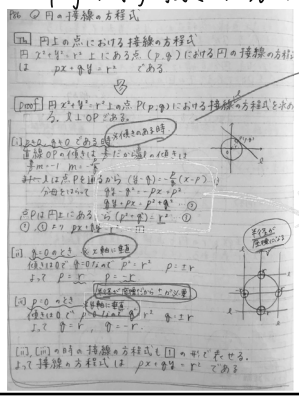
第3期

自己評価シート記入項目

- 今学期は教科書再構成を何ページ執筆しましたか　←事実確認
- 今学期上手く理解できたと思う項目ベスト2を挙げ，数学の学び手として，その項目を理解する上で何をしたか，理解に役立った作業や，読解や記述で気をつけたこと等の視点で書きなさい　←優先順位づけとエピソード記述
- 今学期，数学の学び手をしてどう成長しましたか　←自己評価
- 証明を読むときには一番重要な部分を探すことが何故重要なのか書きなさい
- 数学を学習する上で，例を挙げる行為が何故重要なのか書きなさい　←スキルチェック
- 次の学期で数学の学び手として達成したい目標を書きなさい　←目標設定

スライド 19

項目名２（　円の接線の方程式　）

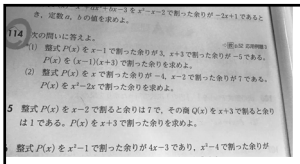


・教科書に書かれていないわかりにくい所を書く．

・$\begin{bmatrix} A=B \\ B=C \end{bmatrix}$ と書かれていた時、

$\begin{bmatrix} A=B \\ B=C \end{bmatrix}$ みたいな感じで色わけする．

スライド 20



まず何をすれば．良いかさえ分からなかった

↓

自問自答．

・今．何をしたいのか．

・知っている情報で．何が出せるのか

余りがほしい ← P(x)にとる．を入れた式がつくれる．

↳ P(1)とP(3)のときの余りから何か出せないか

スライド 21

◎今学期のミニレクチャーの内容で，数学の学び手として重要だと思う項目ベスト２を挙げ，重要だと思う理由を，その項目の使いどころ，自分の見方・考え方にどのような影響を与えたかなどの視点から箇条書しなさい．

項目名１（ 定義をちゃんと読む ）

ベクトルでそもそもこれ何やけ？となることが多かった

地味に 重用なことがかがんがち

指数・対数の a の範囲とか

項目名２（ 複数のテキストを読もう ）

内積の性質

$\vec{a}\cdot\vec{a} = a_1^2 + a_2^2 = (\sqrt{a_1^2+a_2^2})^2 = |\vec{a}|^2$

↳ $|\vec{a}||\vec{a}|\cos 0° = |\vec{a}|^2$

スライド 22

defからつまるところこーか！みたいな独自では出けど

そのような考え方を多用　四則演算にといてるんだなー

一次独立、一次結合

内積，余弦定理，物理

一つ一つの def を 細かく　0°と90°とか

↳ 空間ベクトルになったときにメチャ助かる

テストおわたやったけど

スライド 23

第3期

結果

・具体的な学習過程の記録の存在によって，より数学的な見方・考え方を捉えたリフレクションになった

・生徒一人一人と伴走する形式だったので，コスト大（この講座は10人程度だったのでできた）

・生徒と言葉を共有できた

・ペーパーテストの成績も悪くない．（ただし，普通科系専門学科の理系生徒だったので，もともとベーシックな学力はあった）

→40人規模で，学力もバラツキがある集団で安定的に実施するには，もう少しコンパクトな形がよい

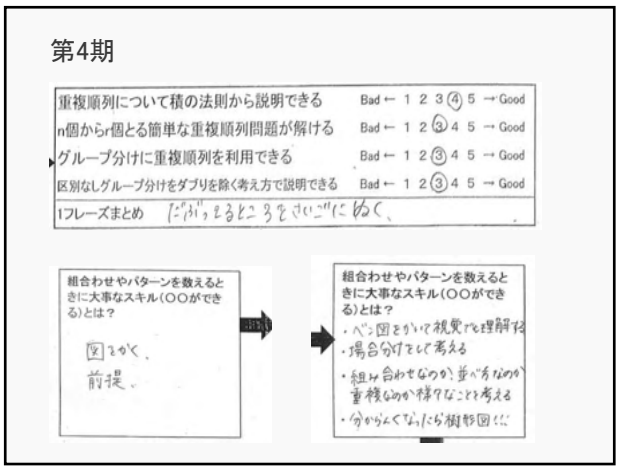
スライド 24

第4期

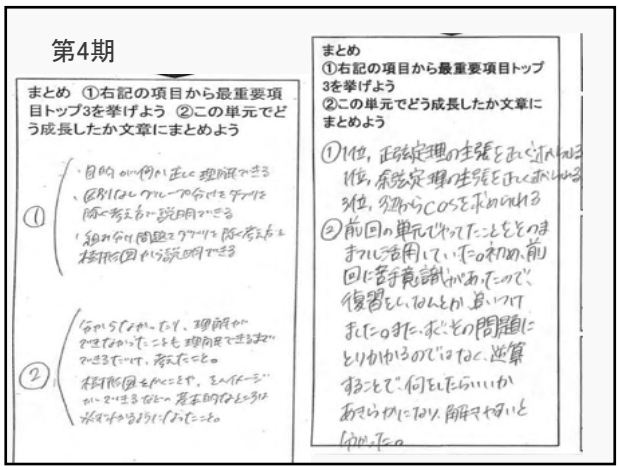
タイミング：毎日&単元毎

内容：5段階評価&記述式

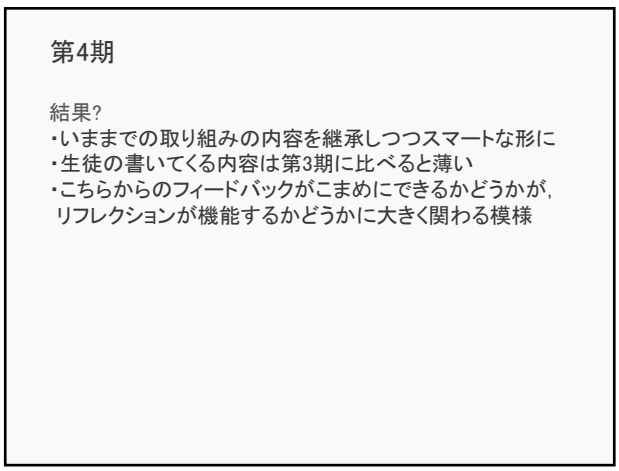
スライド 25



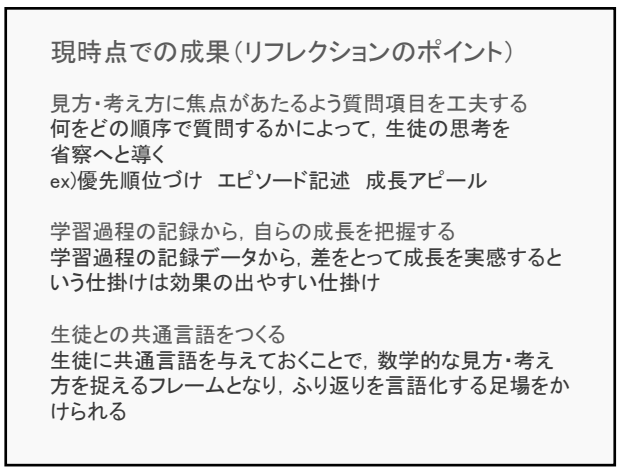
スライド 26



スライド 27



スライド 28



スライド 29

第４分科会【探　究】

学習者自らの問いづくりによる探究学習のデザインと実践

報告者▸　西山　周平（西山企画代表）
報告者▸　平野貴美枝（FF ENGLISH 代表／NPO 法人ハテナソン共創ラボ理事）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 佐藤　賢一（京都産業大学生命科学部教授／NPO 法人ハテナソン共創ラボ代表理事）

学習者自らが問いづくりを行うＱＦＴ（Question Formulation Technique）のグループワーク体験、ＱＦＴを活用した探究活動の設計と運営についての京都府内外の事例報告２件、および体験ワークと事例報告に関する質疑応答や意見交換を行う。ＱＦＴは探究を含むあらゆる教科学習において、学習者と教師の双方の学びをより深く豊かにする可能性を秘めている。ぜひ、共に学びましょう。

概　略

まずは言葉の定義を共有した。探究とは「知識の論証」「疑問の解消」「問題の解決」などの目的がある思考過程のことである。その上で、問いづくり手法ＱＦＴがあらゆる教科や総合学習での学びにおいて探究のツールとして有効ではないか、という仮説を体験的に検証し、参加者がそれぞれの文脈のもとでの利活用をイメージすることが本分科会のミッションであることを共有した。本分科会はその後、参加者同士によるおしゃべりでウォーミングアップを行い、佐藤氏がファシリテーター役となってのＱＦＴ体験とその有効性についてのメタ分析を前半部に、西山・平野の両氏によるＱＦＴを活用した実践事例と問いづくりに対する思い、考えの発表を後半部に、それぞれ行った。

全体討論の内容

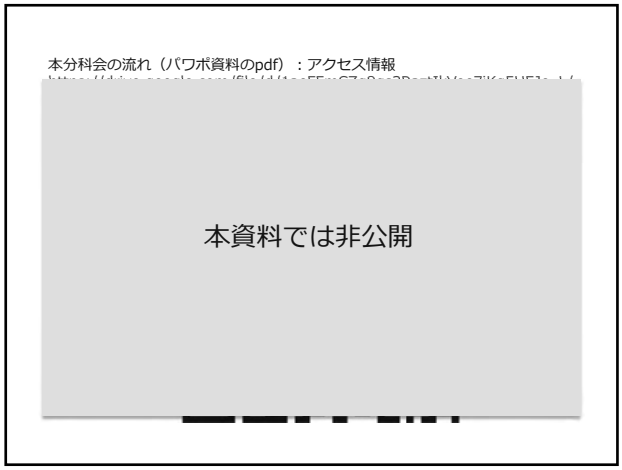
「学習者自らによる問いづくりは、なぜ重要なのでしょうか？」という論点に対して、参加者から次のような回答が得られた。：自分の問いを持つことが学びを創るから。／学習の主体が指導者ではなく学習者だから。／ＡＩが発達していく中で「自分の課題を自分で見つける」機会は減少していくと感じています。だからこそ「問いづくり」を経験することは、より重要になっていくと感じています。／問いづくり自体が自ら考えることだから。／発散・収束思考を繰り返すことで、メタ的な思考につながる。／他者との共創により「気付き」が得られる。／自分自身で学ぶ意欲が持て、自ら学ぶことが可能になってくるからでしょうか。／効果的な学習にするため。そうでなければ意味がないから。／学び続ける存在になるため、当事者意識を持つため。／関心を高めて学習意欲を向上させるのに需要だと思います。楽しんで学ぶ姿勢がつくれると思います。／学生が問いを立てることができるようになるためには、学習者自らも探究の姿勢を常に持って

いる必要があると思うから。／効果的な学習にするため。そうでなければ意味がないから。／学習者が主体的に取り組むことができるから、取り組みからの学びがより深まると思います。

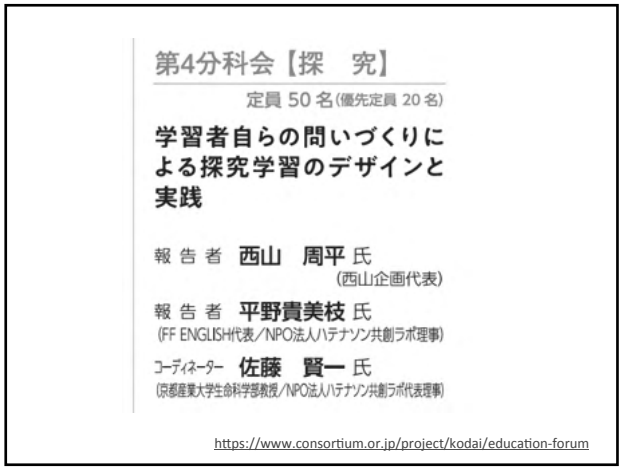
到達点と今後の課題

問いづくりの手法を実体験してもらえたことで、同手法に対して主体的な関心（例：自分であればどう使うかに関心を持ち、考え始める）を引き起こすことには一定の成果を収めることができた。参加者自身による具体的な取り組みの設計と実践のサポート、あるいは、参加者自身による実践事例を共有し、改善および発展の方策を検討するなどの時間を取ることがフォローアップとして望ましい（参加者からの要望にも示されていた）。

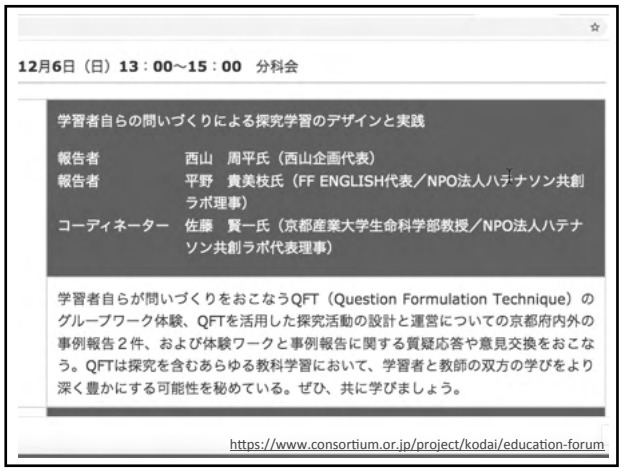
スライド 1



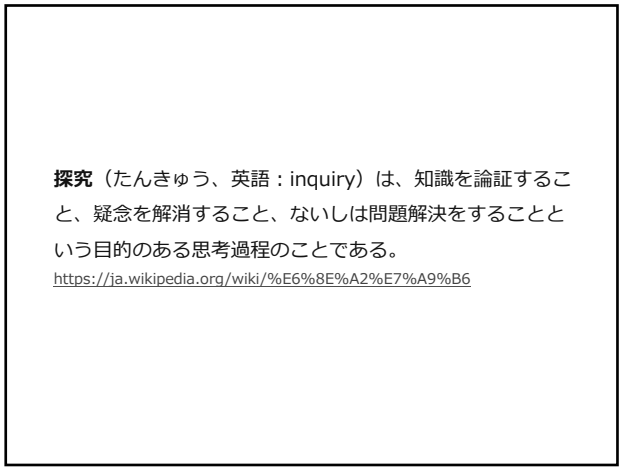
スライド 2



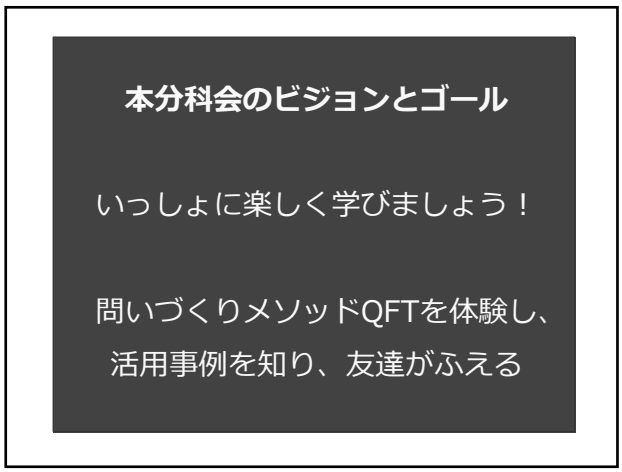
スライド 3



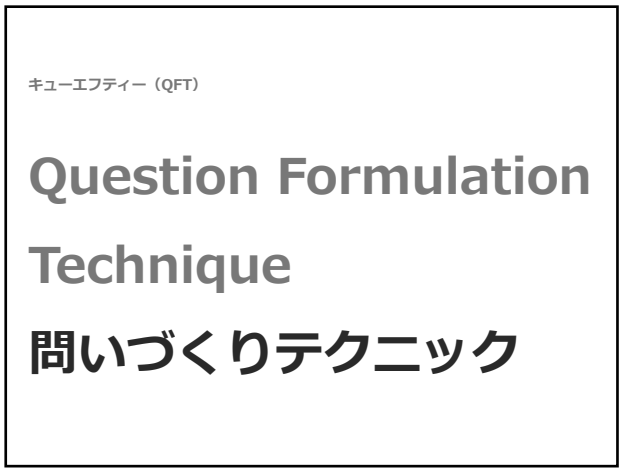
スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド 7

本分科会の流れ

1．はじめに＋ウォーミングアップ
2．オンラインQFT 体験ワーク
3．事例発表１：西山さん
4．事例発表２：平野さん
5．おわりに

スライド 8

① ウォーミングアップ
https://docs.google.com/spreadsheets/d/

本資料では非公開

スライド 9

スライド 10

キューエフティー（QFT）

Question Formulation Technique

問いづくりテクニック

スライド 11

本分科会の流れ

1．はじめに＋ウォーミングアップ
2．オンラインQFT 体験ワーク
3．事例発表１：西山さん
4．事例発表２：平野さん
5．おわりに

スライド 12

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る

スライド 13

「問いの焦点」の共有

スライド 14

27年間凍結されていた受精卵、
無事赤ちゃんに　最長記録　2020年12月3日

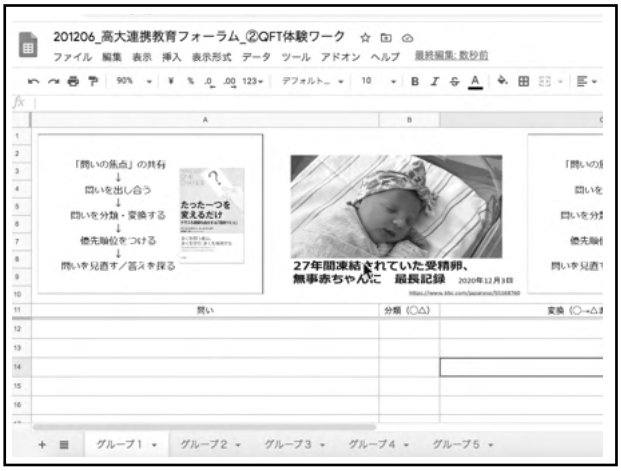
https://www.bbc.com/japanese/55168760

スライド 15

② QFT体験ワーク
https://docs.google.com/spreadsheets/d/

本資料では非公開

スライド 16



スライド 17

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う

問い出しのルール
① 全員、できるだけたくさん問いを出す。
② 説明、話し合い、評価、回答等は禁止。
③ 発言者は意見や主張を疑問文に直す。
④ 記録係は問いを発言のとおりに書く。

スライド 18

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する

① 閉じた問いに△、開いた問いに○をつける。
② 閉じた問いと開いた問いの特徴を話し合う。
③ 問いをつくり直して、開閉を変換する。

スライド 19

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける

① 大事な問いを最大３つ選び、清書する。
② その理由とともに全体共有する。

スライド 20

グループ１、４、７、１０
ジャーナリストに尋ねたい３つのQ

グループ２、５、８、１１
医療従事者に尋ねたい３つのQ

グループ３、６、９、１２
生命倫理の専門家に尋ねたい３つのQ

スライド 21

最後にもう一つ、問いづくり

この赤ちゃんが記事を読み、問いを立てるとしたら、どのような問いを立てるでしょう？

スライド 22

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る

スライド 23

＊ ハテナソン ＊

“はてな（？）”とマラソンを組み合わせたオリジナルの造語です。あとで説明する問いづくり手法QFTを知ったことをキッカケにつくりました。一人一人の発想が尊重される民主的ルールのもとで行われる問いづくり、および問いづくりの学び場のことを意味します。類似の用語にアイデアソン、ハッカソンがあります。

スライド 24

？＋💡＝FUTURE

ハテナソン
アイデアソン
ハッカソン

スライド 25

? + 💡 = FUTURE

問い、課題

仮説、解決策

実行、検証

スライド 26

本分科会の流れ

1．はじめに＋ウォーミングアップ
2．オンラインQFT 体験ワーク
3．事例発表１：西山さん
4．事例発表２：平野さん
5．おわりに

スライド 27

高等教育フォーラム　Vol. 10, 2020

＜研究ノート＞

ハテナソンによる京都府立桂高等学校の「桂リサーチプロジェクト」での問いづくりの活性化に向けた実践

西山　周平[1]・佐藤　賢一[2,3]

本論文は「学び手みずからが問いを立てる学び，問いづくりを通して学び合う場」をコンセプトにもつハテナソンが，中等教育の探究活動を推進するための新たな手法として有効であることを，桂高等学校の学校設定科目「桂リサーチプロジェクト（KRP）」における実践記録と検証結果をもとに紹介する。KPR では，基本的な資質・能力を育成した上で，生徒が自ら課題を設定して探究する活動をおこなうこととしている。そこで 2019 年度 KPR においては，5 月に第 1 回ハテナソン授業を実施し，KPR の生徒（1 年生 71 名）と担当教員（8 名）の双方が問いづくりの具体的な手法を学習した。そして 7 月には新たに開発した「問いづくりシート」を用いて，第 2 回ハテナソン授業を実施した。これら 2 回の取り組みを観察ならびに記録し，その学習・教育効果について質問紙調査等をもとに検証した結果，学び手自身による問いづくりが探究活動において重要かつ有効であることを体験的に学ぶ機会として，ハテナソン授業は有効であることが明らかとなった。中等教育における探究学習へのハテナソン導入の意義，そして応用可能性と発展性を考察し，提案を行いたい。

キーワード：ハテナソン、QFT、中等教育、桂リサーチプロジェクト、探究学習

スライド 28

本分科会の流れ

1．はじめに＋ウォーミングアップ
2．オンラインQFT 体験ワーク
3．事例発表１：西山さん
4．事例発表２：平野さん
5．おわりに

スライド 29

Hatenathon　NPO法人 ハテナソン共創ラボ

What's New

ハテナソン 国際フォーラム 2019 電子ジャーナル
国際フォーラム2019の全てが記録されています。

ハテナソン 国際フォーラム 2019 報告動画
2019年3月に行われたフォーラムとワークショップの様子がYT記のリンク

はじめての ファシリテーション
ファシリテーションの応用手法の一つとしてハテナソンを紹介しています。ご購入は以下のリンクから。

事務局メンバー

佐藤賢一
2016年2月初旬に「たった一つを変えるだけ」を読み、世界が一変しました。それからというもの、QFTを中核とする質問づくりの学び（Question-driven Learning）の場、ハテナソンをつくることが三度の食事（よりも、と言いたいところであるが、しかし）と珈琲とチーズとチョコと・・・諸々の好きなものと同じくらい好きになりました。ぜひご一緒に。

木村成介
たまたま知ったQFTを、たまたま自分の授業で実践してみたところ、その有用性に驚愕を受けました。大学や高校で実践を積み重ねていきながら、QFTの可能性を探っていきたいと思っています。
副理事長

平野貴美枝
生徒が自ら疑問を持ち、主体的に次々と質問をする、そんな生き生きした授業を観察していたら「たった一つを変えるだけ」に出会いました。縁が繋がってハテナソン共創ラボに関わることになりました。生徒の思考を刺激する質問の視点さえできれば、シンプルなルールだけで生徒たちからどんどん質問が生まれます。
理事

スライド 30

GoogleやMicrosoftでも使われる民主的な問いづくりのメソッドQFT

じっくりびっくり問いづくり

-たった一つを変えるだけでみんな自分で考える-

ＮＰＯ法人　ハテナソン共創ラボ

日 時：9月 17日（木）20:30～23:00【開場 20:20】
場 所：オンライン Zoom
定 員：50名（最少催行人数：6名）
参加費：一般：1000円 会員：無料 ファシリテータ講座参加者：無料

イベントは 終了 です
GoogleやMicrosoftでも使われる民主的な問いづくりのメソッド QFT 「じっくりびっくり問いづくり」

詳細
このオンラインセミナーは、ハーバードの研究所で開発され、世界中で何十万人もの教育者が活用している問いづくりの手法"Question Formulation Technique"(質問づくり)を軸に、ハテナソンを体験的に学び、今後のご自身の活動(教育、場づくり、医療、PTA、政治参加などに活かしてもらおうというものです。

2020/09/17 (木)
20:30 - 23:00 JST
カレンダーに追加

会場　オンライン

スライド 31

本分科会の流れ

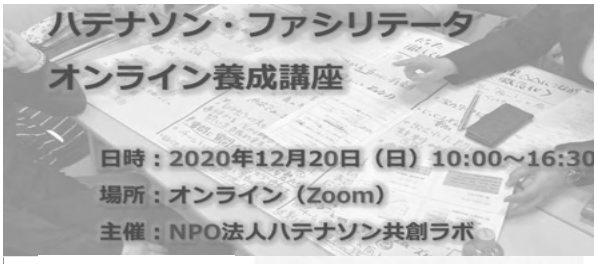
1．はじめに＋ウォーミングアップ
2．オンラインQFT 体験ワーク
3．事例発表１：西山さん
4．事例発表２：平野さん
5．おわりに

スライド 32

ハテナソン共創ラボ　公式ホームページ

https://peraichi.com/landing_pages/view/hatenathon

スライド 33



問いづくり授業ハテナソンを
・体験し、効果検証する
・企画と設計の素案をつくる
・ファシリテーションする
・利活用するイメージをもつ

スライド 34

振り返りアンケートにご協力ください

本資料では非公開

スライド 35

本分科会のビジョンとゴール

いっしょに楽しく学びましょう！

問いづくりメソッドQFTを体験し、
活用事例を知り、友達がふえる

スライド 1

第18回 高大連携教育フォーラム

「外国語教育(英語)」におけるQFTの実践について(実践報告)

2020年12月6日（日）：第2部分科会【2日目】
第4分科会「探究」
学習者自らの問いづくりによる探究学習のデザインと実践
報告者 平野　貴美枝(NPO法人ハテナソン共創ラボ理事)

スライド 2

質問の焦点とは

triggerはアメリカが銃社会なので使えなかった

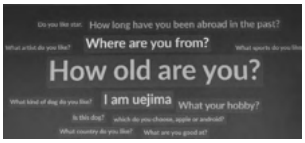
質問をつくり出すための引き金。

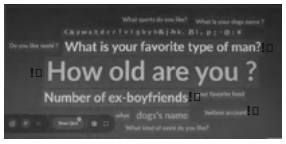
それをきっかけに考えて質問をつくり出せるものであれば、短い文章、あるいは写真や短い動画や表・図などの視聴覚教材など何でもかまわない。

質問の焦点は、思考を喚起するために、従来使っていた「発問」の反対側に位置づけられるものである。

スライド 3

生徒たちが作った問い





sli.do

スライド 4

QFTに関してよくある質問　不安と恐れから…?

作った質問
どうするんですか?

時間が
足りないんですが…

想定してない
質問が出たら?

この場合あの場合は…?
これをする意味は…?

スライド 5

気軽に日常的に使っていい

授業で何しようか困ったときにQFT すればいいよ

全部できなくても質問作れたら
それでいいじゃない

スライド 6

大切にしたいQFTの誕生とフィロソフィー

「問いづくり」(Question Formulation Technique)はアメリカの市民運動(退学防止プログラムにおける保護者 の教育関与)から誕生し、あらゆる人々が民主的な意思決定に参加できる仕組みです(マイクロデモクラシー)。

Microdemocrary

日常的な場面で自分に直接影響するような
意思決定に人々が参加すること

スライド 7

質問をするためのスキルはなぜ必要か

無知から知への転換
よりよい答えにたどり着く
主体性と当事者意識を持たせる
教室での探求に
大変な仕事の中にちょっとした喜びを見つけるために

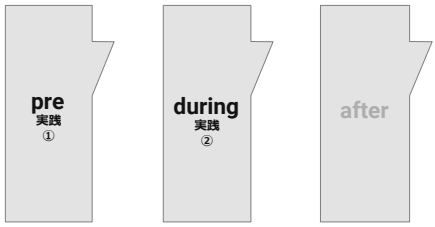
スライド 8

外国語活動における4技能のどこにQFTを活用するか

話す　聴く
書く　読む
実践事例②　実践事例①

スライド 9

授業活動のどの部分でQFTを活用するか



スライド 10

リーディングの導入におけるQFTの活用事例 実践①

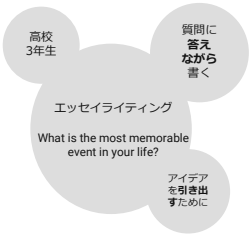
スライド 11

問いの焦点

Blood types determine our personality
(血液型で性格が決まる)

スライド 12

リーディングの導入におけるQFTの活用事例 実践②



スライド 13

アクションプラン

生徒が作った質問に対して答えを探しながら読む

「あ、知りたかったことが書いてある」

スライド 14

問いは学びを促進する

Curiosity helps learning and memory

(好奇心は学びと記憶に役立つ)

スライド 15

問いの焦点

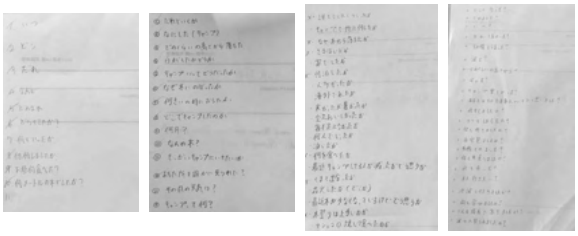
I went camping.

I fell from the tree.

(キャンプに行ったら、木から落ちた)

スライド 16

生徒が作った問い



スライド 17

生徒が作った問い

いつ行った?
どこ行った?
だれと行った?
なんで行った?
どんな木?
どうでしたか?
他何しましたか?
お昼何食べた?
何メートルの木でしたか?
どのくらいの高さだった?
だれといくか?
キャンプに行ってどうだった?
なんの木?

もう一度キャンプに行きたい?
落ちたところ誰かに見られた?
家でしたのか?
何泊した?
人は多かった?
寒かった?
暑かった?
空気美味しかった?
寝不足になった?
その日の天気は?
キャンプって何?
猿はいた?
最近木がなくなっているけどどう思うか?

最近キャンプしている人が減っているがどう思うか?
木登りはうまいのか?
マシュマロ焼いて食べたか?
その後どうなってる?
あなたはその出来事について
どう思いました?
夜空見ましたか?
また行きたい?
何を学びましたか?

スライド 18

アクションプラン

書けなくて困っていた生徒に対して

「これで書けるやん」
「はい...!!」
「(わたしたちももっと書ける...!!)」

スライド 19

いちばん大事なのは「質問の焦点」づくり

じっくりびっくり問いづくり

スライド 20

まとめ

- **QFTは自分が意思決定に関わっていけるようにするための民主主義の練習**
- **QFTはメソッドだが、柔軟性が高い**
- **全部できなくてもいい、質問ができれば十分**
- **考えすぎず気軽に使っていい**
- **競争するものではないので、数がたくさん出なくてもいい**
- **多忙な毎日の中に少しの喜びが訪れる**
- **自分が信じて大事だと思っていることを実践しましょう**

特別分科会①【アドミッション専門人材開発】

第４回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会
（京都会場）

講師▸　立脇　洋介（九州大学アドミッションセンター准教授）
講師▸　植野　美彦（徳島大学高等教育研究センターアドミッション部門教授）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 山本以和子（京都工芸繊維大学工芸科学部教授）

この分科会は、入試担当の大学教職員を主対象として高大接続領域の専門性の高い人材開発を目的とした研修会である。第４回は「入試の評価方法」「書類・面接選考担当者の選抜実施」について取り上げる。なお、この特別分科会は、九州大学次世代大学教育開発センターとの共同開催となる。

概　略

この特別分科会は、大学のまち、京都として、初等・中等教育の教育変化を上手に捉え、これからの時代に即した大学教育展開に乗じた大学入学者選抜の基盤づくりに貢献できる人材育成を目指している。また、このアドミッション分野の専門性は幅広く、一人で包括するのは難しい。同じ分野の異なる領域の専門家と連携し、地域のアドミッション事業の向上が図れるよう、ネットワークを形成することも展望している。

第４回は、新型コロナ感染対策のためリモートにて分科会を開催した。アドミッション・スペシャリストの養成のためのこの講座は、九州大学基幹教育院文部科学省教育関係協働利用拠点事業の協力のもと、同講座と同様のカリキュラムで展開した。

報告者１の立脇氏より「入試の評価方法」として、テスト問題分析、入学後の追跡調査などの入試の検証について説明があった。次に報告者２の植野氏より「書類・面接選考担当者の選抜実施」として、アドミッション・スペシャリストが学内の選考にどのように関与していくのかをテーマとして、アドミッションポリシーの具体的事例とともにそれを利用した書類・面接の選考における評価方法への関わり方についてのレクチャーがあった。

到達点と今後の課題

今回も過去回と引き続き、２人の講師のレクチャーを行い、その後に講義内容および語句等の質疑応答を行った。

受講申込者は 32 名。実際の参加者は 17 名であった。申し込み段階で高校教職員は 12.5%、大学教員は 31.3%、大学職員が 37.5%であった。高校教員は、３名（富山県、兵庫県、京都府）からの申し込みがあった。大学教職員は、加盟校が 36%を占め、北は東京都、南は広島県からの申し込みがあった。府外からの高校・大学関係者の申し込みは 72%であった。実際の参加者は、高

校教職員は５％、大学教員は 17％と少なく、大学職員が 58％と多かった。大学教職員は、加盟校が 41％を占め、府外からの高校・大学関係者の参加者は 52％で、府外からの申込者が当日の参加を見送ったようである。

今回は、実務担当者を中心とした具体的な内容の構成にし、なるべく詳細な説明を行ったが、リモートツールでの実施なので、通信負荷を考慮して討論を実施しなかった。アンケートの回収率も半数以下で判断が難しいが、オープンアンサーでは気付きが多かった意見がもらえているところから、具体的に丁寧に講義した点が評価されたようである。また、アンケート回答者のうち 70％が次年度以降の実施を期待しているところ、2021 年度の大学入試改革後のタイミングでもある次回に向けて、新たな課題への対応知識につながるテーマの企画を検討することが示唆された。

スライド1

第18回高大連携教育フォーラム
特別分科会①「アドミッション専門人材開発」

入試の評価方法

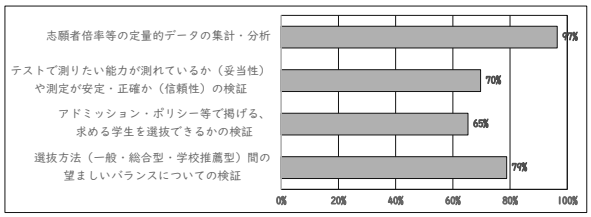
九州大学 立脇洋介

九州大学

スライド2

KYUSHU UNIVERSITY 0.入試の検証の重要性 1

・入試を評価するためには、**入試を検証し、良い点や課題を定期的に評価**することが必要。
・文部科学省も入試の検証を求めており、大半の大学が実施。



選抜の妥当性・信頼性等の状況

※大学入試のあり方に関する検討会議第16回資料。文部科学省が令和2年9月に実施した調査。699大学、2222学部のデータ。

スライド3

KYUSHU UNIVERSITY 0.入試の検証の重要性 2

・しかし、特に個別大学・学部の入試の場合、データの少なさや偏りなどのために、**統計的な方法だけでは限界**がある。
・さらに、**検証結果をどのように実際の入試に反映させるのか**ということも大きな課題。
・入試に関する主要な検証内容と、その方法や限界を解説。
①基本分析
②テスト問題の分析
③入学後データとの関連

スライド4

KYUSHU UNIVERSITY 1.基本分析 3

・**志願者数、倍率、志願者・合格者の属性**は、基本となる分析。
例）性別、現役・浪人、都道府県
・**入試広報の方針**を決める際、重要な分析。
・数年間のデータを比較して傾向を見る必要がある。
隔年現象…倍率が高かった学部は、避けられ翌年に低下
倍率が低かった学部は、人気が出て翌年に上昇
・学部や入試の変更、特別な状況（入試制度変更）などの場合には特に注意深く見る必要がある。
※本年度は入試制度の変更に加えて、入試広報や遠方受験などが例年と大きく異なるため、要注意！

スライド5

KYUSHU UNIVERSITY 2.テスト問題の分析 4

・入試の検証の主要な方法。
・統計的な分析と内容的分析がある。

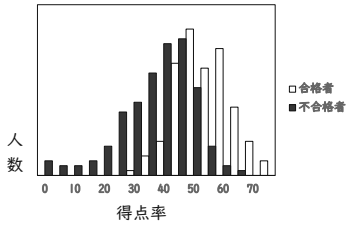
<分析で使われる主な統計量>

	統計量	説明
難易度	総得点の平均 個別問題の正答率	・**5～7割が目安**
	得点分布	・合格者と不合格者別でもよい
信頼性	α係数	・テスト全体の一貫性。**0.7が目安**
	I-T相関	・総得点と個別問題との相関 ・他よりも低い項目を見つける

スライド6

KYUSHU UNIVERSITY 2.テスト問題の分析 5

<分析結果の例 得点分布>



・合格者と不合格者を**うまく判定している。**
・平均得点率は合格者で55%。**不合格者で35%ほど**とやや低い。

スライド7

KYUSHU UNIVERSITY 2. テスト問題の分析 6

<内容的評価>
・**作成者以外の人がテスト問題の内容を評価。**
・評価者…学内の作題OB、高校や塾・予備校関係者
・センター試験は、複数の教科の団体が問題の評価を実施。
・主要大学…赤本や大手の塾や予備校が問題分析を公表。
・高校訪問で問題の評判を聞いたり、県の高校の教科部会からコメントをもらうこともある。
⇒ただし、明確な基準は存在しない

スライド8

KYUSHU UNIVERSITY 2. テスト問題の分析 7

<分析結果の活用方法>
・アメリカの共通試験や英語能力試験のように、問題を非公表として、繰り返し使う場合、統計的分析の結果、悪問を除外。
⇒日本の大学入試では、問題数が少なく、問題が毎年公表されるため、不可能
⇒ I-T相関や正答率などの分析結果と問題へのコメントを問題作成者に渡して、**次年度以降**の問題作成で反映
3月の入試結果を5月頃までにまとめる必要がある

スライド9

KYUSHU UNIVERSITY 2. テスト問題の分析 8

<その他の注意点>
①統計的に望ましいだけでなく、入学後に役立つ問題がよい。
例）多肢選択で問題数が多い⇔論述形式や面接など少ない問題で質を問う
統計的な信頼性では、国語では古典・漢文が優れていて、小説や評論が低い
⇒受験トレーニングが必要な内容と、誰でもそれなりに回答できる内容の違い。
古典・漢文のみ出題した場合、大学教育で支障が出てしまう。
②大学の状況（目的）によって望ましい問題は異なる。
例）医学部のある大学では、4題のうち、1題の難易度をあえて高くする
上位層が他大学へ入学する場合、ボーダー層の能力を識別する問題を多く

⇒事前に見たいポイントを定めて狙い通りか検証したり、前年や他の教科と比べて適切かという観点で評価する方がよい。

スライド10

KYUSHU UNIVERSITY 3. 入学後データとの関連 9

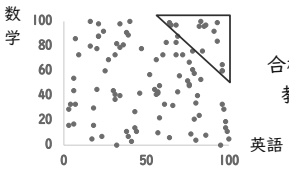
・**入学後の成績**に関して、**入試の成績との関連を検討したり、入試区分ごとの成績を比較したりする。**
・学部の教員などから最も期待される内容であるが、**様々な理由で課題も多い。**

<検証の難しさ>
・大学の成績：**各授業の評価基準**がバラバラ。
・総合や推薦の学生は、専門の授業でのパフォーマンスが期待されるが、**学年が進むほど、入試の効果が薄れる。**
・一部の学部を除いて入学後の進路（目標）がばらばら。

スライド11

KYUSHU UNIVERSITY 3. 入学後データとの関連 10

<検証の難しさ>
・入試区分によっては**人数が非常に少ない**（30以上ほしい）
・**選抜効果**と呼ばれる現象のため、データの歪みが出てくる。
例）不合格者のデータがないため、合格者のみで関連を見る
⇒数学は入学後の成績に関連しないという結果が出ても、80点の人で差がないだけで、0～100点なら差がある可能性。



合格者は合計点が○点以上のため、教科間で負の相関が生じることも。

スライド12

KYUSHU UNIVERSITY 3. 入学後データとの関連 11

<入学後の成績の例>
（初年次）**GPA、英語民間試験**、各種ジェネリックスキル、卒業論文の成績、**医学教養試験**、大学院入試の成績、学内外の表彰…

<対応方法>
・総得点点や入試区分の比較（AOと一般など）、GPAなど**大きな単位で分析する**
⇒各教科や授業の成績は誤差が大きいので、目的が明確な場合に限定する。
例）英語を課している人と課してない人での英語の成績比較
・**複数年度分析して一貫した傾向**が重要。
⇒1年ごとの結果で入試を変更しない！

スライド１

第18回高大連携教育フォーラム
特別分科会①アドミッション専門人材開発
第4回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会
２０２０年１２月６日（日）

書類・面接選考担当者の選抜実施

（アドミッション・スペシャリストによる書類選考・面接の実施）

徳島大学 高等教育研究センターアドミッション部門
植野　美彦

TOKUSHIMA UNIVERSITY

スライド２

2

本日の概要

１　アドミッション・スペシャリスト（ＡＳ）が学内の選考にどのように関係していくのか
－－徳島大学の事例を踏まえて－－
２　書類・面接担当者の選考実施
３　最後にかえて

終了後、質疑応答

★　１、３については、主に国立大学教職員向け
２については、公立、私立大学教職員の方も活用できる内容としています。

スライド３

3

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか
－－徳島大学の事例を踏まえて－－

スライド４

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　4

今回の研修会は、アドミッション・スペシャリスト（以下、ＡＳと略す）が、書類選考や面接の実施をどのように進めて行くかを考えていきます。

ただし、前提として、「ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか」をおさえなければなりません。

ＡＳの役割は、入試広報だけでよいのでしょうか。

選抜のサイクルに深く関わることが求められるのではないでしょうか。…ただの入試評論家で終わってはなりません。

徳島大学の事例を参考として紹介しながら、ご報告させていただければと思います。

スライド５

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　5

アドミッション・スペシャリスト

日本の場合、職員だけでなく教員も入学者選抜に関わるため

…　京都工芸繊維大学　山本以和子　教授

・選考の実施（や入試広報）　…だけではない

・選考の実施に関するサジェスチョン＋支援

・研究活動（エビデンスの獲得）

スライド６

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　6

アドミッション組織は大学入試に対してどういう役割？

学術的な意義よりも問題解決を優先した研究活動とし、個別の大学が大学入試で抱える課題を解決することが目的。

・入試制度設計
・入試方法の検証
・入学者の追跡調査
・学生獲得戦略
・アドミッション・ポリシーの策定　など

西郡大（2016）「日本のアドミッションセンターと機関研究としての大学入試研究」
（平成28年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会／公開討論会資料）より引用

アドミッション組織の必要性

（中略）各大学において、アドミッション・オフィスの整備・強化やアドミッション・オフィサーなど多面的・総合的な評価による入学者選抜を支える専門人材の職務の確立・育成・配置等に取り組むことが必要である。このような専門的な組織や人員配置等を行うことは、従来、入学者選抜の業務を担ってきた個々の教員の負担軽減にも資するものである。国においても、効果的な財政支援等を通じて、各大学の入学者選抜改革を促す。

高大接続システム改革会議（2016）「高大接続システム改革会議『最終報告』」より引用

スライド７

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　7

徳島大学高等教育研究センターアドミッション部門の事業内容

（1）入学者選抜及び入試広報に係る企画及び提案等に関すること。
（2）入学者選抜における調査、分析及び研究に関すること。
（3）四国地区国立大学連合アドミッションセンターに関すること。
（4）その他入学者選抜に関し必要な事項。

【現在の構成員】
専任教員　２名、特任研究員１名
兼務教員１２名（総合科学部、医学部、歯学部、
薬学部、理工学部、生物資源産業学部、
教養教育院、教育の質保証支援室）
入試課長　１名

スライド８

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　8

徳島大学の教育体制（学部）入学定員：１,２８８名

共通講義棟（LED大時計）

常三島キャンパス
総合科学部
理工学部
生物資源産業学部

2019.3 ポストＬＥＤフォトニクス研究所を設置

徳島大学病院

蔵本キャンパス
医学部
歯学部
薬学部

医療統合型キャンパス・県立中央病院が隣接

スライド９

１　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか　9

大学入学者選抜改革における「徳島方式」の実施
（第３期中期目標「戦略性の高い目標」）

「徳島方式」の定義

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた改革を行うため、本学の教育方針を踏まえ入学者に求める能力及びその評価基準・方法を明確にした入学者受入方針（ＡＰ）に基づき、公正な入学者選抜を実施すること。

全学でＡＰを実質化

（参考）
ベネッセ(2017).「Between2017 7-8月号」
http://shinken-ad.co.jp/between/backnumber/pdf/2017_7_tokushu07.pdf　2020.11.19閲覧

さらに詳しい内容は…
植野 (2017).「徳島大学生物資源産業学部の個別選抜改革――高大接続改革実行プランを受けた多面的・総合的評価の設計と実施――」『大学入試研究ジャーナル』, 27, 1-7.
植野，澤田(2018).「大学入学者選抜改革における「徳島方式」の事例」『大学入試研究ジャーナル』, 28, 215-220.

スライド１０

徳島大学生物資源産業学部 アドミッション・ポリシー　10

生物資源産業学部

R3入試

■生物資源産業学科
生物資源産業学部では，バイオテクノロジーを応用した生物資源の生産，医薬，食品としての有効利用に関連する幅広い知識，国際的に通用する専門性，バイオ産業創出に必要な起業マインドをもった人材の育成を目的としています。そのため，生物資源産業学部では，次のような人物を求めています。

●求める人物像
関心・意欲・態度
バイオテクノロジー，生命，医療，食料，農業，環境に強い関心と学びに対する意欲があり，自分で明確な目標をもっている人
探　究　力
自分が関心をもったことを深く掘り下げようとする人
表　現　力
自分が伝えたいことを相手の視点に立って適切に表現できる人
知識・教養
本学部の専門分野を学ぶために，高等学校等で修得すべき*理科系・文科系にわたる知識・教養をもつ人
思考力・判断力
今までの知識・教養をもとに思考を深めて適切に判断できる人
協　働　性
問題解決のために，国籍や世代，考え方にとらわれることなく，対等の立場で協力できる人

※高等学校等で修得すべき具体的な内容
理　　科－「化学，化学基礎」「生物，生物基礎」「物理，物理基礎」から２科目以上に渡る内容の理解と，自然環境で起こっている現象やその問題解決に必要な知識・教養。特に，入学後の学修に備えるため，化学に関する科目は実験データの解析力などを踏まえて，着実な修得をはかること。
数　　学－「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」「数学Ａ」「数学Ｂ」における内容の理解と応用力
英　　語－国際的な専門分野を学ぶために必要な読解力と基礎的な運用能力
国　　語－様々な文献の読解力と，自分が伝えたいことを表現できる基礎的な文章力
地歴・公民－地歴・公民における基礎的内容の理解

スライド１１

徳島大学生物資源産業学部 アドミッション・ポリシー　11

●入学者選抜の基本方針

R3入試

一般選抜（前期日程）
大学入学共通テストで「思考力・判断力」「知識・教養」を評価し，個別試験ではこれらに加えて「表現力」「関心・意欲・態度」「探究力」を評価します。知識のみならず，学ぶ意欲や自分で課題を発見し，主体的に判断・行動する資質（確かな学力）をもつ人を総合的に選抜します。

一般選抜（後期日程）
大学入学共通テストで「思考力・判断力」「知識・教養」を重点的に評価し，個別試験ではこれらに加えて「探究力」「表現力」を評価します。より深い知識とともに，思考を巡らせて表現できる人を総合的に選抜します。

学校推薦型選抜Ⅰ（大学入学共通テストを課さない）＜地方創生型＞
個別試験で「関心・意欲・態度」「表現力」「協働性」を重点的に評価し，「探究力」「思考力・判断力」「知識・教養」を合わせて総合的に評価します。地方創生型入試は，各地域の産業界と結びつきの強い専門教育を行っている学科を対象とし，地方創生に意欲をもつ学生の受入を目的としています（地域枠あり）。大学入学共通テストは課さず，個別試験のみで選抜します。

学校推薦型選抜Ⅱ（大学入学共通テストを課す）＜主体性・表現力重視型＞
３教科の大学入学共通テストでより深い「思考力・判断力」「知識・教養」を評価します。個別試験では，２段階にわたって「関心・意欲・態度」「表現力」「協働性」を重点的に評価し，「探究力」「思考力・判断力」を合わせて評価します。高等学校等段階における多様な能力，関心等を重視し，それを表現できる人を総合的に選抜します。

スライド１２

徳島大学生物資源産業学部 アドミッション・ポリシー　12

●入学者選抜方法における重点評価項目（入学者選抜方法と求める人物像との関係性）

R3入試

入学者選抜方法	該当選抜区分	関心・意欲・態度	探究力	表現力	知識・教養	思考力・判断力	協働性
共通テスト	一般（前期） 一般（後期） 推薦Ⅱ				○	○	
総合問題	一般（前期） 一般（後期）		○	○	○	○	
小論文	推薦Ⅰ			○		○	
集団討論	推薦Ⅱ			○		○	○
集団面接	一般（前期） 推薦Ⅱ	○		○			
個人面接 （口頭試問含む）	推薦Ⅰ	○			○		
活動報告書	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	○	○				○
学びの設計書	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ		○	○			
調査書	一般（前期） 一般（後期）	(総合判定の参考)					
	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	○					○

スライド 13

徳島大学生物資源産業学部 アドミッション・ポリシー

13

R3入試

●入学者選抜方法における選抜内容

入学者選抜方法	該当選抜区分	選抜内容
総合問題	一般（前期） 一般（後期）	日本語で書かれた文章や図表等により、下記の力を問う記述・論述式の出題を行う。 ①化学（化基・化）に関する基礎学力と思考・判断力（実験データの解析力等を問う場合あり） ②現代の社会における諸問題（バイオテクノロジー、食料、農業等で抱える問題）や生物資源産業への深い関心と、自らの考えを表現する力 ※②は小論文の要素を含めた出題
小論文	推薦Ⅰ	日本語で書かれた文章や図表等により、「思考力・判断力」「表現力」を問う論述式の出題を行う。
集団討論	推薦Ⅱ	複数の評価担当者による集団討論を行う。試験室で、テーマの提示（バイオテクノロジー、食料、農業関連）・説明ののち、15分間で自分の考察のまとめ（所定用紙の記述と提出有）を行う。考察のまとめの後に、集団討論を行う（終了５分前よりまとめに関する記述と提出有）。討論の進行役は評価担当者が行う。
集団面接	一般（前期） 推薦Ⅱ	複数の面接担当者による集団面接を行う。アドミッション・ポリシーに基づいて集団面接を行い、提出書類等の確認を行う場合がある。 ※一般選抜（前期）は、2日間に渡って選抜（１日目・総合問題、2日目・集団面接）を実施し、集団面接は１日目の受験者数によって、集合時刻を午前と午後に分けて実施する場合がある（１日目終了時に詳細を連絡）。
個人面接 （口頭試問含む）	推薦Ⅰ	複数の面接担当者による個人面接を行う。アドミッション・ポリシーに基づいて個人面接を行い、提出書類等の確認を行う場合がある。また、高校の基礎学力（「化学基礎」等）を確認するため、口頭試問を行う。
活動報告書	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	中学校卒業後の「意欲的に取り組んだ活動（部活動、生徒会活動、プロジェクト活動、ボランティア活動、海外留学などの学校内外で行った活動）」を評価する。また、推薦Ⅰにおいては、「意欲的に取り組んだ活動」に農業、工業、商業、水産に関する学科又は総合学科特有の活動実績を評価し、「資格・検定等」の成績を参考にする。 ※提出書類等の詳細は、「『活動報告書』作成要領」を135～137ページに掲載しているので、必ず確認すること。
学びの設計書	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	大学・社会人までを繋ぐ設計書を作成する。自分がこれから学びたい分野の理由を含めて、300字～400字で簡潔に作成して提出する。学びの設計書は必ず受験者自筆で作成する。
調査書	一般（前期） 一般（後期） 推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	【一般（前期）（後期）】 総合判定の参考とする。 【推薦Ⅰ・推薦Ⅱ】 アドミッション・ポリシーに基づいて評価する。
推薦書	推薦Ⅰ 推薦Ⅱ	学習や活動等の状況も踏まえ、総合して判定する。

スライド 14

1　ＡＳが学内の選考にどのように関係していくのか

14

大学入試改革で忘れてはならないこと。

アドミッション・ポリシー（ＡＰ）の実質化

ＡＰが形骸化せず、入学者選抜に機能するためには、学生が必要と考える「情報」を大学教員が理解する必要がある。（立脇ほか、2015）

参考文献：
立脇洋介，山村滋，濱中淳子，鈴木規夫 (2015).「アドミッション・ポリシーをめぐる学生と教員の意識」『大学入試研究ジャーナル』，**25**, 57-62.

・・・（私見）
大学教員にＡＰの重要性を認識してもらうこともＡＳの重要な役割。
ＡＰは入学者受入方針＋説明責任（ＡＰの役割はさらに大きくなる）。

改革を契機として、ＡＰ策定・改善を支援していくことが大切です。

スライド 15

15

2　書類・面接担当者の選考実施

スライド 16

2　書類・面接担当者の選考実施

16

第２章では、ＡＳによる「書類・面接担当者」の選考実施について考えていきます。

実際の選考は、各学部の先生方で行うことが基本となるでしょう。そこに適切な助言と支援ができてこそ、真のＡＳと言えます。

これまで徳島大学の関係教職員と連携し、改善・蓄積を重ねてきた評価技法を中心に事例紹介（差し支えない範囲）を行い、掲題のことを進めるにあたって、あらかじめ知っておいて欲しいことをお伝えします。

今後の活動の参考にしていただければ幸いです。

スライド 17

2　書類・面接担当者の選考実施

第２章の資料は口頭による説明が必要なため非公開

スライド 18

3　最後にかえて

アドミッション・スペシャリストとしての心得（私見）

・各部局へは提案だけでなく「支援」を忘れずに。

…「応援」と「支援」は意味が違う。
提案だけだと負担を増やすだけの場合も…。
口を動かし、手も動かすイメージを。

・提案は、各部局の実態に合わせることを意識。

…アドミッション・ポリシーは学部（学科）によって違います。

・アドミッション・ポリシーは定期的なメンテナンスを。

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～実行委員会方式となり何が変わったか～

発表者▸　2020 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 杉岡　秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ▸ 鮫島　輝美（京都光華女子大学健康科学部准教授）

新型コロナウィルス感染症の拡大防止策として、教育現場ではオンライン授業の導入が進められ、企業でもテレワークの導入など転換が求められてきた。この先の見えない時代の中で、今年度の高大社連携フューチャーセッションについては、生徒・学生による「実行委員会形式」を採用し、次代を担っていく高校生・大学生 19 名に、オンライン（Zoom、LINE）という新たなツールを活用し、未来を見据えた柔軟な発想で自ら思考し、これからの「学ぶ」と「働く」のライフデザイン事業として今年度の「高大社連携フューチャーセッション」を組み立ててもらった。本特別分科会ではこの成果を報告するとともに「実行委員会方式となり何が変わったか」という問いについて実行委員会の学生・生徒とコーディネーター、参加者間で議論を深めた。

概　略

まず、コーディネーターの杉岡秀紀氏から、パネラーおよびコーディネーターの紹介、高大社連携フューチャーセッションの概要紹介、アンケート結果の報告、本特別分科会の進行について説明があった。

次にパネルディスカションに入り「学生実行委員をやってみて身についた力はどんな力？」「企画から実行までやってみてぶつかった壁とは？」「またそれをどう乗り越えた？」「自分の中の『学び』と『働き』についての考え方はどう変化した？」の順で、2020 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員４名から発言があり、参加者からの質疑の時間も設けた。

その後、各々の問いに対して、コーディネーターである鮫島輝美氏からコメントがあった。最後に杉岡秀紀氏からまとめがあり、閉会した。

全体討論の内容

参加者からは、チャットの機能を活用して「本事業を通して『学び』『働き』の軸で、未来的な情報や多様性（世代や地域）に触れたことによって感じたことや気付いたこととは？」「『学び』と『働き』はいわば表のステージで、ライフには『暮らす』があると思う。今後は『働く』『学ぶ』『暮らす』をつなげることは、このフォーラムでは探求していかないのか？」「高校生と大学生の協働プロジェクトということで、高校生は大学生と一緒に進めること、大学生は高校生と一緒に進めることで、感じたことや気付いたことは？」といった質問が寄せられ、それぞれパネラーと

コーディネーターから回答した。

以上の質疑なども鑑み、本年度の高大社連携フューチャーセッションについては、以下の３つの到達点を確認できた。

① リアルに会えないもどかしさやコミュニケーションの難しさもあったが、時間や物理的距離の限界を超え、いつでもどこでもつながれるというオンラインならではのメリットが出て、学校種・学年・年齢・出身地域を越えた出会いの場、ネットワークを構築することができた。

②実行委員会内外で「学ぶ」と「働く」についての多様な価値観に触れ、実行委員である学生・生徒たちの発言が日に日に前向きかつ主体的なものに変わっていった。

③企画から実行までをほぼ全て学生・生徒たちで行うことで、主体性や企画力、実行力、責任感、タイムマネジメントなどのソーシャルスキルを身に付けてもらえた。

到達点と今後の課題

本年度の特別分科会②は、昨年度までと違い、全てオンラインとなった。そもそもフォーラムのみならず「高大社連携フューチャーセッション」事業全てがオンラインであった。しかし、ピンチはチャンスではないが、この工夫（アレンジ）により、これまでの京都府北部地域と南部地域という物理的な距離を一瞬で克服することができ、実行委員会として参加してくれた高校生や大学生がいわば「オール京都」でつながることができた。また、オンラインツールの活用により頻繁なコミュニケーションも可能となった。また、特別分科会当日についても、本事業に関心を持つ全国の参加者とコミュニケートすることができた。これは、これまでの５年間にはない新たな収穫と言えよう。

それが証拠に、特別分科会当日のアンケート（外部評価）を見ても、71.4%の参加者が「満足」、28.6%の参加者が「やや満足」ということで、良い評価をいただけた。また、定性的にも「学生の飾りのない言葉を多く聞くことができた」「興味ある内容で、私自身について今後のキャリアアップにつながるものでした」「生徒・学生の成長のあり方が興味深かった」「高校生、大学生の可能性、底力を実感した」とのコメントが寄せられている。

他方、課題としては、①（オンライン事業全体の課題ではあるが）申し込みいただいた人数の半数程度の参加者しか集まらなかったこと、②参加者の多くとのやりとりがチャット中心となり、顔の見えるコミュニケーションが取れなかったこと、③実行委員会の残りの学生・生徒たちの声を届けられなかったこと、などが挙げられる。これらの点については今後の課題としたい。

スライド1

高大連携教育フォーラム
特別分科会②
（高大社連携キャリア教育）

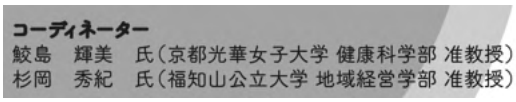
2020年12月6日
zoom（オンライン）

スライド2

スライド3

コーディネーター紹介

スライド4



スライド5

パネラー紹介

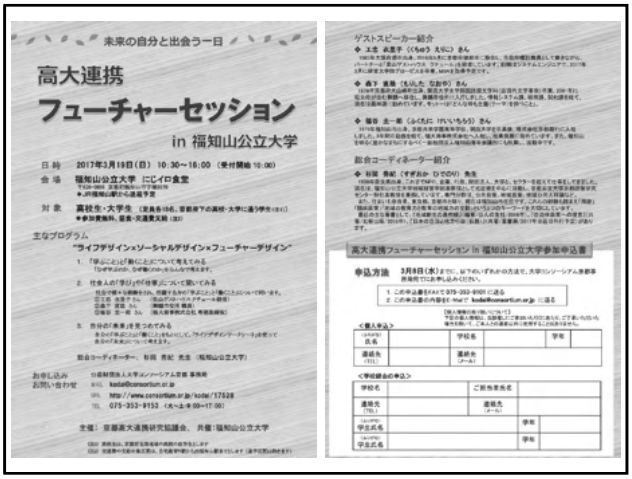
スライド6

フューチャーセッションとは？

スライド7

新たな価値を創造するため、多様な価値観を持つ人々が集まり、対等な立場で未来志向で議論し、交流を深める場

スライド8



スライド9

スライド10

スライド11

スライド12

【2020年度概要】

「高大社連携フューチャーセッション」とは、
高校生・大学生・社会人といった世代、学校間を越えて交流する高大社連携キャリア教育企画である。
2020年、新型コロナウイルス感染症拡大防止策として
教育の現場では休校措置やオンライン授業の導入が進められ、企業でもテレワークの導入など
ライフスタイルの転換が求められてきた。
このコロナ禍により先の見えない社会において、今後の教育や社会はどう変化していくのだろう。
また、その変化に対して高校生・大学生は「学ぶ」と「働く」をどう新しくデザインできるのだろう。
様々な可能性がある中で、これからの世代を担っていく高校生・大学生が、
世代や学校間を越えた交流を通して、未来を見据えた柔軟な発想で自ら思考し、
これからの「学ぶ」と「働く」のライフデザインを新たに組み立てていく。

この2020年度「高大社連携フューチャーセッション」の開催に向けて、
主体となって当日のテーマやプログラム構成などを企画検討し、当日の運営補助や
イベント後の実施成果報告（12月予定）まで担う実行委員を募集します！

当日だけでなく、企画する側から関わってもらうことで、
先が見えない世の中を「自分ごと」として考えるきっかけにしたい

スライド 13

【テーマ】

スライド 14

今年から学生実行員会形式に

募集要項

対　　象▶ 京都府内の大学・高等学校に通う大学生・高校生のうち当日及び会議に参加可能な方
定　　員▶ 10名程度
応募締切▶ 2020年7月10日（金）まで
応募方法▶ 以下の内容を記載の上、メールにてご応募ください。
① 氏名（ふりがな） ② 所属校 ③ 学年 ④ 電話番号 ⑤ メールアドレス
【件　名】「高大社連携フューチャーセッション実行委員応募」
【メール】kodai@consortium.or.jp
そ の 他▶ 応募締切後、事前説明会を行います（詳細は応募受付後ご案内します）。

http://www.consortium.or.jp/kodai/33807

スライド 15

募集10人に対し
19人集まった

スライド 16

【実行委員会】
鳥羽高校・福知山高校・大江高校・加悦谷高校・日星高校・同志社高校・京都学園高校・京都橘高校、京都工芸繊維大学・京都女子大学・同志社大学・福知山公立大学・立命館大学
↓
北部から南部まで８高校５大学

スライド 17

【チラシ（学生制作）】

スライド 18

【ゲスト（学生による人選）】

スライド 19

【組織（昨年度まで）】

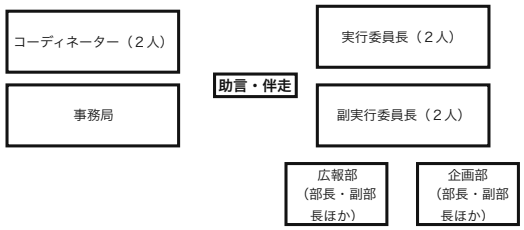
コーディネーター（２人）

事務局

教員と事務局で全て「企画・実行」

スライド 20

【組織（今年度）】



学生実行委委員会が「企画・実行」を担い、教員・事務局は「助言・伴走」へ

スライド 21

【当日参加校】

鳥羽高校・大江高校・加悦谷高校・日星高校・同志社高校・京都学園高校・京都橘高校、京都工芸繊維大学・京都光華女子大学・京都女子大学・同志社大学・福知山公立大学・立命館大学・BBT大学

↓

７高校７大学、37名が参加

スライド 22

アンケート結果

スライド 23

2 満足度

満足度	回答数	割合
とても満足した	9	50%
満足した	6	33%
どちらでもない	1	6%
満足しなかった	2	11%
全く満足しなかった	0	0%
合計	18	100%

スライド 24

3 他の方への推奨度

推奨度	回答数	割合
勧めたい	7	39%
やや勧めたい	6	33%
どちらでもない	5	28%
あまり勧めたくない	0	0%
勧めたくない	0	0%
合計	18	100%

スライド 25

4 満足度理由

(1)「満足」

- 緊張する機会があり楽しかったです。【高校3年】
- 自分にはない面白い話を聞くことができた。【大学2年】
- 実行委員をさせていただいて、さまざまな方のお話を聞き、終わった後の達成感がとても大きかったから。【大学2年】
- 価値観の違いと同時に多様性の良さを知ることが出来ました。【大学2年】
- 初めて知ることや新しいことを沢山聞けたので良かったです。【大学3年】
- 学校、年齢が違う方とたくさん交流できたし、意見交換も出来ました。こういった一つ一つの経験が大事だと思いましたし、オンラインでも対面でも可能なのだと分かりました。【大学3年】
- 講義やグループワークを通してたくさんの意見交換ができた。普段関わることのない方と関わることでて良かった。【大学4年】

(2)「やや満足」

- 自分の知らなかった話が聞けたため。【高校1年】
- 全面構成を一から、それも生徒学生向で練って形にしていくという経験は中々できるものではないと思うため。且つ楽しめたため。「やや満足」にした理由は、唯一、自分発信での提案が殆どできなかったことへの悔いです。【高校1年】
- 高校生や他大学生と話せたから。身近な高校の方とも話せたので良かった。【大学3年】
- ゲストの方を含め、色々な方とお話ができ、意見交換ができたので良かったです。【大学4年】

(3)「満足しなかった」

- 自分では思いつかない考えに触れることができた。【高校4年】
- もっと話す時間があればよかった。【大学4年】

スライド 26

5 ゲストのお話やグループワークを通して、あなたにとって「withコロナ時代における新しいライフデザイン」について、どのようにイメージできましたか。具体的にご記入ください。

- リアルとオンラインの利点を混ぜたものになっていくのかなと思いました。【高校1年】
- グループ内で話し合っている中で「近いうちにはもう校舎のある学校に通うことが珍しくなっているのではないか」という意見があり、それについては、各学校や企業等のオンライン導入の速さを見ているとあながち違い未来ではないのだろうと感じました。【高校1年】
- オンラインとリアルの良い点を最大限に生かすことができるようにすることです。例えば、看護関係の学科の学生はコロナ禍で実習が思うようにできない（オンラインで説明を見たり聞いたりするだけでは効果がない）と思うので、そういうものはリアルでするべきだと思います。ただよく考えたら医療用のロボットとかも作られ始めているので、もしかしたらその仕事もなくなるかもしれません。ちょっと話がそれてしまうかもしれないんですけど、細かい作業が可能なロボットがたくさん開発されていったら「リアルで実習をする必要がある職業はなくなってしまい、現時点ではロボットにはできないといわれている『思考力』や『想像力』が必要な職業だけを人間が担うことになるのではないか」と思います。そうなったら完全なオンライン化でも大丈夫だと思います。
古代の人々は奴隷に身の回りのことや肉体労働をさせ、自分自身は学問（数学や哲学など）や新たな道具の開発を行いました。彼らは考えることに時間を費やすことができました。そのようにして人類は今まで発展してきました。Society5.0では私たち全員が考えることに時間のほとんどを費やすのかもしれません。【高校2年】
- 変わったのは確かだけどいずれそうなる未来だっただけでそれが早くなったといったイメージ。【高校3年】
- オンラインで関わることのメリットもすごく感じたけれど、対面での交流の良さを忘れられない。【大学2年】
- オンラインとリアルのいいとこ取りができるということ。オンラインを用いることによって、働く場所や時間の融通が利くため、これまでよりも学ぶ時間をふやせるのではないかということ。【大学2年】
- オンラインが普及しても人との繋がりは大事にするべき。つなが りが希薄になってはいけない。逆に、オンラインだけでも友達はつくれる。【大学2年】

スライド 27

- 私は、オンライン化がコロナによって進むのが早くなっただけだと思っています。本来なら準備をゆっくり出来て、導入も効率的にできたのではないかと思っています。ですが、コロナによってバタバタと導入されていってしまったと考えています。私たちはまだまだオンラインについて勉強していかなければなりません。そういった取り組みをされている方々を参考にし、また、オンラインでないことの良さも取り入れながら学んだり働いていく、そういったライフスタイルがこれから開発、確立していくのだなと思いました。【大学3年】
- 高校でもBBT大学のような大学が沢山現れ、キャンパスのある大学が珍しくなるかもしれない。教育がどんどんコンパクト化され、黒板やノートがないことが当たり前になるかもしれない。【大学3年】
- オンラインは、1つの手段であるということを改めて認識した。オンラインが普通になりつつある今、手段という見方は出来なくなっており、何をするにもオンラインを含めて考えてしまう。しかし、私は、やはりリアルが好きなので、リアルでするためには、どうすればいいのかという観点を常に持ち取り組んでいきたいと思う。【大学3年】
- 「学ぶ」も「働く」もコロナだけでなく、色々なことに影響されるが、絶対に継続していく方法はあると思った。今だからこそ新しいライフデザインが必要なのではなく、移り変わる時代変化の中で、変わり続ける生き方が良いと思った。【高校3年】
- 在宅勤務できる職業もあれば、どうしても通勤しなければできない職業（医療職や飲食業等）もあるため、難しい問題だと感じた。【大学4年】
- コロナが終わった後でもオンライン化は進んでいくと思った。【大学4年】
- IT化が一歩前進した。【大学4年】

スライド 28

6 参加して得た気づきや学びを具体的にご記入ください。

- オンライン大学では、リアルの大学と形式が全然違って、学べることも違うのかなと思いました。すごく興味を持てました。【高校1年】
- 長谷川氏のお話にあったソサエティ5.0にしてもBBT大学そのものにしても、コロナ感染の事態があったから早まっただけであってオンラインやその他諸々が当たり前になる時代が来ることは予想されていて私たちが知らなかっただけなのだと分かりお三方の意識の高さに驚きました。【高校1年】
- 長谷川さんはとても理想的な、自由な、好きなことを形にされてる方なんだなあと思う反面、最初に就職した会社を退職されてからの1，2年間はたくさん悩まれたんだなあと、何と言うか、大変だったんだろうなあと感じました。すごいと思ったのは、コロナ禍でそれまでできていたことができない中できることを探したり、また、学校の先生にzoomの使い方を教えてその先生方の背中を押したということです。意識を変えたということだと思いますが、なかなか衝撃的だったのは（ほかの参加者の方もそうだと思いますが）AIやIoT、そしてオンライン化の台頭にコロナは関係ない、というものです。「コロナの所為」ではなく「コロナのおかげ」とか、ある意味逆転の発想ですよね。僕に関しても「コロナの所為」で学校行事や授業に支障がでましたが、「コロナのおかげ」でこのフューチャーセッションに参加して貴重な経験をさせていただくことができました。改めて大切だと感じたことは「待つ」のではなく「動く」ということです。
BBT大学は100％オンラインというのは知っていたんですけれども、驚かされることばかりでした。レポートや事業計画書の提出が多いなんて！それだけでも十分、自分の頭で考えて作り出さないといけないのにそれに加えてディスカッションもあるとか、嫌でもコミュニケーション能力とかもろもろのスキルがつきますよね。まずそれがすごいと思いました。あと、自分の時間を自由に使えて（通学時間もカットできる）場所の制限もなく学ぶことができるというのは、よく考えたらとても魅力的なものだなあと感じました。入試がだんだん遠ってくると時間が惜しくなるんですよね～。BBT大学の学長さんの「自分の人生の社長になれ」という言葉はとても じ～んと来るものだと思います。【高校2年】
- コロナによるオンライン化が肯定的に受け入れられなかったというのが当たり前のことなのに意外だと感じた。【高校3年】
- やりたいことや好きなことは、いろいろなことに挑戦した中から見つかるという言葉に心を動かされました。失敗を恐れず挑戦していきたいと思いました。【高校3年】
- 「コロナだから出来ない」ではなく「コロナでも出来る」を念頭において行動していくことの大事さ。【大学2年】

スライド 29

- 実行委員の経験やゲストのお話を通して、何回失敗してもいいんだということが分かりました。ゲストの方々のように、もっと遊んで、自分のやりたいことをやっていこうと思いました。【大学2年】
- 大切なことやからなければいけないことはしっかりやって遊び心を忘れないようにしていきたいと思います。【大学3年】
- 一人ひとりが違う環境で過ごしているので、意見や考え方も一人ひとり違いました。そういった方々とお話しできて自分の視野が広くなりました。また、BBT大学さんのように全面オンラインだけどもしっかり勉強できるし、自分のやりたいこともできるとなると、大学の在り方が変わってくるし、自分が思うようなライフスタイルが実現しやすくなってくるのかなと思いました。【大学3年】
- フューチャーセッションという名前のため難しく感じ、参加を迷っていましたが、本当に参加して良かったです。当たり前が当たり前ではないのかも知れない、迷うなら挑戦してみようなど沢山のことに気づかされ学ばされました。【大学3年】
- オンラインの大学では、考えを共有する時に、文字に起こして話し合うということはビックリだ。文字に起こして伝えようとすることから、伝える力が培われるのかと思った。オンラインだから友達が出来ないということは無く、工夫次第で仲間を作ることが出来ると感じた。オンラインとリアルのバランスが大事だと思った。【大学3年】
- 講義されてた方たちにはやりたいことや夢がたくさんあってすごいと感じた。【大学4年】
- 経済や働き方の変化はあまり考えたことがなくて良い機会になった。【大学4年】

スライド 30

7 その他、感想や要望（次回取り上げてほしい「テーマ」や「ゲスト」の希望、改善してほしい点）

- 閉会後も残ってくださった大学生の方に、次回はゲストとして、という話がありましたが、そのことについて。彼自身話すのは苦手だと仰っていましたが、グループでお話しされているのを聞いていた私個人としては自分の意見に加えて前の人の意見に交えたエピソードをうまく纏めている雄弁な方だなという印象でした故、場の流れ云々ではなく彼にはぜひともいつかゲストとしてご参加頂きたいと思いました。【高校1年】
- いい緊張ができ、楽しかったです。【高校3年】
- ブレイクアウトセッションで話すのが難しかったです。実行委員として、ファシリテーターのパートナーをもう少しうまく支えられればよかったと思います。【高校3年】
- あえて「ウィズコロナ」を外して考えてみたい、あえて、コロナのことは考えない議論がしたい。【大学3年】
- 「働くとは」「仕事に就くとは」【大学3年】
- 学校のICT活用についてのセッションがあれば参加したいと思います。【大学3年】
- 自分にとってとても良い学びになりました。参加してよかったです。【大学4年】

スライド 31

長谷川　夕起　様（京都府立加悦谷高等学校・宮津天橋高等学校加悦谷学舎　高校魅力化コーディネーター）

長時間お疲れさまでした。
大学生、高校生という若さでこういう場に参加したり実行委員として参加して企画するというのは、私が皆さんの年では考えられなかったことで、きっかけや動機がなんであれ、その行動力は本当に素晴らしいと思います。
それだけでもすごい事なのに、参加してたくさんのことを受け取っているその感性も本当に素晴らしいと感じました。

「コロナのせい」、ではなく、「コロナのおかげ」という言葉で共感できたのは、皆さんが今置かれている環境が多少の不安はありながらも、比較的安定しているから・守られているからではないでしょうか。講演では来るべきことが早まっただけ、とお伝えはしましたが、確実にこのコロナ禍で辛い思いをされた方々もおられます。当たり前のことが当たり前ではないということに気づかれた方もおられますが、今皆さんの置かれている環境は決して当たり前ではない、奇跡の上に成り立っている事にもぜひ気づいていただければと思います。

また、society5.0は「創造社会」と呼ばれる社会です。【自分が実現したい世界】をテクノロジーの力を使って実現させていく時代に突入していきます。講演での気づきで、「オンラインとオフラインのいいとこ取り」がされていく・などの意見がありましたが、オンラインとオフラインのそれぞれの良さを改めて認識されたと思います。自分が実現したい世界は何を活用したらより早く実現できるのか、そんな視点でリアルとオンラインの活用を引き続き皆さんの中で問い続け考え続けてもらえたらと思います。

時代が変わっても、変わらないものも沢山あります。その本質を見極めてぜひ皆さん成長していってください。
良く学び、よく遊びましょう！

スライド 32

坂下　朋紀　氏（ビジネス・ブレークスルー大学グローバル経営学科4年）

みなさんは、「オンライン学習」と聞いてもなかなかイメージができなかったと思います。講義では、「オンライン大学での、ディスカッションはどのような方法でするのか」「友達はどのようにつくるのか」「オンライン大学のデメリットは？」など、純粋に疑問に思ったことをご質問いただき、オンライン大学をたくさんの人に知ってもらおうと活動している私たちにとっても学びが多かったです。
みなさんからたくさんのご質問をいただけたのは、とても嬉しかったです。

講義でも少しお話をしましたが、私たちの大学は「答え」を探すのではなく、自分の「考え」を見つけることを大切にしています。
セッション当日のディスカッションでは、みなさん自分の「考え」を見つけようとされていたなど、見学させていただきながら感じていました。

必ずしも答えがある訳ではないこの時代、今後もその「考える」ことを大切にしていってください。

コロナ時代で、生活も大きく変わってきた中、ビジネス・ブレークスルー大学も将来の選択肢として覚えていていただければなと思います。
たくさんの方に、オンライン学習のことを知っていただく、とても貴重な時間でした。ありがとうございました！

スライド 33

柴崎　莉菜　氏（ビジネス・ブレークスルー大学グローバル経営学科4年）

まずは、実行委員の学生の皆様へ。半年間という月日をかけて作り上げてきた貴重な機会に関わるご縁を頂き、ありがとうございました。事前打ち合わせから、場の雰囲気や皆様の団結力が画面越しからひしひしと伝わり、安心して当日を迎えることが出来ました。

今年のセッションテーマは「考えてみませんか?with コロナ時代における新しいライフデザイン」。
コロナ禍の前と後でどのように生活が変わり、またこれからどう自身の生活をクリエイトしていけばいいのか、について本当に多くの議論がなされましたね。学生生活や社会において、オンライン体制を取り入れることが良いのか悪いのか、という単純な議論ではなく、活かせる場面を柔軟に考え、どんどん可能性を広げていく皆様の意欲的な姿勢に感心しました。

また、初めまして同士の方が多い中、年齢・環境の垣根を越えて和気あいあいと議論する姿も
とても魅力的でした。ここに参加しなければ出会う事の無かったご縁がたくさんですよね。
いつか「あの時一緒に議論したの懐かしいね。俺らが思描していた社会が今現実として起こったな！！」と語り合える関係が築きあがる起点になっていれば更に嬉しいです。

ゲストとして、皆さんに何か少しでも今後の選択肢が広がればいいな、という思いで参加しましたが、
正直、私自身が更に人生をより大きな視点で見ることが出来た機会となりました。

このセッションを作り上げてくださった皆様のパワーに感謝するとともに、今後の生活がより豊かで楽しい日々になることを願っております。「自分の人生の社長になれ！」
ありがとうございました。

スライド 34

【コーディネーター気づき】

①リアルに会えないもどかしさやコミュニケーションの難しさもあったが、時間や物理的距離の限界を超え、いつでもどこでも繋がれるというオンラインならではのメリットが出て、学校種・学年・年齢・出身地域を超えた出会いの場、ネットワークを構築することができた。
②実行委員会内外で「学ぶ」と「働く」についての多様な価値観に触れ、実行委員である学生生徒たちの発言が日に日に前向きかつ主体的なものに変わっていった。
③企画から実行までをほぼ全て学生・生徒たちで行うことで、主体性や企画力、実行力、責任感、タイムマネジメントなどのソーシャルスキルを身につけてもらえた。

スライド 35

パネルディスカッション

スライド 36

Q1.学生実行委員をやってみて身についた力はどんな力？

スライド 37

（実行委員長/日星高等学校1年）
・人の上に立つ難しさ、タイムマネジメントと学業とのバランスの難しさ。
・物事の視点が変わった。

スライド 38

（副実行委員長/福知山公立大学2年）
・人を信頼する力。
・オンラインのみのコミュニケーション。

スライド 39

（広報部長/京都工芸繊維大学2年）
・オンラインでプロジェクトを進める力。
・予定通りでいかない現実と調整のむずかしさ。

スライド 40

（企画副部長/加悦谷高等学校3年）
・どんな環境でも話す（せる）力。やはり関係性構築が大事だった。
・コミュニケーションの結果、自信がついた。関係性もできた。

スライド 41

（鮫島先生コメント）
・高校生、大学生ならではの感想、地域性ならではの感想だった。
・オンラインならではの良さもあったが、雑談の重要性などリアルの良さも取り入れられた。
・良い雰囲気がオンラインでも作れたのでは。

スライド 42

Q２.企画から実行までやってみてぶつかった壁とは？
またそれをどう乗り越えた？

スライド 43

（企画副部長/加悦谷高等学校3年）
・人数が少なかったのと、スケジュールが合わず、困った。
・初対面で仲良くなるのに時間がかかった。
↓
オープンチャットや雑談を活用した。

スライド 44

（実行委員長/日星高等学校1年）
・関係性構築が難しかった。
・メンバー間で仲間割れ。
↓
プラスアルファの自己紹介
今後の課題や解決策について
話し合った。

スライド 45

（広報部長/京都工芸繊維大学2年）
せっかく作り、みなで決めたロゴが使えなかった。
↓
チラシやバーチャル背景に
生かした。

スライド 46

（副実行委員長/福知山公立大学2年）
・記者会見をしたが、記事にならなかった。
・大学生と高校生の時間が合わなかった。
↓
個人とのやりとりを大切にした。

スライド 47

（参加者より）
「競い合うのではなく、1つのアイディアをもとに作り上げていくこと」は大切なことですね。ビジネスの世界でもリーダーシップとともにフォロアーシップの大切さが言われています。以下お時間があるときに見ておいてください。https://www.youtube.com/watch?v=ldULdrNAlNs&t=90s

スライド 48

（参加者より）
武岡さんが言ってくれた「本題と違うことも話す大切さ」非常に共感しました。ビジネスでも仕事が行き詰った際に、雑談することで、今まで気づかなかったアイディアが出ることがあります。

スライド 49

（鮫島先生コメント）
・失敗しても良いと言った。
・個と集団共に「あれ？」を大事にしてくれたと思う。
・トライ＆リカバリー（≠エラー）がしっかりできていた。
・バーチャル背景による一体感もオンラインならであった。

スライド 50

Q３.自分の中の「学び」と「働き」についての考え方はどう変化した？

スライド 51

（参加者）
Q.このあと触れていただけるかもしれませんが、本事業を通して「学び」「働き」の軸で、未来的な情報や多様性（世代や地域）に触れたことによって感じたことや気づいたことを伺えると嬉しいです。

スライド 52

（副実行委員長/福知山公立大学2年）
・大人の人と喋る機会がある。
・「学び」と「働き」は繋がっていると思う。
・もっと吸収（インプット）したい。
・起業家からも色々な気づきがあった。

スライド 53

（実行委員長/日星高等学校1年）
・オンラインならではの学びと働きを知れた。
・人間性、気配り、思いやり。

スライド 54

（広報部長/京都工芸繊維大学2年）・Society5.0はコロナ前から進んでいた。コロナの「お陰」で進んだだけ。
・やりたいことをやるだけ。
・自分で動いていないだけということを痛感した。

スライド 55

（企画副部長/加悦谷高等学校3年）
・これまで学びと働きは別々だった。
・これからは個人がやりたいことが尊重される時代になると思う。
・学びたくとも学べない人もいる中で、オンラインの強みを実感できた。

スライド 56

（鮫島先生コメント）
・一人一人が見つけはじめている。
・無駄はない。
・キャリアは偶然から。

スライド 57

（参加者）
「学び」と「働き」はいわば表のステージでライフには「暮らす」があると思います。今後は「働く」「学ぶ」「暮らす」をつなげることはこのフォーラムでは探求していかないのでしょうか。

スライド 58

（参加者）
・「どこに」暮らすかだけでなく、「誰と」暮らすかも大切かと思います。
「暮らす」も住むだけでなく、「つながる」＝交流人口も大事かなと思います。

スライド 59

Q4.今後どこで暮らしたい？

スライド 60

（企画副部長/加悦谷高等学校3年）
・都会生まれ。
・田舎暮らし。
↓
二個目の家も大事にしたい。

スライド61

（実行委員長/日星高等学校1年）
・都会に出たい。
・大学でまちから出る。
・将来、海外には出たい。

スライド62

（副実行委員長/福知山公立大学2年）
・京丹後に戻る。
・自分で自由にしたい。
・高校生の頃から魅力的な大人とつながってきた。
・失敗しても大事な環境が大事。

スライド63

（広報部長/京都工芸繊維大学2年）
・「せとうち芸術祭」がある香川出身。
・だから、美術が強い大学に入った。
・将来は地元に帰りたい。

スライド64

（鮫島先生コメント）
・両親は企業戦士だった。
・自分には「田舎」がない。
・京都の「土着愛」に驚いた。
・「過疎」ではなく「適疎」。
・ローカルに生きるけど、ローカルにしばられない。

スライド65

（参加者）
Q.高大連携教育という視点で伺いたいのですが、高校生と大学生の協働プロジェクトということで、高校生は大学生と一緒にすすめること大学生は高校生と一緒に進めることで、感じたことや気づいたことを教えていただけると嬉しいです。

スライド66

（広報部長/京都工芸繊維大学2年）
・高校生の方がやや壁を感じていたと感じた。

スライド 67

（副実行委員長/福知山公立大学2年）
・高校生は忙しい（学校に縛られた忙しさ）。
・疑問を疑問と感じることが大事。

スライド 68

（実行委員長/日星高等学校1年）
・最初は大学生と高校生間で文章や語彙力やレベルが違うと驚いた。
・こんな大学生になりたい。

スライド 69

（企画副部長/加悦谷高等学校3年）
・大学生と能力の差を感じた。
・こんな大学生になりたいと思えるようになった。

スライド 70

まとめ

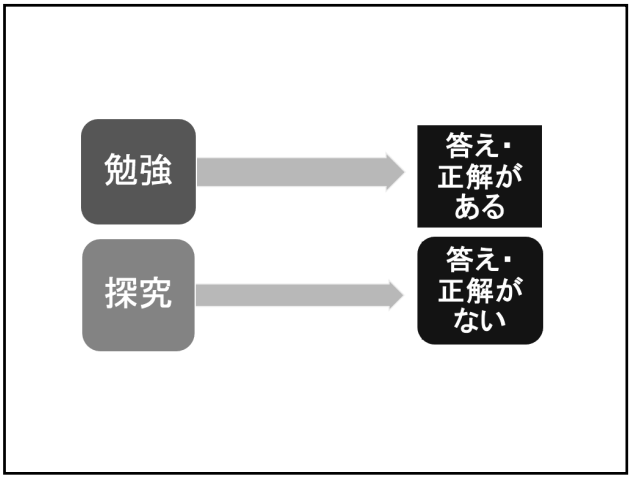
スライド 71

（出所）上田紀行編『新・大学で何を学ぶか？』岩波新書、2020

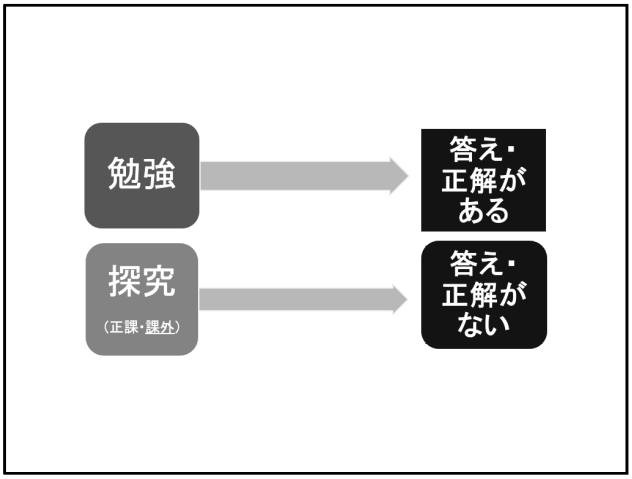
スライド 72

・大学の学びは高校の学びとは少し違います。
・高校までの学びが「勉強」であるとすれば、大学で加わるのは「探究」です。
・「勉強」は（中略）出された問題が解けるようにする（こと）。その問題には「正解」があり、その正解を答えればいい点数が取れます。
・ところが「探究」は違います。たとえば生きるとはいかなるものかとか、死とはいかなるものかと言った、（中略）これだけが正しいという答えも結論もありません。
・そのことを探究することによって、私たちの人生は深まり、豊かになっていきます。

スライド 73



スライド 74



スライド 75

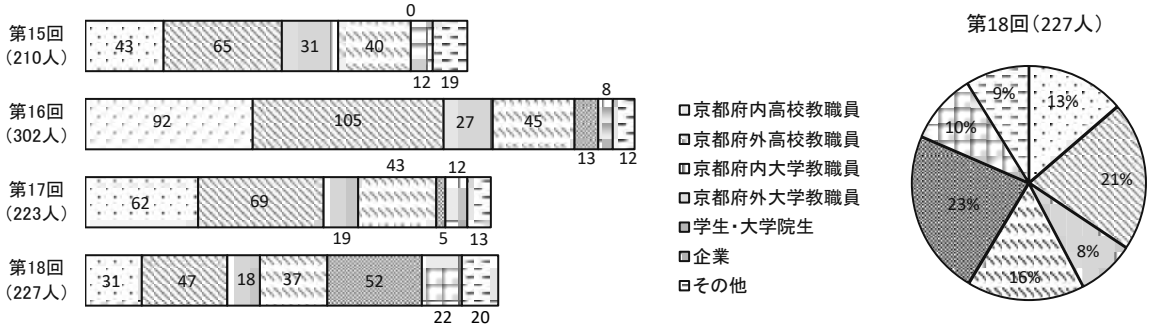
（出所）梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎新書）、2018

スライド 76

高大連携
↓
高大連「繋」

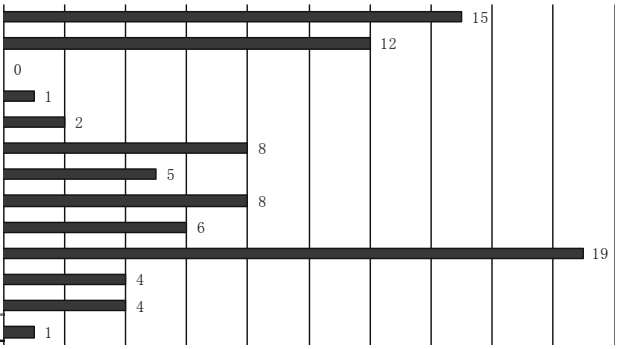
第 18 回高大連携教育フォーラム　参加者アンケート結果

（1）参加者数及び内訳



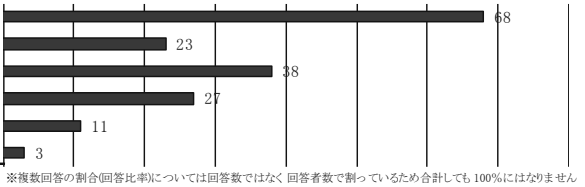
（2）回答数及び内訳

	回答数	比率
1.高校教員（京都）	15	17.6%
2.高校教員（京都府外）	12	14.1%
3.高校職員（京都）	0	0.0%
4.高校職員（京都府外）	1	1.2%
5.大学教員（京都）	2	2.4%
6.大学教員（京都府外）	8	9.4%
7.大学職員（京都）	5	5.9%
8.大学職員（京都府外）	8	9.4%
9.その他教育機関	6	7.1%
10.学生	19	22.4%
11.企業	4	4.7%
12.その他	4	4.7%
無回答	1	1.2%
合計	85	



（3）参加理由（複数回答可）

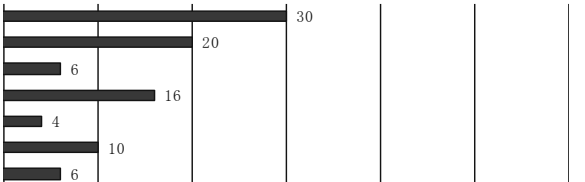
	回答数	比率
1.フォーラムの内容に興味があったから	68	80.0%
2.過去に参加したことがあったから	23	27.1%
3.高大連携・接続の情報を収集したいから	38	44.7%
4.スキルアップしたいから	27	31.8%
5.所属組織からの推薦があったから	11	12.9%
6.その他	3	3.5%
合計回答数	170	
合計回答者数	85	



※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っ ているため 合計しても 100%にはなりません

（4）興味があった内容の内訳（複数回答可）

	回答数	比率
a.メインテーマ	30	44.1%
b.事例報告①テーマ	20	29.4%
c.事例報告①登壇者	6	8.8%
d.事例報告②テーマ	16	23.5%
e.事例報告②登壇者	4	5.9%
f.事例報告③テーマ	10	14.7%
g.事例報告③登壇者	6	8.8%
h.パネルディスカッション	7	10.3%
i.分科会テーマ	52	76.5%
j.分科会登壇者	24	35.3%
合計回答数	175	
合計回答者数	68	

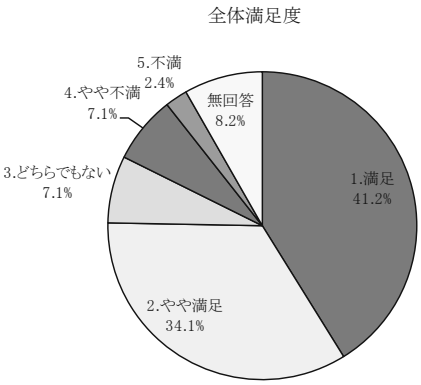


※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っ ているため 合計しても 100%にはなりません

(5) 満足度

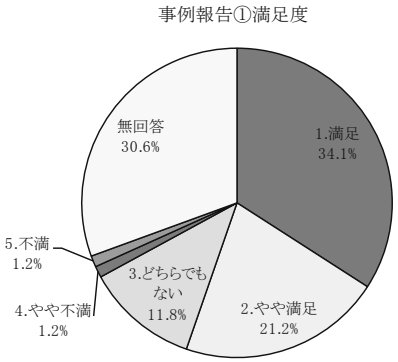
◆フォーラム全体

	回答数	比率
1.満足	35	41.2%
2.やや満足	29	34.1%
3.どちらでもない	6	7.1%
4.やや不満	6	7.1%
5.不満	2	2.4%
無回答	7	8.2%
合計	85	



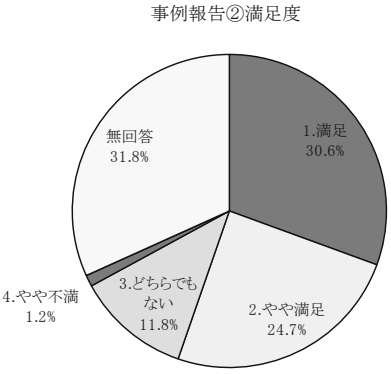
◆事例報告①

	回答数	比率
1.満足	29	34.1%
2.やや満足	18	21.2%
3.どちらでもない	10	11.8%
4.やや不満	1	1.2%
5.不満	1	1.2%
無回答	26	30.6%
合計	85	



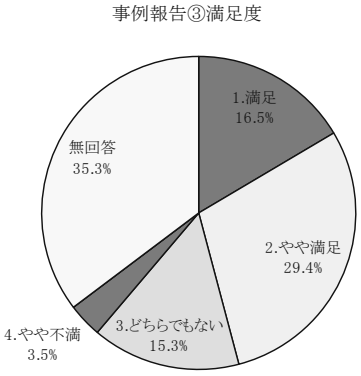
◆事例報告②

	回答数	比率
1.満足	26	30.6%
2.やや満足	21	24.7%
3.どちらでもない	10	11.8%
4.やや不満	1	1.2%
5.不満	0	0.0%
無回答	27	31.8%
合計	85	



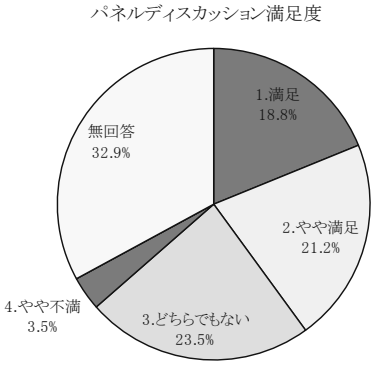
◆事例報告③

	回答数	比率
1.満足	14	16.5%
2.やや満足	25	29.4%
3.どちらでもない	13	15.3%
4.やや不満	3	3.5%
5.不満	0	0.0%
無回答	30	35.3%
合計	85	



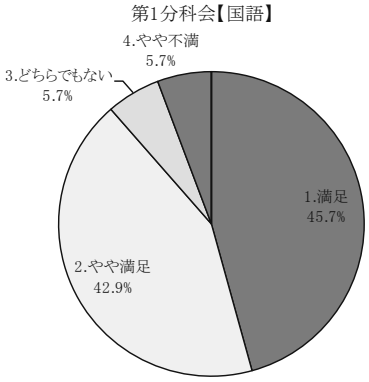
◆パネルディスカッション

	回答数	比率
1.満足	16	18.8%
2.やや満足	18	21.2%
3.どちらでもない	20	23.5%
4.やや不満	3	3.5%
5.不満	0	0.0%
無回答	28	32.9%
合計	85	



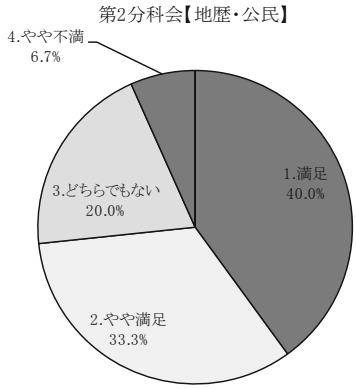
◆第１分科会【国　語】

	回答数	比率
1.満足	16	45.7%
2.やや満足	15	42.9%
3.どちらでもない	2	5.7%
4.やや不満	2	5.7%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	



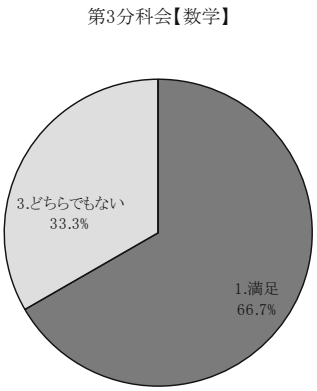
◆第２分科会【地歴・公民】

	回答数	比率
1.満足	6	40.0%
2.やや満足	5	33.3%
3.どちらでもない	3	20.0%
4.やや不満	1	6.7%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	



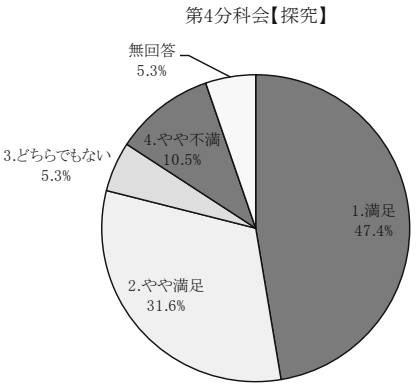
◆第３分科会【数　学】

	回答数	比率
1.満足	2	66.7%
2.やや満足	0	0.0%
3.どちらでもない	1	33.3%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	3	



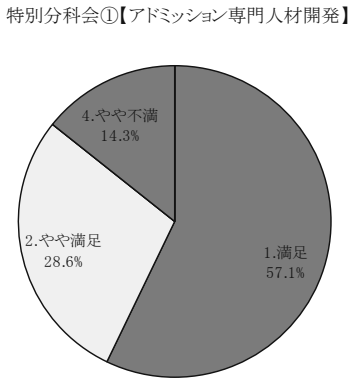
◆第４分科会【探　究】

	回答数	比率
1.満足	9	47.4%
2.やや満足	6	31.6%
3.どちらでもない	1	5.3%
4.やや不満	2	10.5%
5.不満	0	0.0%
無回答	1	5.3%
合計	19	



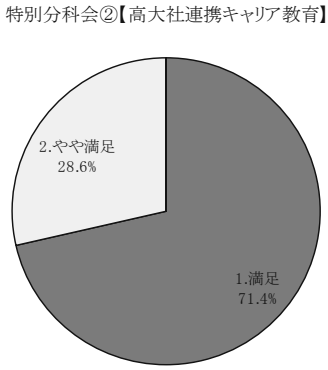
◆特別分科会①【アドミッション専門人材開発】

	回答数	比率
1.満足	4	57.1%
2.やや満足	2	28.6%
3.どちらでもない	0	0.0%
4.やや不満	1	14.3%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	



◆特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

	回答数	比率
1.満足	5	71.4%
2.やや満足	2	28.6%
3.どちらでもない	0	0.0%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	



（６）ご感想やご希望、その他ご意見（抜粋）

フォーラム全体

・疑問を抱いていた内容について、新たな気付きを得られた。
・興味深い取り組みを知り、視野を広げることができた。
・高大連携（特に高校の改革）の現状がよく分かった。大学関係者にとって高校の現状を知るのにまたとない機会だった。
・今後の学校運営上で参考になることが多かった。
・今後の教育実践に参考になることがあった。
・先進的な実践をなさっている高校・大学の具体的な事例報告を拝聴することができて、大変勉強になった。
・大変分かりやすくお話しいただき、今後の授業で常に念頭に置きたいキーワードを複数見つけることができた。
・知りたいことを知ることができた。

事例報告①

・２人の若手教員に精神を伝え、それを担当してもらい、他の教員に伝えていくことで、学校全体としてこの取り組みを根付かせていこうという実践のエネルギーを感じた。
・やってみたい事例がそのまま具体的に説明された。
・学校全体で取り組むことの重要性、組織づくり、体制の構築がいかに大切かよく分かり、校長にもしっかりと自信をもって進言できる。
・吟味・評価するために何が必要なのか、よりよい判断をするために必要なことを知れた。
・実践例として興味深い内容であった。
・職場に根ざした実践だと思った。
・生徒に付けたい資質･能力を具体的にイメージすることができた。
・分かりやすく具体的な実践が参考になった。
・論理的思考力・判断力・表現力の育成について、その理論と具体が示されていて分かりやすかった。
・澤井先生の「主体性を掘り起こす」という言葉に学校の探究の理念を感じることができ、大変共感する部分が多く、具体的な事例報告が大変勉強になった。

事例報告②

・教職員や生徒に対して、探究型授業の意義をしっかり、時間をかけて伝えている部分が素晴らしいと思った。ICE モデルやパフォーマンス課題についても大変勉強になった。
・参考になる資料が充実していた。
・授業デザインシートが指導と評価の一体化に生かせると思った。
・生徒の様子がよく分かる発表だった。
・探求能力の育成に関する具体的実践例をご紹介いただき、とても参考になった。
・長年の地道な取り組みを経た実践報告には、参考になるべき点が多かった。教育の今日的課題を教員だけではなく、生徒とも共有したという点が素晴らしいと思う。
・高校普通科で探究の授業をする課題とそれを克服する道筋が示された。
・大学に所属しているため、現在の高校教育についてお聞きする機会がなかなかなく、探究の授業の取り組みを初めて知った。主体的な学びの機会が増えていることは、大学での学びにスムーズに入れることにつながると思うので、今後も継続していただきたいと思った。

事例報告③

・千葉大学がこんなにもたくさんの労力をかけて、高校生に対して学びの扉を開いていること、初めて知った取り組みも多かったので感銘を受けた。本県でも高大接続の目標にさせていただきたいと思った。

・千葉大学の「飛び級入学」やＧスキッパーのような独自の大胆な試みを、ぜひ他の大学でも行ってほしいと思う。

・大学からの高大連携のお考え等をお聞きすることができ、よかった。

・大学での具体的な事例は大変参考になる。入学の方法の多様性、学びの多様性については、今後も求められることであり、本学でも多様な入試の多様性の拡張、ラーニングコモンズの拡大について検討されているところだ。

・高大連携の取り組みが盛んで参考になる。

・国立大学でも高大連携に積極的に取り組んでおられることが分かった。

・千葉大学のさまざまな取り組みについての現状や意図などを知ることができ、よかった。

・知らないだけで、高校生の学びの場は多く存在しており、とてもよいと思った。

パネルディスカッション

・やりとりを経て論点が明確になり、理解が深まった。

・事例報告だけでなく、お互いの発表から得られた新たな視点の報告があった。

・質問に対しても分かりやすく説明してくださった。

・それぞれのお立場からの率直なお話をお聞きできたので、よかった。

・それぞれのパネリストの先生方の熱い思いを伺うことができて、大変有意義だった。

・もう少し、深く入り込んだお話が聞きたかった。少し時間が短く感じた。

・発表の中では分からなかった疑問等が解決できたのでよかった。

第１分科会【国　語】

・スライドを使って分かりやすくゆっくりと説明してくださり、国語科の指導について学ぶことができた。

・生徒に論理的文章を読ませる時に、２つの観点を持って読むことで、根拠を基に自分の考えを表現する力の育成につながることがよく分かったので、今後の授業に生かせると思った。

・理論と実践が統合された充実した発表を拝聴でき、これからの取り組みの具体的な指針を得ることができた。

・授業での具体的な生徒の発言などが聞けて、なかなか面白かった。

第２分科会【地歴・公民】

・大変深く探究授業について学ばせていただいた。より具体的実践例と理論と双方を学ぶことができ、大変有意義だった。

・大変な職場環境の中で、めげずに一生懸命、教育実践に取り組んでおられることに感銘を受けた。

・今後の教育実践の参考になった。

・若手が頑張っているのが刺激・励みになった。

第３分科会【数　学】

・今後の授業の中で実践してみたいことが見つかった。

・実践事例を参考にできる。

第４分科会【探　究】

・QFT について改めて流れや実施方法を実感することができた。

・とても面白い内容だった。

・より知りたいと思えた。また有効な取り組みだと感じた。

・ワークショップ形式も取り入れて、参加者が積極的に参加できる形であり、内容も参考になるものであった。

特別分科会①【アドミッション専門人材開発】

・アドミッション業務担当者が直面している課題がテーマとして扱われており、現場ですぐにでも応用できる実践的な内容だった。

・限られた時間だったが、非常に参考になった。

・資料を含め分かりやすく工夫されていた。

・入学者選抜に関わる事務職員ではなかなか知る機会がない入試検証・面接設計等の手法の視点を教えていただけた。国立大学法人にいると「教員任せ・学部任せ」になってしまう事務職員の課題・問題意識の持ち方の甘さを改めて実感する機会となり、とても刺激的だった。

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

・生徒・学生の成長のあり方が興味深かった。

・大変参考になった。高校生、大学生の可能性、底力を実感した。

・フューチャーセッションを企画実施された高校生・大学生の学びについてよく分かった。また、変化する社会の中で高校生・大学生がどのように感じるのか、そういった「声」を知ることができたことがよかった。質問に対しても丁寧に取り上げていただき、大変感謝している。

・高校生、大学生の生の声を聴けて、貴重な機会だった。高校生でもしっかりした意見や考え方をきちんとまとめて（しかも自分の言葉で）発表されているのが印象的で、このフォーラムでの成長も大きかったのではと推察された。

２０２０年度　京都高大連携研究協議会　役員・委員一覧

■役員会

会長	黒　坂　　光	（大学コンソーシアム京都 理事長/京都産業大学 学長）
副会長	橋　本　幸　三	（京都府教育委員会 教育長）
副会長	在　田　正　秀	（京都市教育長）
	佐々井　宏　平	（京都府私立中学高等学校連合会 会長/京都学園中学高等学校 校長）
	小　川　雅　史	（京都府立高等学校長会 会長/京都府立嵯峨野高等学校 校長）
	吉　田　　功	（京都市立高等学校長会 会長/京都市立銅駝美術工芸高等学校 校長）
	北　村　　聡	（京都府私立中学高等学校連合会 副会長/京都外大西高等学校 校長）
	鈴　鹿　且　久	（京都商工会議所 常議員/株式会社聖護院八ツ橋總本店 代表取締役社長）
	平　岡　　聡	（京都文教短期大学 学長）

■運営委員会

委員長	林　　信　康	（京都府私立中学高等学校連合会 理事/京都女子中学校・高等学校 校長）
	永　井　宏　和	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 首席総括指導主事）
	谷　内　秀　一	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 首席指導主事）
	中　村　則　和	（高等学校コンソーシアム京都 事務局長）
	中　西　紳　也	（京都府私立中学高等学校連合会 監事/京都廣学館高等学校 校長）
	長谷川　　豊	（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長/京都府立大学 公共政策学部 准教授 ）
	大　秦　一　浩	（大学コンソーシアム京都 教育開発事業部長/大谷大学・短期大学部 教育推進室 副室長 ）
	伊勢戸　　康	（大学コンソーシアム京都 事務局長）

■事務局

藤　田　五　樹	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事）
景　山　晋之介	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 主任指導主事）
岡　本　弘　嗣	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）
室　　保　次	（京都府私立中学高等学校連合会 事務局長）
荻　野　達　也	（京都商工会議所 総務部 部長）
公益財団法人大学コンソーシアム京都 教育開発事業部	

※2020 年度の京都高大連携研究協議会事業の企画・検討は、以下に付託する。

◇高大連携推進室

室長	長 谷 川　　豊	（京都府立大学 公共政策学部 准教授）
	佐　藤　賢　一	（京都産業大学 生命科学部 教授）
	鮫　島　輝　美	（京都光華女子大学 健康科学部 准教授）
	塩　瀬　隆　之	（京都大学 総合博物館 准教授）
	杉　岡　秀　紀	（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
	玉　井　鉄　宗	（龍谷大学 農学部 講師）
	細　尾　萌　子	（立命館大学 文学部 准教授）
	山　本　以和子	（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

第 18 回高大連携教育フォーラム

「教育の接続」としての入試改革Ⅱ

～高校教育の指導と評価が変わる ― 高校・大学は入試と教育にどう向き合うか～

報告集

2021 年 3 月発行

京都高大連携研究協議会

京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第18回 高大連携教育フォーラム